山形県埋蔵文化財調査報告書第57集

町下遺跡

発掘調査報告書

1981
山形県
山形県教育委員会

町下（まちした）遺跡

発掘調査報告書

1981
山形県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和56年度に実施した県営ほ場整備事業白川右岸地区にかかる『町下遺跡』の発掘調査結果をまとめたものであります。

発掘調査では、縄文時代後期の住居跡をはじめ、多くの土器・石器などが出土し、先人の生活や自然とのかかわりをたどる貴重な手がかりを得ることができました。自然に根ざし、厳しい環境と融和一体となる心豊かでたくましい生活ぶりがしのばれる所であります。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの困難な問題がありますが、この両者の調整を行い、埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題と考えます。県教育委員会におきましては、生活文化の向上、地域環境の整備など、同じ立場からこれらの調整を行い、今後とも埋蔵文化財の保護のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、本調査にご協力をいただいた飯豊町教育委員会並びに関係各位に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和57年３月

山形県教育委員会
教育長　大竹　正治

例　言

1　本報告書は、山形県農林水産部の委託を受け、山形県教育委員会が昭和56年度に実施した県営ほ場整備事業白川右岸地区に係る『町下(まちした)遺跡』の発掘調査報告書である。発掘調査期間は、昭和56年4月20日から同年6月19日までの延べ38日間である。

2　調査にあたっては、飯豊町教育委員会・置賜北部土地改良事務所・白川土地改良区などの関係諸機関の協力を得た。記して感謝申し上げる。

3　調査体制は下記の通りである。

調査主体　山形県教育委員会
調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者　佐々木洋治（主任調査員）　阿部明彦（現場主任）　長橋　至　中嶌　寛　渡辺　修（調査員）　〔山形県教育庁文化課〕
事務局　事務局長　浜田　清明　〔山形県教育庁文化課課長〕
事務局長補佐　荻野　和夫　〔山形県教育庁文化課課長補佐〕
事務局員　設楽周一郎　田内糸子　〔山形県教育庁文化課〕

4　挿図縮尺は、遺構の住居跡・土壙1/60、集石遺構1/40、埋設土器1/20とし、遺物については、土器実測図1/4、土器拓影図1/3、石器実測図1/2、を基本とした。図版の遺物については、完形土器1/4、土器破片1/2（縄文後期）1/4（縄文中期）、打製石器他石製品1/2、礫石器1/4とした。

挿図・本文の記号は、ＳＴ－住居跡、ＥＰ－柱穴、ＥＬ－炉跡、ＳＫ－土壙、ＳＭ－集石遺構、ＥＵ－埋設土器、ＳＤ－溝跡、ＳＸ－性格不明土壙、ＲＰ－土器・土製品、ＲＱ－石器・石製品、Ｇ－グリッド、Ｆ－遺構覆土を示す。

5　本報告書の作成は、阿部明彦・長橋至が担当し、Ⅰ－1、Ⅴ・Ⅵ－2・3を阿部、その他を長橋が各々分担している。全体については佐々木洋治が総括し、編集は渋谷孝雄が行った。また、現地調査～報告書作成を通じて以下の方々からご協力を頂だいた。銘記して感謝申し上げる。安孫子昭二、会田容弘、金子裕之、佐藤庄一、佐藤正四郎、片桐憲司、田制寛一、佐藤秋夫、松井章。（順不同敬称略）

目　次

I　調査の経緯

1　調査に至る経過……1

2　調査の経過……1

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地……3

2　周辺の遺跡……3

III　遺跡の概観

1　遺跡の層序……4

2　遺構と遺物の分布……4

遺　構……4

遺　物……7

IV　遺　構

1　住居跡……10

2　土　壙……23

3　集　石……26

4　埋　甕……27

V　遺　物

1　土　器……28

2　石　器……47

3　石製品・土製品……54

4　打製石斧の使用痕

アスファルト附着痕……54

VI　ま　と　め

1　遺　構……57

（a）住居跡……57

（b）土壙・集石遺構……58

（c）その他の遺構……58

2　遺　物……59

（a）土　器……59

（b）石　器……60

（c）土製品・石製品……61

3　遺　跡……61

挿　図　目　次

第1図　町下遺跡全体図……2

第2図　遺跡位置図・分布図……3

第3図　土層柱状図……4

第4図　A地区遺構配置図……5

第5図　B地区遺構配置図……6

第6図　A地区遺物出土状況概念図……9

第7図　第1号住居跡……11

第8図　第2号住居跡……13

第9図　第3号住居跡……15

第10図　第4a・4b号住居跡……17

第11図　第5a号住居跡……19

第12図　第5b号住居跡……21

第13図　第6号住居跡……22

第14図　土　壙……25

第15図　集　石……26

第16図　埋　甕……27

第17図　土器模式図（SK 216内一括出土）……28

第18図　土器拓影図（1）……29

第19図　第IV群土器破片分類図……30

第20図　土器拓影図（2）……37

第21図　土器拓影図（3）……38

第22図　土器拓影図（4）……39
第23図　土器拓影図（5）……40
第24図　土器拓影図（6）……41
第25図　土器拓影図（7）……42
第26図　土器拓影図（8）……43
第27図　土器拓影図（9）……44
第28図　土器実測図……45
第29図　土器底部実測図……46
第30図　石器分類図……48
第31図　石器実測図（1）……51
第32図　石器実測図（2）……52
第33図　石器・石製品・土製品実測図…53
第34図　打製石斧使用痕位置図……55

図　版　目　次

図版1　遠景・近景・基本層序
図版2　トレンチ・A地区プラン・完掘
図版3　ST1～3・SK87
図版4　ST4a・4b・5a・5b
図版5　SM60・70・194
図版6　B地区完掘・SK201
図版7　EU230
図版8　SK1・2・9・10
図版9　SK11・24～26・29・47・51・31
図版10　SK48・86・87・175・216他
図版11　EU・SK22・224
図版12　出土土器（1）縄文中期末・後期末
図版13　出土土器（2）縄文早前期・後期末
図版14　出土土器（3）縄文後期末
図版15　出土土器（4）縄文後期末
図版16　出土土器（5）縄文後期末
図版17　出土土器（6）縄文後期末
図版18　出土土器（7）縄文後期末
図版19　出土土器（8）縄文後期末
図版20　出土土器（9）縄文後期末他
図版21　出土土器（10）縄文後期・晩期末
図版22　出土土製品
図版23　田制寛一氏・斉藤清一氏採集石器
図版24　出土石器（1）石鏃・石錐・岩板他
図版25　出土石器（2）石匙
図版26　出土石器（3）打製石斧
図版27　出土石器（4）打製石斧
図版28　出土石器（5）打製石斧基部・刃部
図版29　アスファルト痕・打製石斧使用痕
図版30　出土石器（6）掻・削器
図版31　出土石器（7）磨石・凹石・石皿
図版32　出土石器（8）石匙・篦状石器

附　表

表－1　出土遺物数一覧……7
表－2　主要遺構出土遺物数一覧……8
表－3　遺構における土器類別組成……36
表－4　石器計測表……51
表－5　山形県内縄文後期住居跡一覧…58

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

町下遺跡の発見は、地元の斎藤清一氏、田制寛一氏らの手によるもので、昭和37年に県下一斉の遺跡台帳作成時に正式に登録された。その時の記録には、「松原部落の道路の十字路より0.5km西方、平地の如くであるが、地形的には段丘である。海抜220m、畑地であり‥‥」と記され、特に墓地のある南東部（今次調査B地区）の畑地等、周囲より一段高い畑地部分が注意されていた。斎藤氏の採集遺物は、その大半がこの地点からであるらしい。田制氏の採集品も同様と考えられるが、むしろ北西の畑、および一段下の水田（今次調査A・C地区）を主体とするらしく、遺物の中では水田中から発見されたという勾玉様石器等が注目される。(図版23・第33図27)

こうした遺跡を含む一帯の地域が昭和56年度県営ほ場整備（白川右岸地区）に係る事となり、山形県教育委員会では昭和55年10月に遺跡分布・試掘調査を実施した。その結果、町下遺跡は、縄文時代後期～晩期にかけての集落跡である事が推定され、同時にその規模等の概略についても明らかとなった。これにもとづき、県教委では県農林水産部他関係機関との協議・調整を進めたところ、事前に緊急発掘調査を行うことになったものである。

2　調査の経過

調査は、遺跡範囲・調査対象地区を考慮して、遺跡の立地する段丘全体をカバーするグリッドを設定した。グリッドは県営ほ場整備に付随する水路、計画道路のセンター抗列を基本に南北方向をY軸、東西方向をX軸とし、2m単位で番号を付した。Y軸はN－20°－Wを計る。グリッド設定後、遺構・遺物の分布状況を確認するため、グリッドに沿って2×2mの坪掘区、幅2m・総延長250mのトレンチを東西・南北方向に入れた。その結果、60～75－45～65グリッド、50－50グリッド付近、82～87－65～74グリッドの3地点に遺構・遺物が密集することが認められた。基本的には白川右川の中位河岸段丘でやや北へ張り出す60～75－45～65グリッドが遺跡の中心部と考えられたため、この地区をA地区として調査の主体を置いた。さらにA地区の南東部のB地区（約200㎡）、調査終了近くにA地区北西の低位段丘のC地区（約40㎡）についても調査をおこなった。A地区は10×10mを単位として精査地区を設定し遺構の広がり等で随時拡張し、最終的には756㎡まで拡張した。

精査の結果、A地区ではほぼ全面に遺構が発見され、重複する住居跡を主体に、土壙、集石などが検出された。B地区では性格不明の落ち込み遺構、埋設土器等が検出され、C地区では小破片の土器が大量に出土した。なお、調査期間中の6月12日に「現地説明会」を催し、多数の町民の参加を得た。

第1図　町下遺跡全体図

II　遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地

高峰飯豊連峰の東北斜面に源を発するいくつかの小水系は須郷付近で合流し白川本流を形成し東北方面へ流れ出す。手の子付近で平野部に出てやがて松川と合流し最上川へと発展する。源流から合流点まで約50km程だが、この流域には白川により形成された河岸段丘が発達しており、そのうちの高・中位段丘には遺跡が多い。

町下遺跡は、白川中流右岸の低位～中位段丘上に立地しており、現在地目は畑地・水田である。ほ場整備後は遺跡主体部の立地する中位段丘部は削平され、低位段丘のレベルで水田が広がる予定である。

2　周辺の遺跡

白川流域には河岸段丘上に数多くの遺跡が分布している。上流部では中津川上屋地遺跡（旧・中石器時代）、数馬遺跡（縄文時代晩期）などがある。本遺跡付近の白川中流域の中位～高位段丘上には小白川、野山Ⅰ～Ⅴ遺跡などがあり、『山形県史』や林謙作氏等が縄文時代前期初頭の遺跡として取り上げ、注目されている。その他、現在までに調査・報告されている遺跡として、飯豊町萩生東北約100mの石箱遺跡（縄文時代前・中期末）、同裏山Ⅰ・Ⅱ遺跡、郡の上遺跡がある。

白川水系の段丘上には旧石器～縄文晩期まで32の遺跡が確認されており、水系の漁労あるいは、背景の山々の豊かさによりこれら遺跡群が展開していったことが伺える。

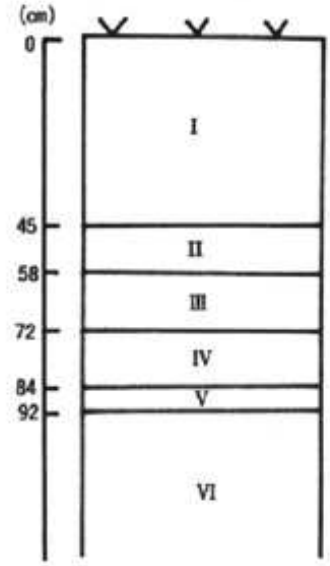
番号	遺跡名	時期
1	町下	縄文
2	裏山Ⅱ	〃
3	上野	〃
4	横山	〃
5	堰場	〃
6	下野	〃
7	契約堰	〃
8	野山Ⅰ	〃
9	〃 Ⅱ	〃
10	〃 Ⅲ	〃
11	〃 Ⅳ	〃
12	〃 Ⅴ	〃
13	才先林	〃
14	裏山Ⅱ	〃

第2図　遺跡位置図・分布図

III　遺跡の概観

1　遺跡の層序

遺跡の基本層序は、地山ローム層までは概ね耕作土１層である。特に、遺構の集中するＡ・Ｂ地区は畑地であり、段丘全体が一部地山層まで攪乱されていた。そのため、一次的な層序の遺存は極めて断片的であり、遺物包含層はほとんど認められない状況である。Ａ・Ｂ地区の基本的な層序は上から、第Ｉ層…暗褐色耕作土（30～45cm）、第II層…黄褐色砂質土（10～20cm・上層に、やや暗褐色微砂をブロック状に若干含む）、第III層…黄褐色砂質土（15～20cm・やや粒子が粗く、２～３cmの礫を大量に含む）、第IV層…黄褐色微砂（10～15cm・やや赤味を帯び粘性がある）、第Ｖ層…黄褐色砂（８～10cm・粒子の粗い砂礫層）、第VI層…黄褐色砂礫（拳大の礫を大量に含む）となっており、遺構確認面は第II層、各遺構は第II層～III層を掘り込んで構築されている。Ｃ地区は水田耕作土下位に黒褐色土の堆積がみられ、黒褐色土中に土器片が大量に含まれている。



第３図　土層柱状図

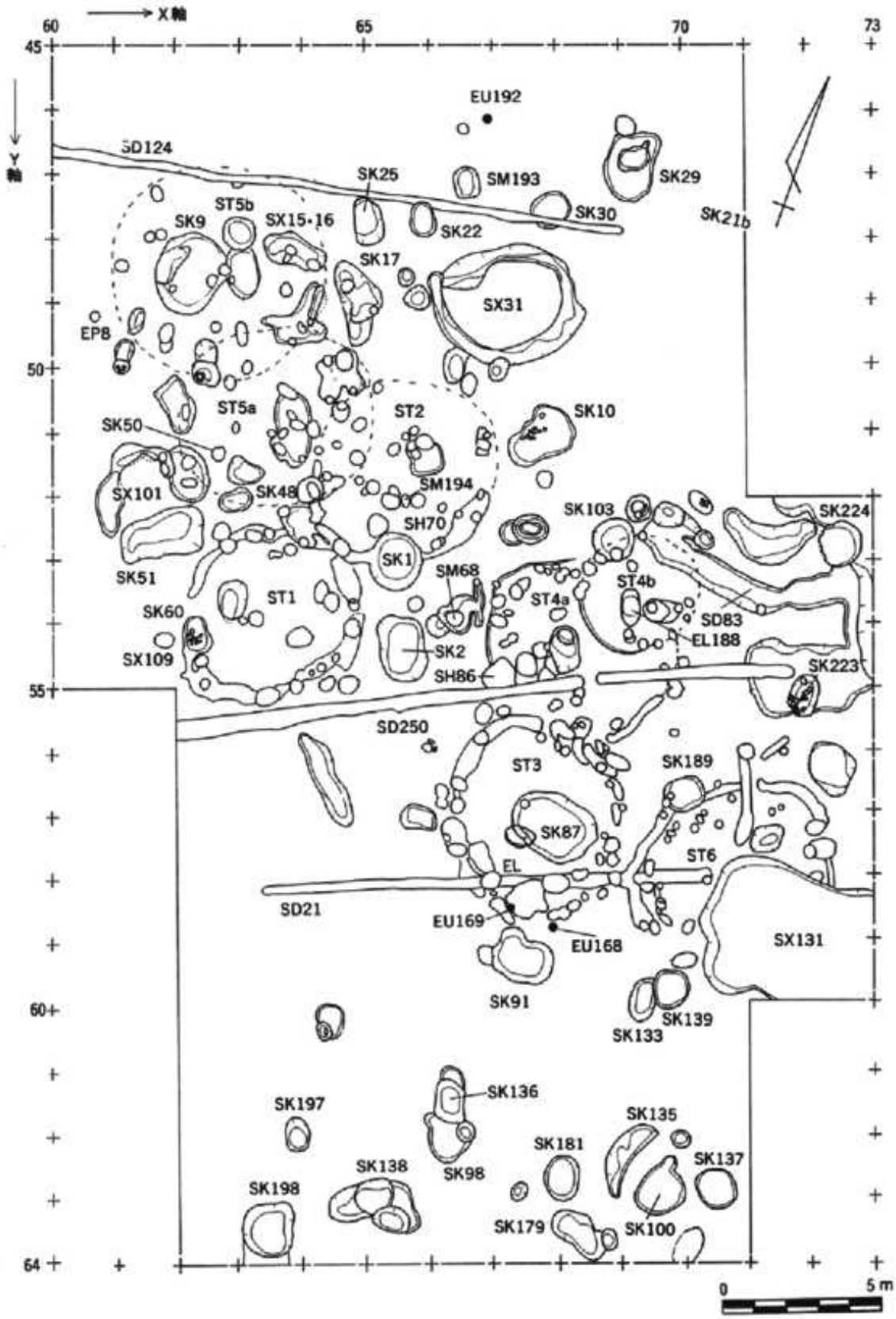
2　遺構と遺物の分布

遺　構

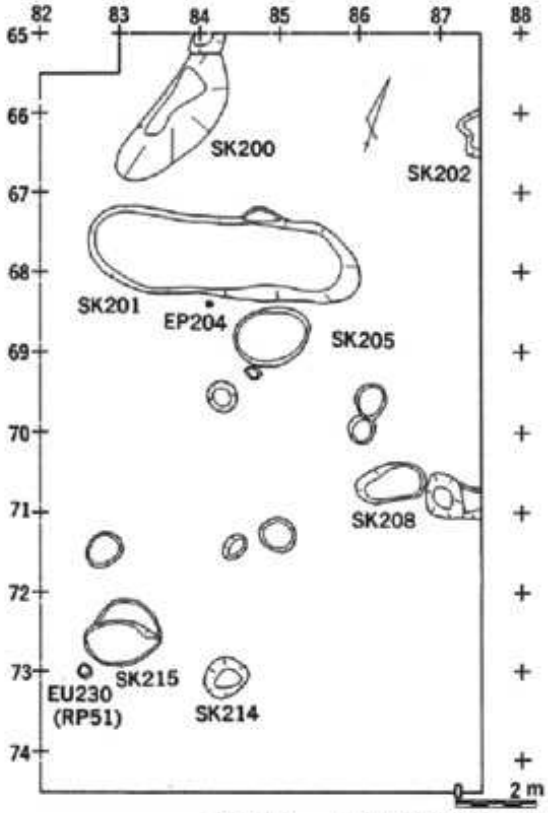
（Ａ地区）

60～72—45～63グリッド、756㎡の精査地区である。遺跡は、白川右岸の低位段丘および低位段丘より比高約２mの中位段丘まで広がりを持つと考えられるが、Ａ地区は、この中位段丘上で本遺跡の中心部と考えられる地点である。耕作等で第１次的な堆積土はほとんど認められず、表土（第Ｉ層）の粗剝ぎ後、直ちに面整理、精査に入った。

検出された遺構は、住居跡８棟、土壙、ピット、溝跡、ロームマウンド、集石、性格不明遺構である。住居跡は壁の立上りが認められるもの２棟（ＳＴ4a・4b）、周溝の認められるもの５棟（ＳＴ１・２・３・4a・６）、ピット列からプランを追ったもの２棟（ＳＴ5a・5b）である。このうち、ＳＴ３およびＳＴ4bで焼土が認められた。なお、ＳＴ６はＳＸ131により約３分の１が攪乱を受けている。これら住居跡は、調査区の中央部南東—北西方向に一部重複しながら位置しており、やや張り出す中位段丘縁辺に沿う配置である。時期的には縄文時代後期末葉と考えられる。土壙は約80基検出されたが、調査区中央部に住居跡と重複して散在する一群と調査区南側に散在する一群が認められる。時期的には縄文時代後期末葉が主体であるが、ＳＫ224は中期後葉の所産である。溝跡は東西方向に走る幅30～40



第4図　A地区遺構配置図



第５図　Ｂ地区遺構配置図

cm、深さ20～40cm程のもの３基が検出されたが、このうちＳＤ124・250は後世の所産であり、ＳＤ21は縄文時代の所産である。集石遺構は第Ⅱ層上面で４基、土壙内に３基認められた。この他、ロームマウンド（ＳＸ31・ＳＸ101）、性格不明落込み遺構（ＳＸ131）などが検出された。また、４基の埋設土器も検出された（ＥＵ125・168・169・192）。

（Ｂ地区）

82～87―65～74グリッド、約200㎡についての精査地区である。Ａ地区の南東約30m、Ａ地区同様中位段丘上で地目は畑地、一部墓地となっている。前年度試掘調査で埋設土器が検出されたため拡張したものである。

精査の結果検出された遺構は、埋設土器（ＥＵ230）、ピット９、土壙10基であり、住居跡は確認されなかった。ＳＫ200、ＳＫ201は不整楕円形を呈し、覆土は黒褐色土１層であり、試掘段階で埋設土器とされた遺物は、ＳＫ201覆土内出土であったことが調査の過程で判明した。なお、ＳＫ200については人為的に構築された遺構ではなく、ロームマウンドの可能性がある。調査区中央部に散在するピットは、いずれも浅く、ピット列により住居跡を構成し得るものではない。

（Ｃ地区）

50―50グリッド付近、約40㎡の拡張区である。Ａ地区・Ｂ地区の立地する中位段丘面より約２m程低い、低位段丘にある。位置的にはＡ地区より続く中位段丘の北西、段丘縁辺の直下になる。トレンチ、坪掘段階で比較的多量の遺物が確認されたが、立地的に遺跡の中心部と考えられないため、調査終了間際、一部拡張し、状況を確認したに留まる。

検出された遺構は、径３～４m程の不整形の落ち込み２基、皿状の浅い土壙１基である。覆土はすべて黒褐色粘質微砂の単一層であり、覆土中に遺物を含んでいた。Ｃ地区と同じレベルの低位段丘上には、この地区の他、遺構、遺物はほとんど確認されなかった。なお、本遺跡北東約200m付近（低位段丘・地目水田）は、過去に遺物の散布が認められたとして堰場遺跡の名で周知されているが、出土状況等不明な点が多いため調査対象外とした。

遺　物

出土した遺物は整理箱に約30箱を数え、それらは縄文式土器（早・前期、中期末葉、後期末葉、晩期後葉が出土している。主体は後期末葉である。）・土製品・石器などである。遺物は、遺跡自体に第1次的層序の堆積がほとんど認められない点もあり、大半は、第II層直上・ピット・土壙等、各遺構内覆土層より出土した。遺物の総数は表一1に記載した通りであるが、土器片数については、接合可能な土器、あるいは時期的に若干異る土器片も一括して含めた数値である。土製品はすべて「耳飾り」、石器はフレイク・チップである。なお、岩板が1点出土した。

表一1　出土遺物一覧

地区	地　点	土器片	RP	石器（フレイク・チップ）	RQ
A地区	遺構内	4,993	23	1,792	58
	第Ⅰ層	978	0	1,434	26
B地区	遺構内	344	3	189	4
	第Ⅰ層	179	0	142	0
C地区	遺構内	630	0	357	5
	第Ⅰ層	592	0	291	11
トレンチ(拡張区外)		82	0	183	5
出土地点不明(表採含む)		186	1	126	6
計		7,984	27	4,514	115

◎すべての遺物を統計している。
◎石器には、フレイク、チップの他、集石を構成する礫も含む。
◎RPは、土器(完形又は完形に近いもの、重要と思われる遺物)
　RQは、石器（トゥール、礫石器）。
◎トレンチ―全体図（第1図参照）。

（A地区）

土器は全体の75%、石器は71%が出土した。第Ⅰ層及び第II層直上出土の遺物は、A地区全体をみた場合、土器で約16%、石器で約45%であり、遺構覆土内出土遺物が多い。特に、SK1、SK9、SK10、SK30、SK48、SK76、SX131の各遺構より比較的大量の遺物が出土している。これらは、すべて縄文時代後期末葉に位置づけられるもので、他の遺構覆土内出土遺物、地山直上出土遺物もほぼ同時期に置かれるものである。時期的に異る遺物としては、調査区東側隅のSK216覆土内出土の土器群がある。これは、縄文時代中期後半から末葉に位置づけられるもので、器種・文様等注目できる一括資料である。

なお、第6図は、A地区出土の遺物（完形もしくは完形に近い土器・土製品・石器等）についてその出土地点を概念的に図示したものである。

（B地区）

土器は523点、石器は331点出土した。遺構内出土はそのうち土器では65%、石器では57%である。SK200・204より縄文時代晩期大洞A式の土器片が数点出土した他は時期的には後期末葉に置かれる土器群がほとんどを占める。また、SK200からはRQ40・41・42の出土もあった。また82―72～73グリッドでは埋設土器（完形）1基が検出された。

（C地区）

黒褐色微砂の覆土を有する不整形の落込み遺構内を中心に合計で土器片1222点、石器が648点出土した。全体に小片が多く、また、これら遺構は遺跡内の位置から、不要となった遺物の廃棄された地点の可能性が考えられる。時期的には後期末葉が主体である。

表－2　主要遺構出土遺物一覧

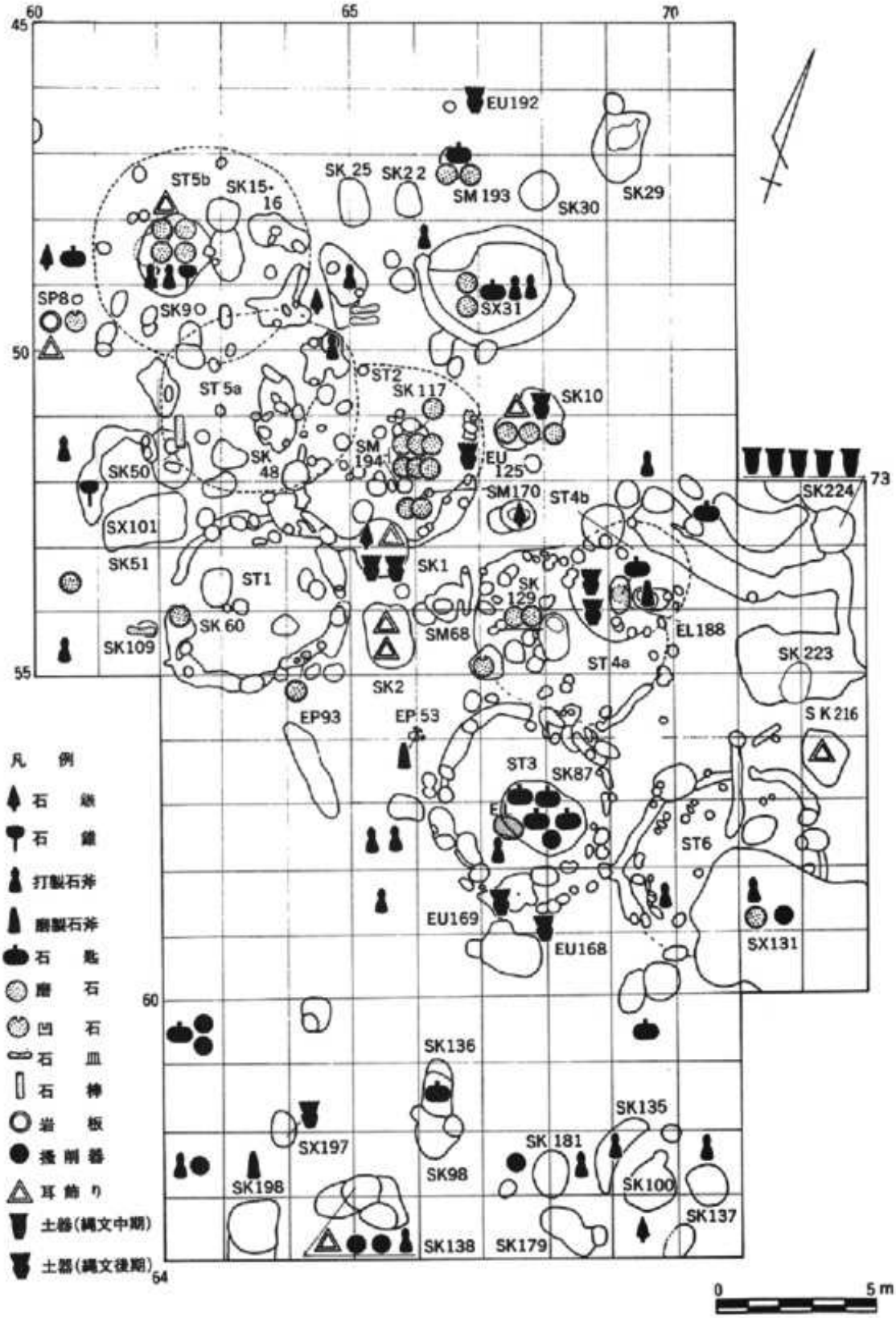
遺　構	出土土器片数	RP	出　土石器数	RQ	備　　考	遺　構	出土土器片数	RP	出　土石器数	RQ	備　　考
SK　1	164	3	66	1	RP55・58・69 RQ 1	SK109	0	0	1	1	RQ85
SK　2	21	2	67	0	RP113・114	SK117	0	0	0	1	RQ74
SP　8	0	1	14	2	RQ55・75 RP111	EU125		1			RP59
SK　9	831	1	295	7	RQ21・23・28・76・77・78・79 RP119	SK129	60	0	6	2	RQ57・58
SK 10	710	2	70	3	RP67 RQ59・60・62	SX131	196	0	249	3	RQ86・87・88
SK 17	36	0	18	1	RQ26	SK135	51	0	36	1	RQ91
SK 18	12	0	6	2	RQ80・81	SK136	0	0	5	1	RQ39
SK 19	66	0	14	1	RQ22	EU168		1			RP62
SK 22	30	1	0	0	RP73	EU169		1			RP61
SK 30	119	0	10	0		EP174	12	0	2	1	RQ 8
SX 31	96	0	37	5	RQ24・25・82・83・105	EP187	0	0	1	1	RQ32
SK 48	218	0	18	0		EU192		1			RP60
SK 50	15	0	10	1	RQ92	SM194	0	0	30	6	RQ64・65・66・67・68・69
SK 51	89	0	30	0		SK197	15	1	19	0	RP68
SK 53	5	0	7	1	RQ84	SK216	143	1	86	0	RP71
SK 60	2	0	0	1	RQ56	SK224	46	5	26	0	RP63・64・65・66・67
SK 63	51	0	15	0		ST 46		2			RP5・57
SM 68	0	0	9	0		SK200	0	0	0	3	RQ40・41・42
SM 70	6	0	7	2	RQ72・73	SK201	0	0	0	1	RQ44
SK 74	56	0	21	0		SK203	0	0	76	0	
SK 76	120	0	24	0		EU230			1		RP51
SK 86	32	0	1	0	RQ63	EU231			1		RP52
SK 87	67	0	47	5	RQ 9・34・35・36・38	EU232			1		RP53
SK 93	16	0	0	1	RQ61	A地区					下表参照
SK 98	89	0	24	0		B地区					〃
SX101	33	0	7	1	RQ31	C地区					〃

○掲載した遺構は、土器片又は石器片が50点以上出土したもの、あるいは、RP・PQの出土した遺構についてである。(SK－土拡　SM－集石　ST－竪穴住居)
○RPは、土器（完形又は完形品に近いもの、重要と思われる遺物)、RQは石器を示す。○RP・PQ番号は、挿図・図版の番号と一致する。
○町下遺跡出土遺物総数については表－1参照。
○出土石器は、フレイク・チップ・集石を構成する礫、である。

各地区第Ⅰ層出土遺物一覧

A地区	RQ　2・3・4・5・6・7・10・11・13・14 19・29・30・37・93・94・95・96・97・98 100・101・102・103・104	C地区	RQ45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・109・116・117・118・108・110　RP112
		トレンチ	RQ15・16・17・18・20
B地区	0	X－0	RQ12・33・52b・105・106・107　RP54

○トレンチ－全体図（第1図参照）　X－0出土地点不明



第6図　A地区遺物出土状況概念図

IV 遺 構

1 住居跡

1号住居跡 （第7図 図版3）

（遺構の確認）62～64—52～55グリッドに位置する。検出面は第II層上面である。

（平面形）南東側がやや張り出す楕円形を呈し、長軸6.8m・短軸5.2mを測る。

（壁）検出されない。検出面は第II層上面であるが、包含層あるいは第1次的な土層の堆積は認められないため壁の立上りは検出不能であった。ただし、第II層上面で後世の攪乱が止まっている点、他の住居跡床面に焼土（地床炉）が残存する点等を考慮すれば、本住居跡自体の床面もほとんど残っているものと推測されるため、壁は存在したと仮定した場合でも比較的浅い立上りであったと考えられる。

（床面）第II層上面でプラン（周溝・ピット）が確認されたため、明確に床面が残存するかについては不明な点がある。しかし、精査の過程での他の住居跡床面の状態、時期的な差違、レベル等を検討した結果、検出面でほぼ床面あるいは床面に極めて近いレベルで残存している可能性が強いことが推測された。また、全体に周溝内部は比較的堅い土層であった。検出面での状況は、北側にやや緩傾斜しており、南端部に比べ北端部では約10cm程低くなっていたが、本来の床面がこのような状況であったかについては不明な点が残る。

（周溝）ほぼ全周する。検出面からの深さは5～10cm程であり、断面はU字形を呈する。西側で一部切れるが、この部分は、住居跡の出入口になるかは不明である。

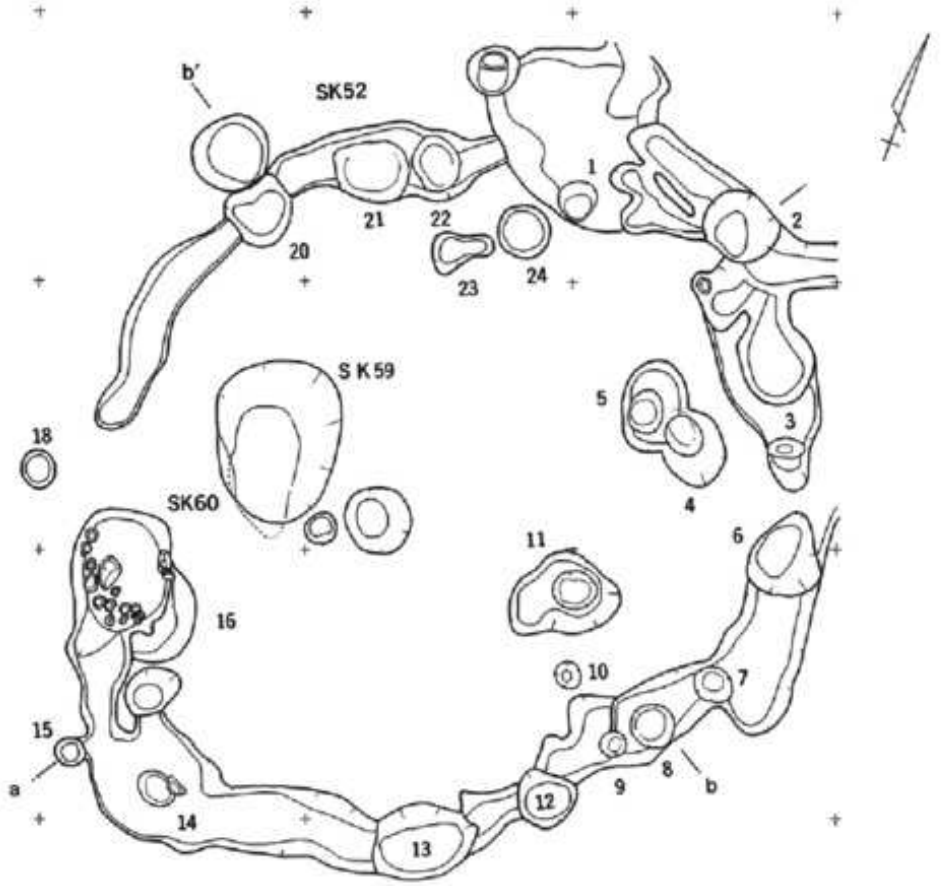
（柱穴）周溝と重複するピットを含めればプラン内に24個のピットがある。住居跡内部に散在するピットは比較的浅く、主柱穴とは成り得ない状況である。周溝と重複するピットが住居跡を構成する主たる柱穴と考えられた。そのうち、P—1・2・6・8・13・16が中心的な柱穴と考えられる。また、床面あるいは周溝と重複する土壙、SK9・60は本住居跡とは関連のない遺構である。

（炉）検出されない。焼土、炭化物あるいは石組炉であった場合の礫の抜き取り痕等も検出されなかった。

（その他の施設）検出されない。

（時期）P—7・8・12・13・17覆土内出土の土器、および第II層上面出土の土器により後期末葉の所産と考えられる。

※ピット一覧表—各住居跡実測図付表：各住居跡のプランに位置するピットについて、その深さ、出土遺物数を記載したものである。ピット以外の土壙、溝跡等に関しては本文中で触れた。



第7図　第1号住居跡

第1号　住居跡ピット一覧

Pit NO.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
深さ(cm)	15	24	16	47	30	27	22	40	25	20	26	44
遺物数	0	0	0	0	0	0	4/0	16/3	0	4/0	0	12/0
Pit NO.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
深さ(cm)	40	44	24	40	40	5	16	8	8	10	3	5
遺物数	51/15	1/2	0	0	10/5	0	0	0	0	0	0	0

(注) 深さは、床面の明確なピットについては床面から、不明確なピットについては検出面から計測している。
著しく撹乱されているピットは推測による数値を記載した。
遺物数は、土器片数／石器片数で示した。以下、「各住居跡ピット一覧」はこれに準ずる。

2号住居跡　（第8図　図版3）

（遺構の確認）64～66—50～52グリッドに位置する。検出面は第II層上面である。

（平面形）ほぼ円形に近い楕円形を呈するものと思われる。北西側のプランは推定による。長軸6.4m・短軸6.0m、長軸N—20°—Eを測る。

（重複・拡張）西側で5号住居跡と一部重複し、南側で1号住居跡と各々の周溝が接する。また、南側の周溝が1号土壙と重複し、床面で117号土壙と重複する。

（壁）検出されない。状況は1号住居跡とほぼ同じである。

（床面）東側で若干低くなるが、全体に堅く平坦である。

（周溝）南側約2分の1で検出された。北側2分の1は確認されなかった。検出面からの深さは5～10cm程で、断面はU字形を呈する。

（柱穴）周溝と重複するピットを含め、プラン内に29個のピットがある。深さ、位置、覆土等を考慮すれば、周溝と重複するP—2・3・4・8・11・13・23・24が住居跡を巡る主たる柱穴と考えられる。また、床面に散在するピットのうち比較的深いもの、位置、覆土等により、P—18・27が本住居跡に関連する柱穴と推測されるが、壁の立ち上がりがなく、プランは推定によるものである点などにおいて、住居跡内のピットの在り方、あるいは住居自体の構築方法等に不明な点が多いため、主柱穴、壁柱穴などについての言及は避けたい。

（炉）検出されない。床面あるいは土壙内に集石遺構が3基認められたが、いずれも礫は焼成を受けていない。また、床面では焼土、礫の抜き取り痕も検出されなかった。

（その他の施設）住居跡南東部床面に集石遺構が2基（SM70・194）、中央やや北寄りの土壙壁面に礫群がある。前述の通り、焼成は受けておらず、炉の可能性はない。これらの遺構が住居使用時において住居内で何らかの目的を持ち使用されたかについては全く不明であり、本住居跡と何ら関連のないものである可能性もある。

（時期）P—13・16・21・28覆土内出土の土器、および第II層上面～床面直上出土の土器（EU125、第16図）等により後期末葉の所産と考えられる。

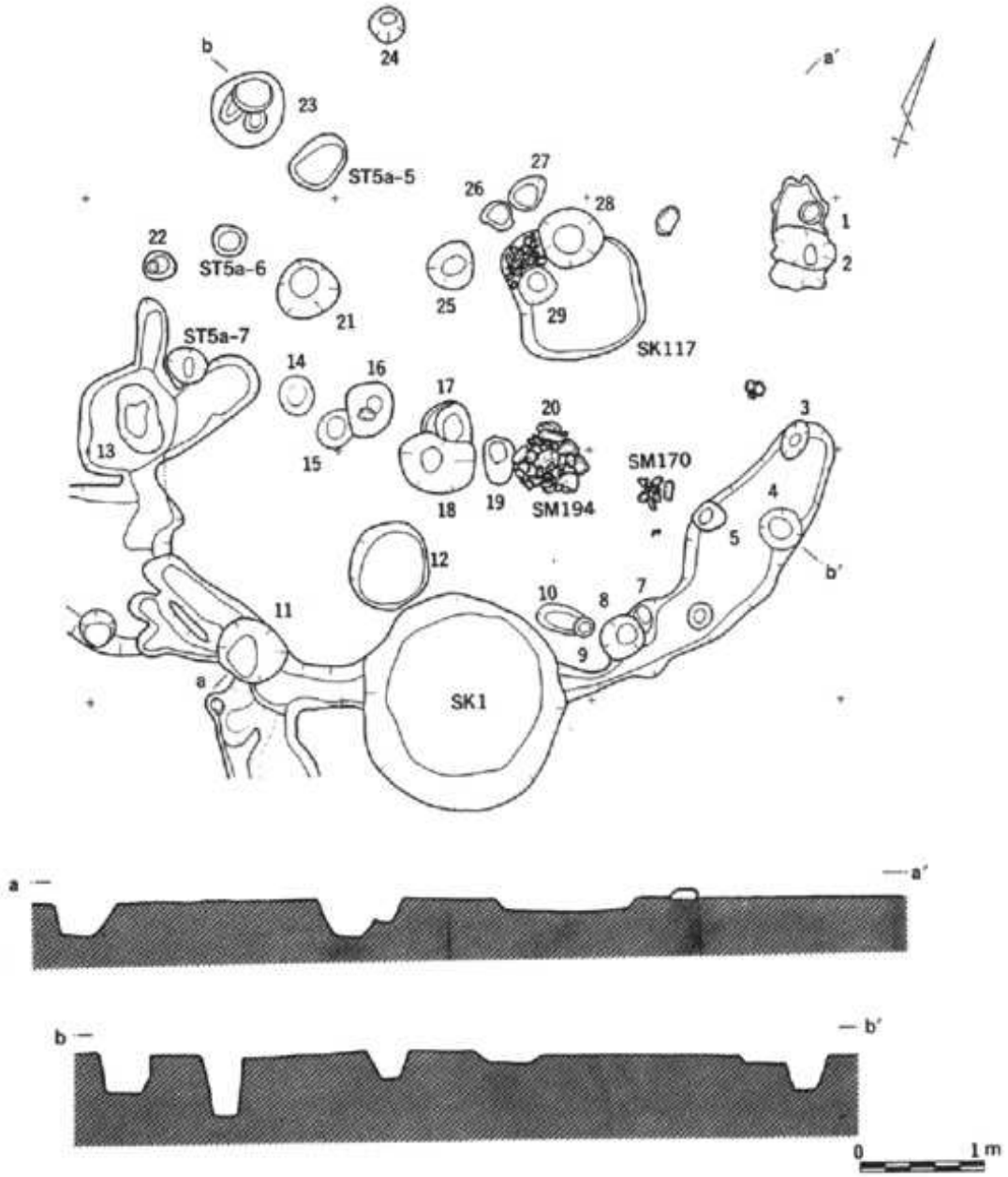
3号住居跡　（第9図　図版3）

（遺構の確認）66～68—55～58グリッドに位置する。検出面は第II層上面である。

（平面形）長軸6.6m・短軸6.4mの楕円形を呈する。長軸方向はN—45°—Wを測る。

（床面）東側で若干低くなるが、全体に堅く平坦である。

（周溝）西側約2分の1で検出された。東側約2分の1は断続的、部分的に検出されたに留まる。検出面からの深さは5～10cm程で、断面は凹凸のあるU字形を呈する。



第8図　第2号住居跡

第2号住居跡ピット一覧

Pit NO.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
深さ(cm)	12	19	21	24	20	20	16	16	17	10	24	8	27	8	23
遺物数	0	0	0	15/0	0	0	0	0	0	0	0	0	20/4	0	0
Pit NO.	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
深さ(cm)	57	18	38	10	10	40	22	30	18	30	12	7	100	20	
遺物数	9/0	0	0/4	0	0	14/0	0	8/3	0	0	0	0	25/0	0	

（壁）検出されない。

（重複・拡張）北側で4a住居跡と一部接する。床面は87号土壙と重複する。拡張は認められない。

（柱穴）周溝と重複するピットを含め、プラン内に39個のピットがある。本住居跡の場合住居跡内部にはP－30・38の2個のピットしかなく、他は周溝あるいは住居跡の周囲を巡るピットが多数を占める。その中でも、形状・深さ・位置・覆土等によりP－3・10・15・21・25・26・27・31・33・34・37が主体となる柱穴と推測される。

（炉）中央やや南寄りに検出された。地床炉である。形状は、東西方向1m、南北方向0.8mの楕円形に焼土、炭化物がひろがりをもち、床面を10～15cm程掘り込んでいる。床面精査の段階で87号土壙と地床炉部分が重複することが判明した。焼土は、87号土壙覆土上層に入り込む状況であり、新旧関係は87号土壙→3号住居跡となる。

（その他の施設）プラン内には特に検出されない。住居跡外では南側50cm程の位置に、埋設土器EU168・169の2基があるが本住居に関連する遺構であるかは不明である。

（時期）本住居跡は、ピット覆土内よりの遺物の出土は極めて少なく、時期を明確に決定する資料は乏しい。床面あるいは床面直上出土の土器片、および87号土壙との重複関係から後期末葉の所産として大過ないと思われる。

4a号住居跡　（第10図　図版4）

（遺構の確認）66～69—53～55グリッドに位置する。検出面は第2層上面である。

（平面形）不整楕円形を呈する。長軸6.4m・短軸6.0m、長軸はN－65°－Wを測る。

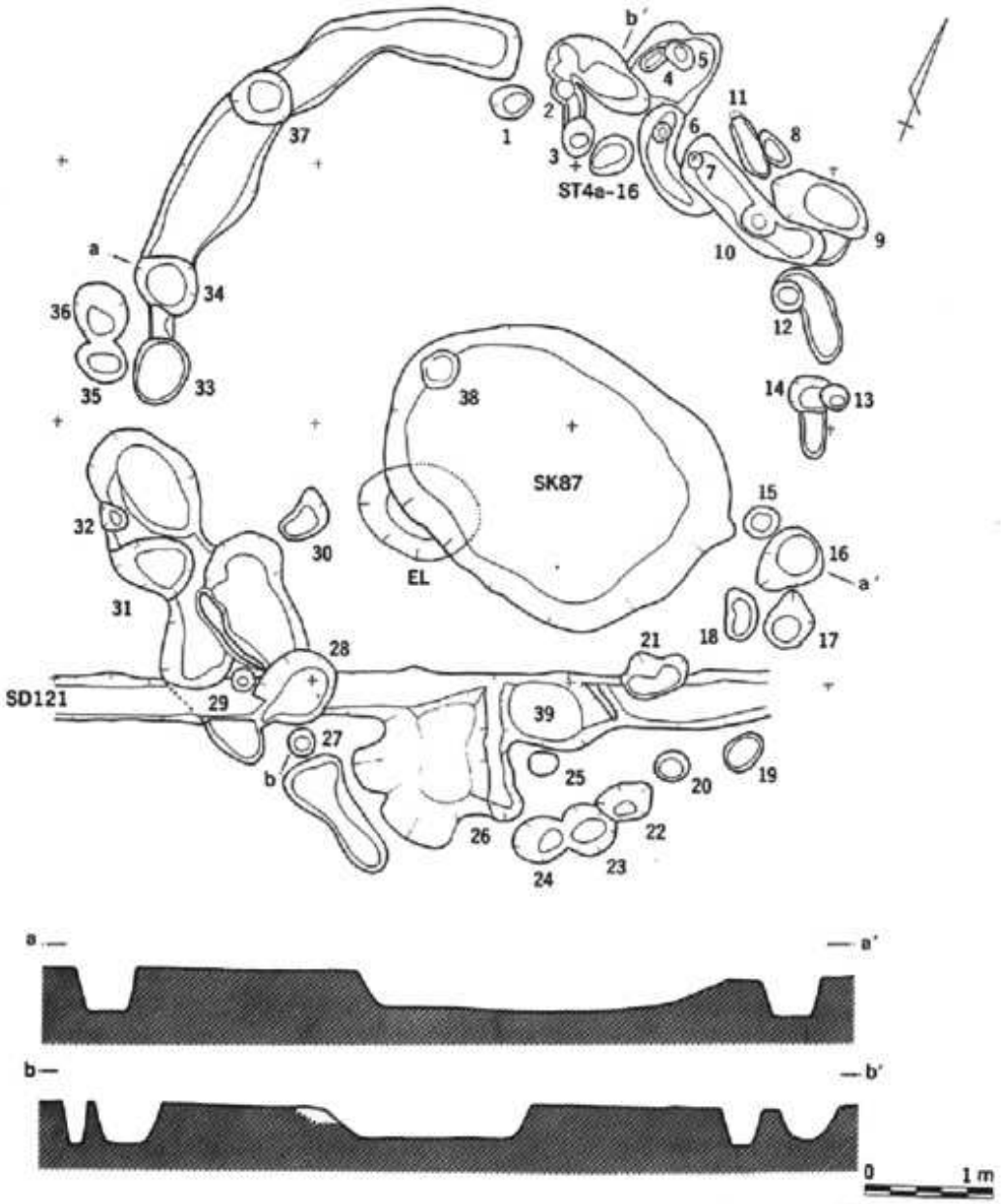
（重複・拡張）南側で3号住居跡周溝と接し、北側約4分の1が4b号住居跡と重複する。また、北西側の壁が86号土壙と、住居跡中央部で175号と重複する。南側を走る250号溝跡は後世の所産である。

（壁）西側で一部検出された。立ち上がりは3～5cm程で、南～東側では検出されなかった。

（床面）平坦で比較的堅くしまっている。壁の立ち上がりが認められたことにより、床面までの攪乱はほとんど受けていないものと考えられる。

（周溝）南東側で一部検出された。検出面からの深さは5cm程である。

（柱穴）プラン内から39個のピットが検出された。4b号住居跡との重複個所については、4a号住居跡に関連すると考えられるピットのみ数値に含めた。深さ、覆土、位置等により住居跡の周囲を巡るP－5・11・14・18・23・25・34・39が主たる柱穴と考えられる。また、内部に位置するピットのうち、P－13・20・25・39が比較的安定している状態であった。なお、EP174、SK175内のEP175bは床面から100cm近い深さをもつピットであり、



第9図　第3号住居跡

第3号住居跡ピット一覧

Pit NO.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ(cm)	12	17	34	12	19	20	17	10	20	24	14	39	15	10	20	28	27	13	22	7
遺物数	0	0	0	3/0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Pit NO.	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	
深さ(cm)	32	9	12	15	10	10	33	30	20	10	25	17	17	25	33	45	30	45		
遺物数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8/0	0	3/0	0	0	0	

4a・4b号住居跡に直接関連をもつとは考えられない。

（炉）検出されない。焼土、炭化物も確認されなかった。住居跡南東部で壁と重複する86号土壙内より焼成を受けた礫が出土したが、本住居跡との関連は不明である。

（その他の施設）住居跡中央部に長径1.5m、短径0.9mの土壙（175号）が検出された。

（時期）P－25・36および床面直上出土の土器により、後期末葉の所産と考えられる。

4b号住居跡　（第10図　図版4）

（遺構の確認）68～70－52～54グリッドに位置する。検出面は第II層上面である。

（平面形）楕円形を呈する。長軸3.6m・短軸3.2m、長軸はN－45°－Wを測る。

（重複・拡張）南側で4a号住居跡と重複する。また北西で103号土壙、中央部で187号土壙と重複する。

（壁）南側約2分の1で検出された。立ち上がりは5～8cmを測る。

（床面）東側がやや傾斜して低くなる。残存状況は比較的良好である。

（周溝）検出されない。

（柱穴）プラン内に10個検出された。深さ・位置・覆土等により、主体となる柱穴は、4b－1・3・7・8・9と考えられる。

（炉）住居跡中央やや南西寄りに径70cm、深さ15cmの焼土が検出された。地床炉であろう。

（時期）各ピット内および西壁際床面出土の土器（RP56・第28図4）等により、後期末葉、コブ付土器第IV段階期の所産と考えられる。

第4a住居跡ピット一覧

Pit NO.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ(cm)	40	22	15	31	47	17	4	40	50	30	32	19	10	28	57	54	12	20	12	28
遺物数	0	0	0	0	1/3	0	0	0	0	0	0	7/0	0	0	0	0	0	0	0	0
Pit NO.	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	
深さ(cm)	4	15	18	11	20	15	25	37	40	15	17	57	18	30	20	26	15	12	70	
遺物数	0	0	0	0	60/6	0	0	10/4	3/3	0	0	0/3	0	0	0	50/21	0	0	0/1	

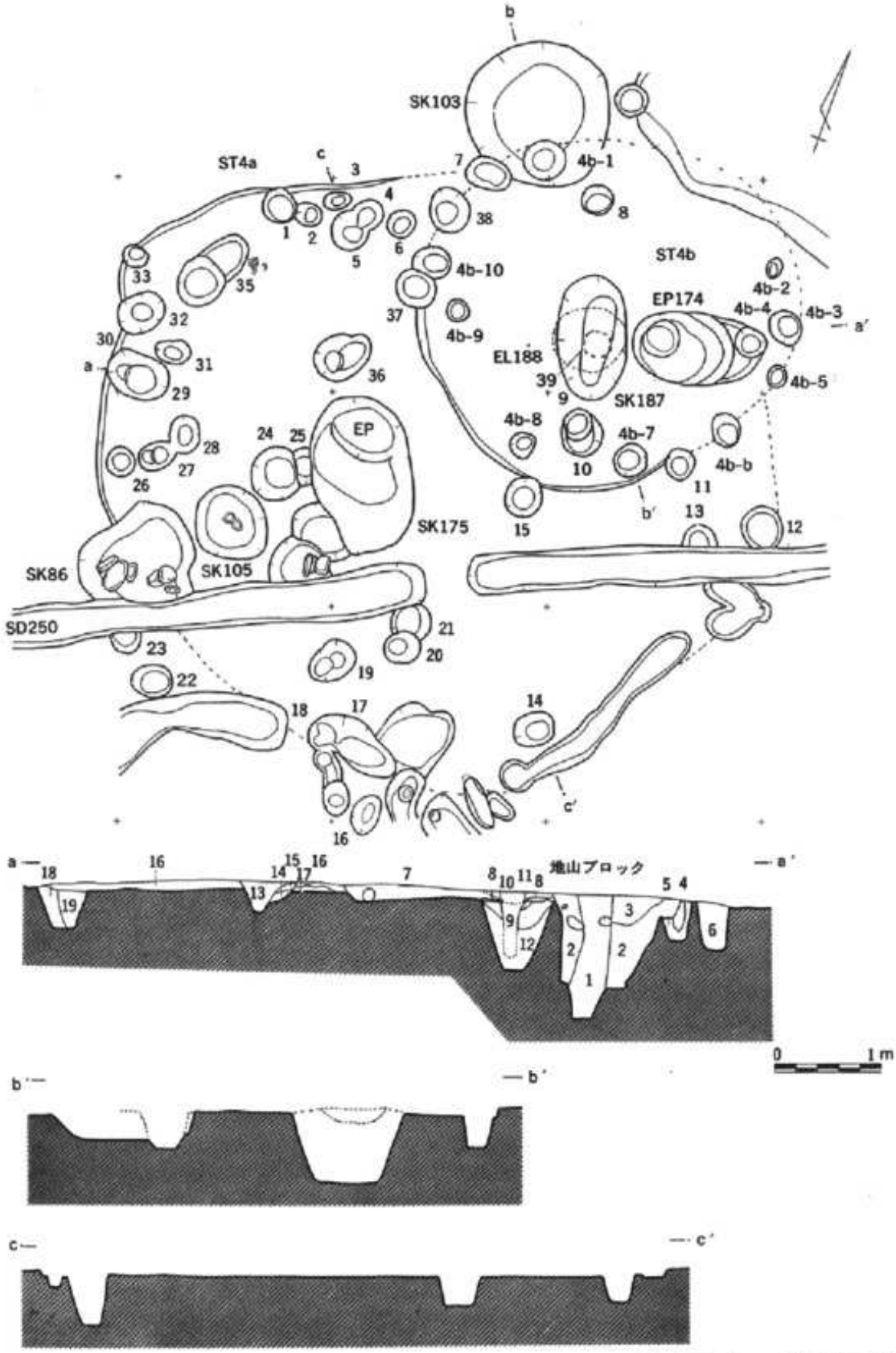
（注）ST4bと重複するため、ST4bのピットについては、4b－1、4b－2etcと表示した。

第4b住居跡ピット一覧

Pit NO.	1	2	3	4	5
深さ(cm)	30	26	50	70	10
遺物数	0	6/3	6/0	0	0
Pit NO.	6	7	8	9	10
深さ(cm)	35	35	20	15	15
遺物数	0	2/1	0	1/1	10/4

a－a'セクション

1 黒褐色微砂（多量の炭化物を含む。柱穴）
2 黄褐色土（大量の礫を含む）
3 暗黄褐色微砂
4 暗褐色微砂
5 暗黄褐色土（柱穴）
6 暗褐色微砂（柱穴）
7 黒褐色微砂（炭化物・焼土を大量に含む）
8 黄褐色粘質土（ST4bの貼床残存部）
9 黒褐色微砂（炭化物を多量に含む。柱穴）
10 暗褐色微砂
11 暗褐色微砂（炭化物を若干含む）
12 暗黄褐色土
13 暗褐色微砂
14 暗黄褐色微砂
15 暗褐色微砂
16 〃（やや黒味を帯びる）
17 黄褐色地山ブロック
18 暗褐色微砂（柱穴）
19 黄褐色微砂



第10図　4a・4b号住居跡

5a 号住居跡　（第11図　図版 4 ）

（遺構の確認）62～65—49～52グリッドに位置する。検出面は第II層上面である。

（平面形）ほぼ円形を呈すると思われる。プランはピット配列による推定である。推定径6.4mを測る。

（重複・拡張）東側で 2 号住居跡、西側で 5b 号住居跡と重複する。プラン内では、 4 号土壙、26号土壙、113号土壙と重複する。拡張は認められない。

（壁）検出されない。

（床面）耕作等で床面はすでに破壊されていたものと思われる。

（周溝）検出されない。

（柱穴）プラン内に28個のピットが認められた。このうち、 5 個のピットは、それぞれ 2 号・ 5b 号の各住居跡に関連する柱穴と推測されたため、本住居に属する柱穴は23個である。住居跡の北半部が耕作あるいは削平により第II層が10～15cm程南部より低くなっており、各ピットの深さは最も高いレベルの検出面からの深さを計測している（第11図付表）。本住居跡の主体となる柱穴は、周囲を巡るP—1・5・6・7・8・19・23、内部に位置するP—9・13・16・20等が考えられる。なお、P—2・18・22については、形状、深さ、覆土等により、直接本住居跡に伴う柱穴ではない。

（炉）検出されない。検出面では焼土、焼成を受けた礫あるいは礫の抜き取り痕等検出されなかった。

（その他の施設） 4 号・26号・113号土壙と重複する。これら土壙と住居跡との直接的な関連はない。

（時期）P—2・5・23出土の土器により、縄文時代後期末葉の所産と考えられる。

5b 号住居跡　（第12図　図版 4 ）

（遺構の確認）61～64—46～50グリッドに位置する。検出面は第II層上面である。

（平面形）ほぼ円形を呈すると思われる。プランはピット配列による推定である。推定径約6.8mを測る。

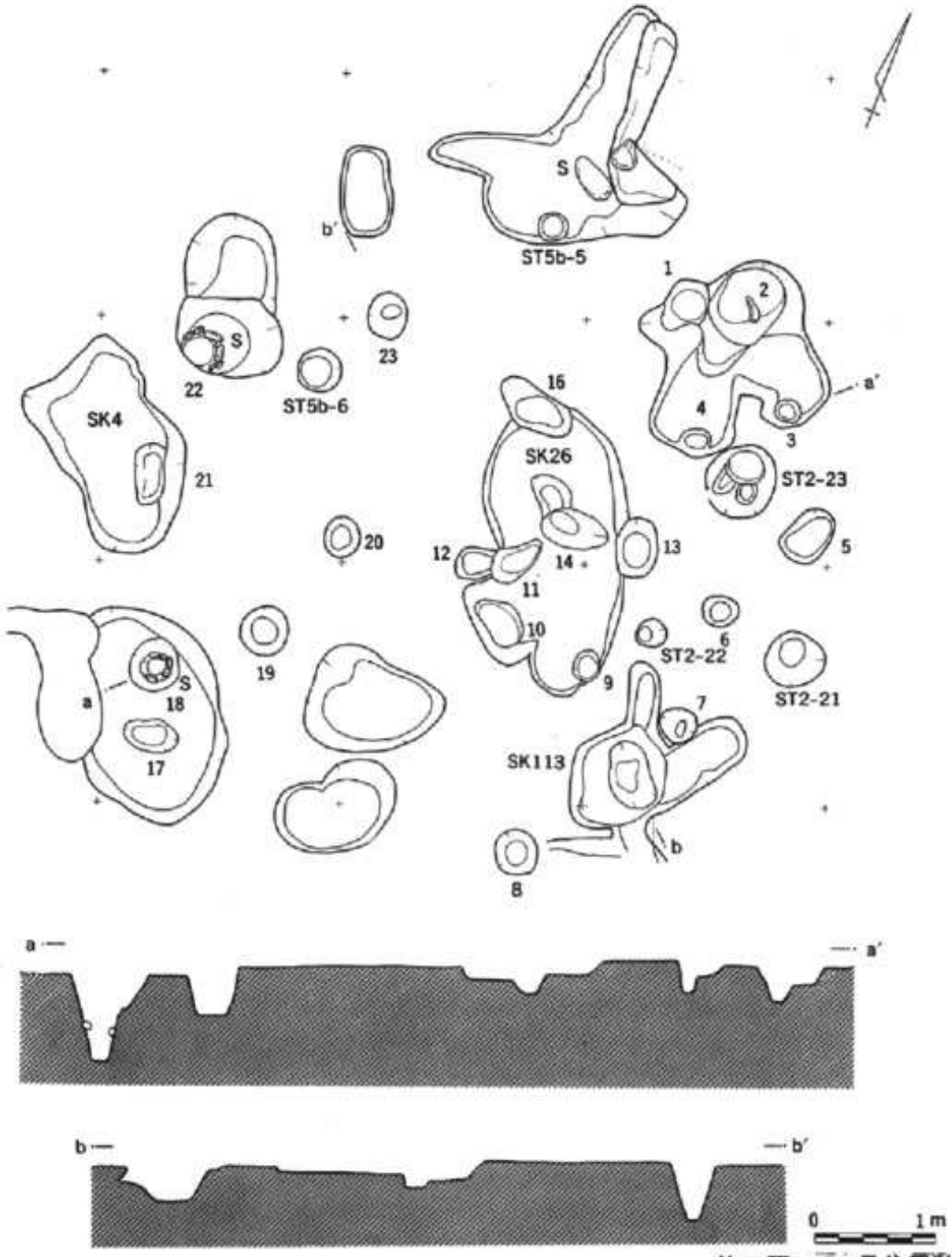
（重複・拡張）南東部で一部 5a 号住居と重複する。プラン内で 9 号・11号・12号・15号・16号の各土壙と重複する。拡張は認められない。

（壁）検出されない。

（床面）耕作等で大部分が破壊されていたものと思われる。

（周溝）検出されない。

（柱穴）プラン内に20個のピットが認められた。このうち 2 個は 5a 住居跡に伴う柱穴と考



第11図　5a号住居跡

第5a号住居跡ピット一覧

Pit NO.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
深さ(cm)	27	83	26	18	47	20	24	30	15	54	20	12
遺物数	0	66/15	0	0	3/0	0	0	0	0	0	0	0
Pit NO.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
深さ(cm)	22	25	20	30	20	70	40	13	24	78	44	
遺物数	0	?	0	0	0	0	0	0	1/0	26/0	24/1	

えられ、本住居跡に関連するものは18個である。このうち主体となる柱穴はP－1・2・5・6・10・11・18と考えられる。プラン内側に位置するP－4・7・17あるいは12・13・14・15等も柱穴と考えられるが、構造的には不明である。

（炉）住居跡中央やや南寄りに9号土壙と重複して一部焼土が検出された。床面自体が耕作等により削平されたと推測されるため、炉跡として残存した焼土であるか、あるいは本住居に直接関連のないものであるかについては疑問が残る。

（その他の施設）重複する各土壙は本住居跡に伴う施設とは考えられない。

（時期）後期末葉の所産と考えられる。

6号住居跡　（第13図）

（遺構の確認）69～72—57～59グリッドに位置する。検出面は第II層上面である。

（平面形）円形に近い楕円形を呈する。長軸7.2m・短軸6.4m（短軸は推定）、長軸はN—30°—Eを測る。

（重複・拡張）東側でSX131号（性格不明落込遺構）と重複する。また北側、西側で一部溝状遺構と重複する。拡張は、検出された範囲では認められない。

（壁）検出されない。

（床面）ほぼ残存していると考えられる。中央部でやや低くなるが全体的には平坦でやや堅い。

（周溝）北側および南側で一部検出されなかった。検出面からの深さは3～10cm程で、断面は凹凸のあるU字形を呈する。

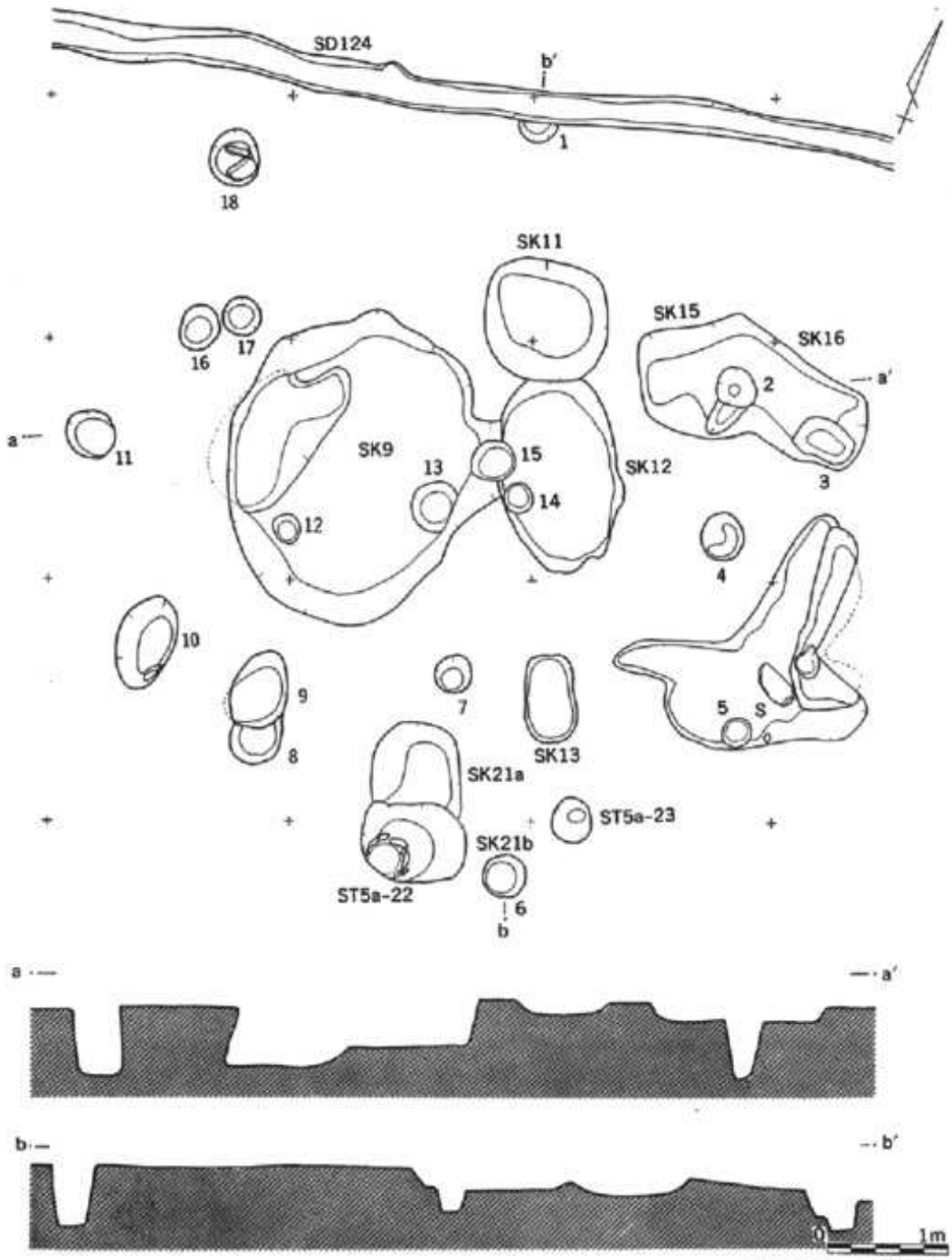
（柱穴）SX131を除くプラン内で27個検出された。SX131は、6号住居跡→SX131の新旧関係のため、重複個所については不明である。主体となる柱穴は、住居跡周囲を巡るP—1・4・6・8・14・16・26、内部に散在する柱穴としてP—2・7・13・20が考えられる。他の小ピットについては不明である。

（炉）検出されない。

（その他の施設）北側に217号土壙が位置している。

（時期）後期末葉と考えられる。

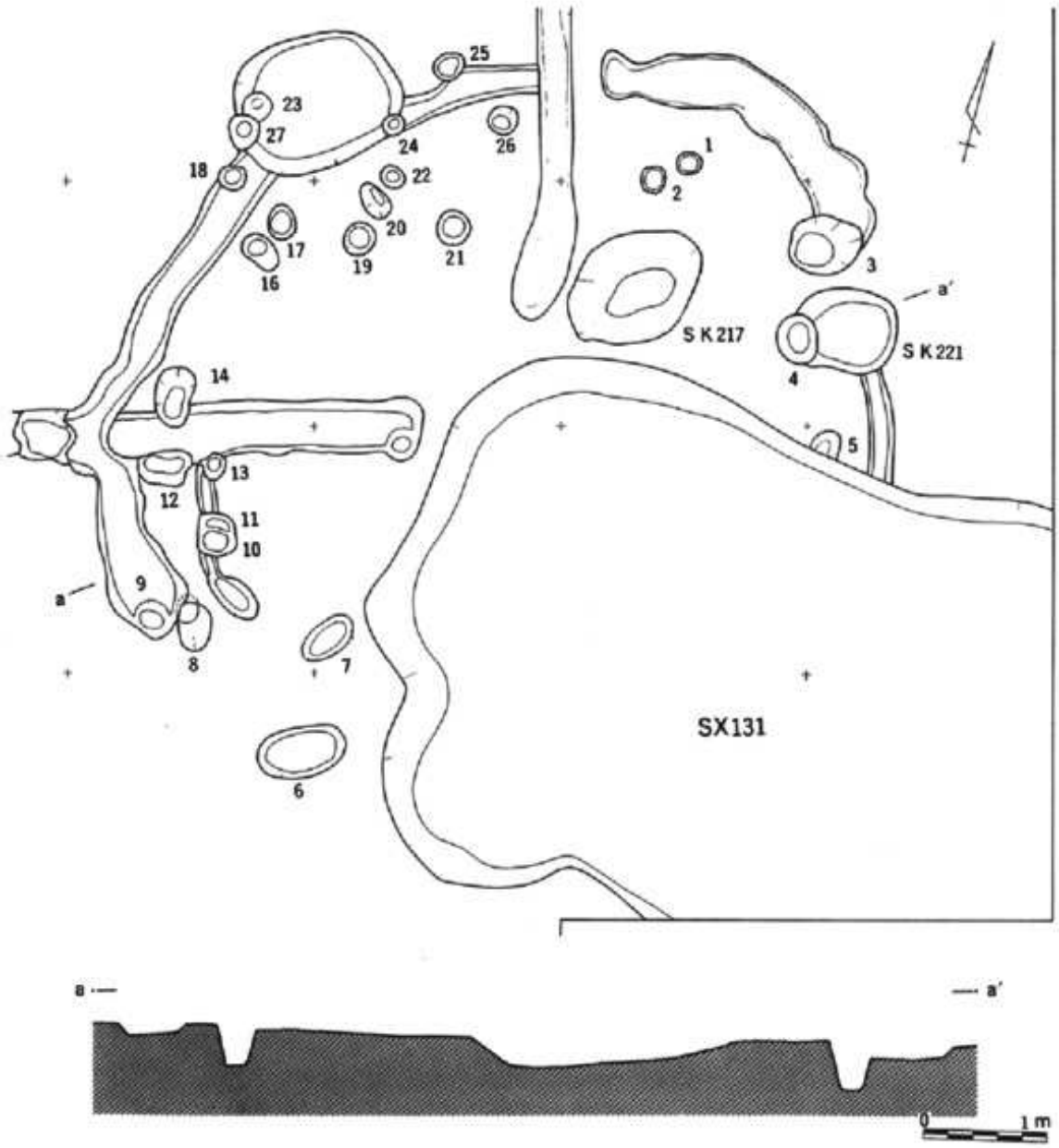
以上、1号住居跡から6号住居跡まで、8棟の住居跡について項目別にまとめた。時期的には縄文時代後期末葉に置かれるものである。また、形態的には、壁の立ち上がりが認められるものが2棟だけであり、他の6棟は周溝、柱穴等によりそのプランを追ったものである。考察については「第VI章まとめ」でおこなう。



第12図　5b住居跡

第5b号住居跡ピット一覧

Pit NO.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
深さ(cm)	6	41	21	5	50	50	56	15	56
遺物数	0	0	0	0	80/0	0	2/0	4/1	0
Pit NO.	10	11	12	13	14	15	16	17	18
深さ(cm)	49	55	58	54	36	65	25	10	20
遺物数	14/7	4/5	0	0	0	0	0	0	0



第13図　第6号住居跡

第6号住居跡ピット一覧

Pit NO.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
深さ(cm)	35	52	30	10	20	26	30	21	30	19	19	15	23	
遺物数	0	0	4/0	0	0	0	15/19	0/13	0	0	0	0	0	0
Pit NO.	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	
深さ(cm)	40	10	7	28	7	14	10	10	26	16	16	20	19	
遺物数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

2　土　壙

1号土壙　65—52～53グリッドに位置し、径160cmの不整円形を呈する。壙底は平坦で検出面からの最深部までの深さは23cmを測る。覆土は黒褐色微砂の単一層で多量の遺物を含む。遺物は土器片164、石器66で、完形に近い土器が2個体、耳飾り1個を含む。時期は後期末葉、安孫子論文による「コブ付土器」第IV段階から晩期初頭大洞B₁式期の所産と考えられる。

2号土壙　65—53～54グリッドに位置し、不整楕円形を呈する。長径200cm・短径140cm、壙底は皿状で最深部まで検出面から30cmを測る。覆土は黒褐色微砂の単一層で21点の土器片、67点のフレイク等を含む。この他、耳飾り2点が出土した。時期はコブ付土器第IV段階期と考えられる。

8号土壙　集石になる可能性がある。60—49グリッドに位置する。覆土内に礫を含み、礫中より凹石、耳飾り、岩板が各1点出土した。時期はコブ付土器第IV段階と考えられる。

9号土壙　61～62—48～49グリッドに位置し、長径260cm・短径220cmの楕円形を呈する。壙底は平坦で検出面からの深さは約40cmを測る。西側でさらに一段掘り込まれ、一部袋状を呈する。覆土は2層に分けられ、自然堆積の状態を示した。遺物は覆土中に大量に含まれ、土器片831、フレイク等295点を数える。さらに磨石4、打製石斧2、石匙1、耳飾り1点が出土した。なお、本土壙と重複する遺構として5b号住居跡に伴う柱穴3個があるが、いずれも9号土壙に切られている。遺物は主として覆土第1層下位より出土している。これらにより、時期はコブ付土器第IV段階期の所産であろう。

10号土壙　67～68—50～51グリッドに位置し、不整楕円形を呈する。長径220cm・短径170cm、検出面からの深さは平均20cm程で壙底は凹凸がある。覆土は3層に分かれ、自然堆積の状況である。遺物は覆土第1層を中心に一部第2層に混入する様相で出土した。土器片710、フレイク等70点でさらに磨石3点、耳飾り、完形に近い土器を1点づつ含む。時期的にはコブ付土器第IV段階の所産であろう。

15号・16号土壙　63～64—47～48グリッドに位置し重複関係にある。15号土壙は長径130cm・短径100cm、16号土壙は長径160cm・短径80cm、ともに深さは20～25cm程を測る。壙底には3個の小ピットが検出された。時期はコブ付土器第IV段階期と考えられる。新旧関係は15号→16号となる。

22号土壙　65～66—47グリッドに位置する。長径100cm・短径62cm、検出面から最深部までの深さ20cmを測る。覆土は2層に分けられ、壙底より3cm程上位から深鉢体部下半が出土した。時期はコブ付土器第III～IV段階期と考えられる。

24号土壙　65—48～49グリッドに位置する。径80cmの不整円形を呈し、検出面からの深

さは最深部で100cmを測る。本遺構は大型の柱穴とも考えられ、同じ形状を示す遺構として、遺構番号—19・21a・24・72・73・85・174・175が検出されており、何らかの遺構の構成要因となることが推測される。(→第VI章まとめ)

48号土壙　62～63—51グリッドに位置し、長径56cm・短径42cm、検出面から最深部までの深さ25cmを測る。覆土は2層に分けられ、第1層に多量の遺物を含む。土器片218・フレイク等18点を数える。壙底は凹凸があり、平坦ではない。出土土器からコブ付土器第IV段階期の所産と考えられる。

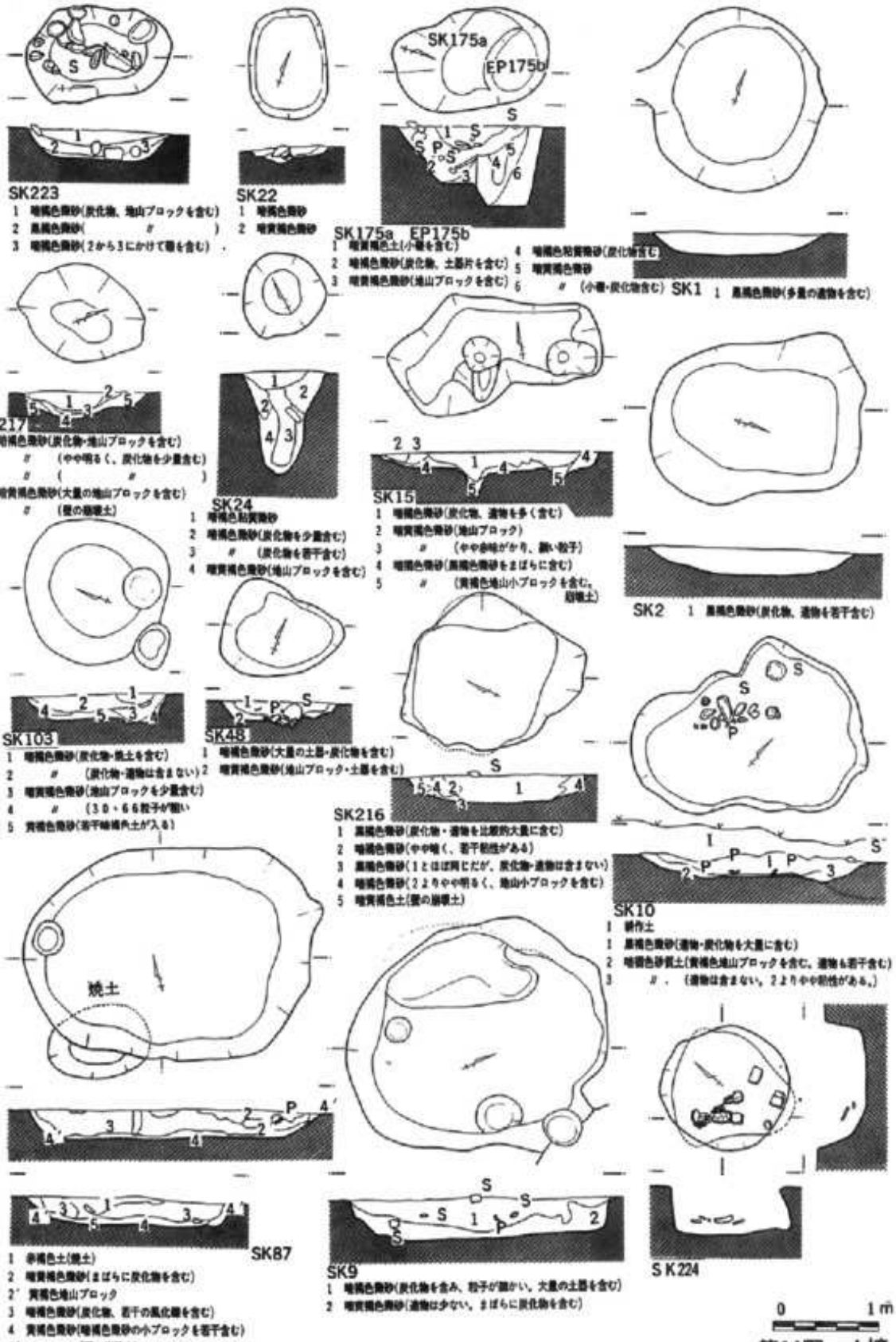
87号土壙　67～68—56～57グリッドに位置し、長径280cm・短径200cmの楕円形を呈する。壙底は平坦で検出面からの深さは30cmを測る。覆土は6層に分けられ、検出面から第1層に焼土が載っていた。これは3号住居跡に伴う地床炉と考えられ、新旧関係は87号土壙→3号住居跡となる。覆土内出土遺物より時期はコブ付土器第III段階を主体とする時期と考えられる。なお、覆土内より石匙4点・使用痕のあるフレイク1点が出土した。

216号土壙　72—55～56グリッドに位置し、不整楕円形を呈する。長径170cm・短径140cm、壙底は比較的平坦で検出面からの深さは最深部で24cmを測る。また、東西で一部袋状を呈する。覆土は4層に分けられ、第1層に多量の遺物を含む。土器片143点、フレイク等86点の他、完形に近い土器（RP71）が出土した。時期はコブ付土器第IV段階期である。

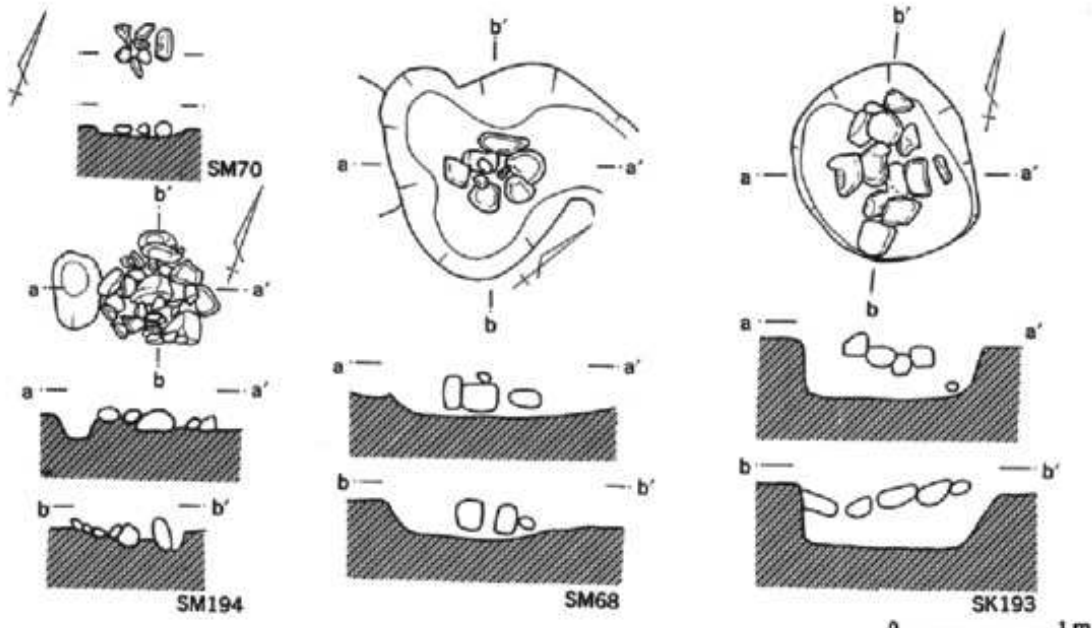
223号土壙　71～72—54～55グリッドに位置し、不整楕円形を呈する。長径140cm・短径82cm、壙底は比較的平坦で検出面からの深さは30cmを測る。覆土は3層に分けられ、第2層を中心に遺物が含まれる。また、2層から3層にかけて挙大～人頭大の礫が10個含まれていた。土器は小片が多く、他の土壙と時期的に異る様相を示す。後期初頭に位置づけられると考えられる。

224号土壙　72—52～53グリッドに位置し、径120cmの不整円形を呈する壙底は平坦で検出面からの深さは50cmを測る。覆土は黒褐色土に黄褐色地山小ブロックが混入する1層である。北・西・南側で一部袋状を呈し、壙底より約10cm上位に多量の遺物を含む。土器は46点、フレイク等は26点出土した。さらに完形あるいは図上復元が可能な土器が5点出土している。時期は縄文時代中期末葉期の所産と考えられる。

この他、30号土壙(67～68—47グリッド)51号土壙(61～62—52グリッド)76号土壙(68—54グリッド)覆土内からも後期末葉に位置づけられる遺物が比較的大量に出土している。また、ロームマウンドと考えられるSX31・SX101からは磨石・石匙・打製石斧の他早・前期の土器片が限定的に出土した。調査区南側に位置する土壙群は、形状、出土状態ともに138号土壙を除いて不安定なもので、後期末葉の遺物の出土は認められるが性格については不明な点が多い。なおC地区の土壙（SX226他）についてはVI章まとめ参照。


SK223
1 暗褐色微砂(炭化物、地山ブロックを含む)
2 黒褐色微砂(")
3 暗褐色微砂(2から3にかけて層を含む)
SK22
1 暗褐色微砂
2 暗黄褐色微砂
SK175a EP175b
1 暗黄褐色土(小礫を含む)
2 暗褐色微砂(炭化物、土器片を含む)
3 暗黄褐色微砂(地山ブロックを含む)
4 暗褐色粘質微砂(炭化物含む)
5 暗黄褐色微砂
6 " (小礫・炭化物含む)
SK1 1 黒褐色微砂(多量の遺物を含む)
SK217
1 暗褐色微砂(炭化物・地山ブロックを含む)
2 " (やや明るく、炭化物を少量含む)
3 " (")
4 暗黄褐色微砂(大量の地山ブロックを含む)
5 " (壁の崩壊土)
SK24
1 暗褐色粘質微砂
2 暗褐色微砂(炭化物を少量含む)
3 " (炭化物を若干含む)
4 暗黄褐色微砂(地山ブロックを含む)
SK15
1 暗褐色微砂(炭化物、遺物を多く含む)
2 暗黄褐色微砂(地山ブロック)
3 " (やや赤味がかり、細い粒子)
4 暗褐色微砂(黒褐色微砂をまばらに含む)
5 " (黄褐色地山小ブロックを含む。崩壊土)
SK2 1 黒褐色微砂(炭化物、遺物を若干含む)
SK103
1 暗褐色微砂(炭化物・焼土を含む)
2 " (炭化物・遺物は含まない)
3 暗黄褐色微砂(地山ブロックを少量含む)
4 " (3D・66粒子が細い
5 黄褐色微砂(若干暗褐色土が入る)
SK48
1 暗褐色微砂(大量の土器・炭化物を含む)
2 暗黄褐色微砂(地山ブロック・土器を含む)
SK216
1 黒褐色微砂(炭化物・遺物を比較的大量に含む)
2 暗褐色微砂(やや暗く、若干粘性がある)
3 黒褐色微砂(1とほぼ同じだが、炭化物・遺物は含まない)
4 暗褐色微砂(2よりやや明るく、地山小ブロックを含む)
5 暗黄褐色土(壁の崩壊土)
SK10
1 耕作土
1 黒褐色微砂(遺物・炭化物を大量に含む)
2 暗褐色砂質土(黄褐色地山ブロックを含む。遺物も若干含む)
3 " (遺物は含まない。2よりやや粘性がある。)
焼土
SK87
1 赤褐色土(焼土)
2 暗黄褐色微砂(まばらに炭化物を含む)
2' 黄褐色地山ブロック
3 暗褐色微砂(炭化物、若干の風化礫を含む)
4 黄褐色微砂(暗褐色微砂の小ブロックを若干含む)
4' " (壁の崩壊土)
SK9
1 暗褐色微砂(炭化物を含み、粒子が細かい。大量の土器を含む)
2 暗黄褐色微砂(遺物は少ない。まばらに炭化物を含む)
S K224
0 1 m

第14図 土壙



第15図　集石

3　集　石　（第15図　図版5）

SM68　66—52～53グリッドに位置し、4a住居跡の西側約1mにある。9個の河原石で構成され、径100cmの不整円形の落ち込みに集中している。礫底面は掘込みの底部より2～3cm浮いた状態であった。時期は後期末葉と考えられる。

SM70　66—52グリッド、2号住居跡東寄り床面をわずかに掘り込んでおり、礫は掘り込み底面に配置されている。7個の大小の河原石で構成され、うち2個は磨石としての使用痕が認められた。加熱は受けていない。2号住居跡に伴う施設であるかは不明である。

SM193　66—46～47グリッド、SK22の北東約2mに位置する。13個の大小の河原石により構成されていた。第II層を長径100cm・短径90cm、深さ30cmに掘り込んだ楕円形のプランを呈する落ち込み内に底面より20～25cm程浮いた状態で検出された。礫は加熱を受けていない。礫のうち2個が磨石として使用された痕跡が認められた。なお、本遺構北側に埋設土器（EU192）があるが関連は不明である。

SM194　65—51～52グリッド、2号住居跡中央やや東寄りに位置し、SM70と近接する。28個の大小の礫で構成され、掘り込みは認められない。集石の範囲は60cm四方に集中しており、加熱は全く受けていない。礫のうち6個が磨石としての使用痕が認められた。

この他、SK60（62—54グリッド）・SK117（65～66—51グリッド）・SK223（71～72—54～55）・SK10（57～58—50～51）・SK86（4a住居跡南端）にそれぞれ礫群が含まれていた。SK86は明らかに加熱を受けたものである。（→第6図参照）

4　埋設土器　（第16図　図版7・11）

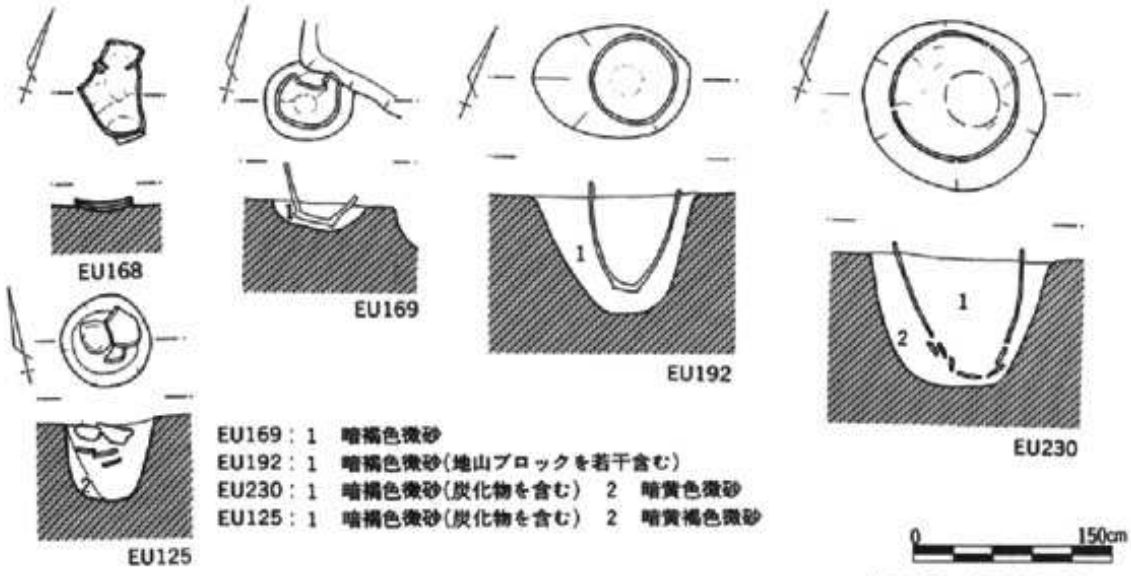
EU168　67—58グリッドに位置し、3号住居跡南西側約1mに横位の状態で検出された。確認面は第II層上面ですでに掘り方および体部2分の1は失われていた。土器は無文の深鉢で、体部～底部のが残存しており、時期は後期末葉と考えられる。

EU125　66—51グリッド、2号住居跡床面東端に位置する。掘り込みは径23cm程の円形のプランで深さは検出面（第II層上面）から30cmを測る。土器はすでに破損しており一部しか残存していないため不明な点が多いが、後期末葉の深鉢が埋設されていたものと考えられる。

EU169　65～58グリッド、3号住居跡南側約50cm程離れた地点に位置する。検出面は第II層上面だが、すでに掘り込みは底部に近い部分しか残存せず、土器もまた正位の状態で埋設されていたため口縁部～体部上半は失われていた。体部下半～底部は無文で、恐らく粗製深鉢であろう。時期は後期末葉と考えられる。

EU192　66～67—46グリッドに位置する。検出面は第II層上面である。掘り込みは長径40cm・短径30cmの楕円形を呈し、深さは検出面から30cmを測る。土器は正位に埋置された粗製深鉢で口縁部の一部を欠く（→第28図）。検出された位置は調査区北側端で、住居跡群とは離れて単独で検出された。約1m程南側に集石遺構（SM193）が位置しているが関連は不明である。

EU230　B地区82—72～73グリッドに位置する。径45cmのほぼ円形に近い掘り込みで深さは検出面（第I層下位）から33cmを測る。土器は正位の状態で埋置されていたが若干西に傾いていた。住居跡等の遺構との関連はなく単独で検出された。時期は後期末葉コブ付土器第IV段階、本報告書では第4群6b類（体部上半）9b類（口縁部）に置かれる。



第16図　埋設土器

V 遺　物

1　土器

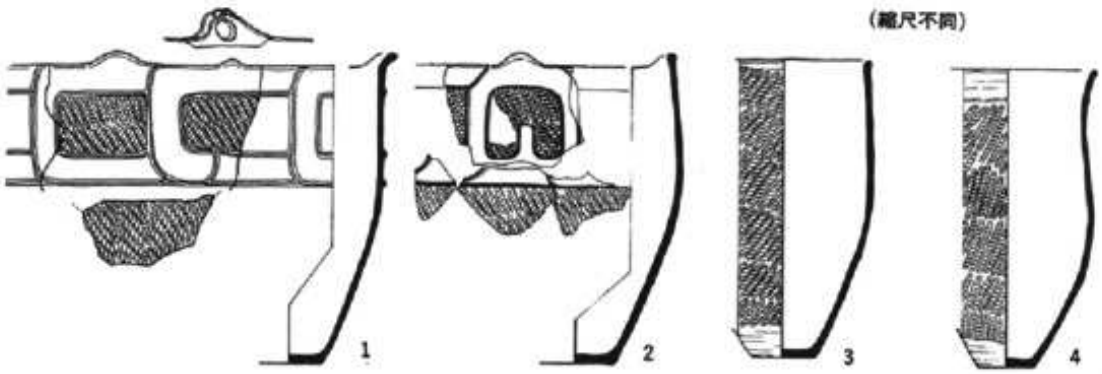
本遺跡より出土した土器は約8000点であり、一括として取上げたもの（RP）が27点である（表1参照）。全体に小片となっているため、文様のモチーフ等不明確なものが多い。時期的には、縄文早期末葉・前期初頭・中期末葉～後期初頭・後期末葉・晩期後葉のものを含むが、主体は後期末葉である。他は、出土地点ないし遺構が限られ、散発的である。以下では、出土々器を主として時期別、施文技法・文様モチーフ等で分類する。遺物の呈示は、出土状況（共伴等）をある程度理解できるよう各遺構毎とし、一連番号を付す。

第Ⅰ群土器（縄文早・前期）（第22図169・164～168）（図版13上段）

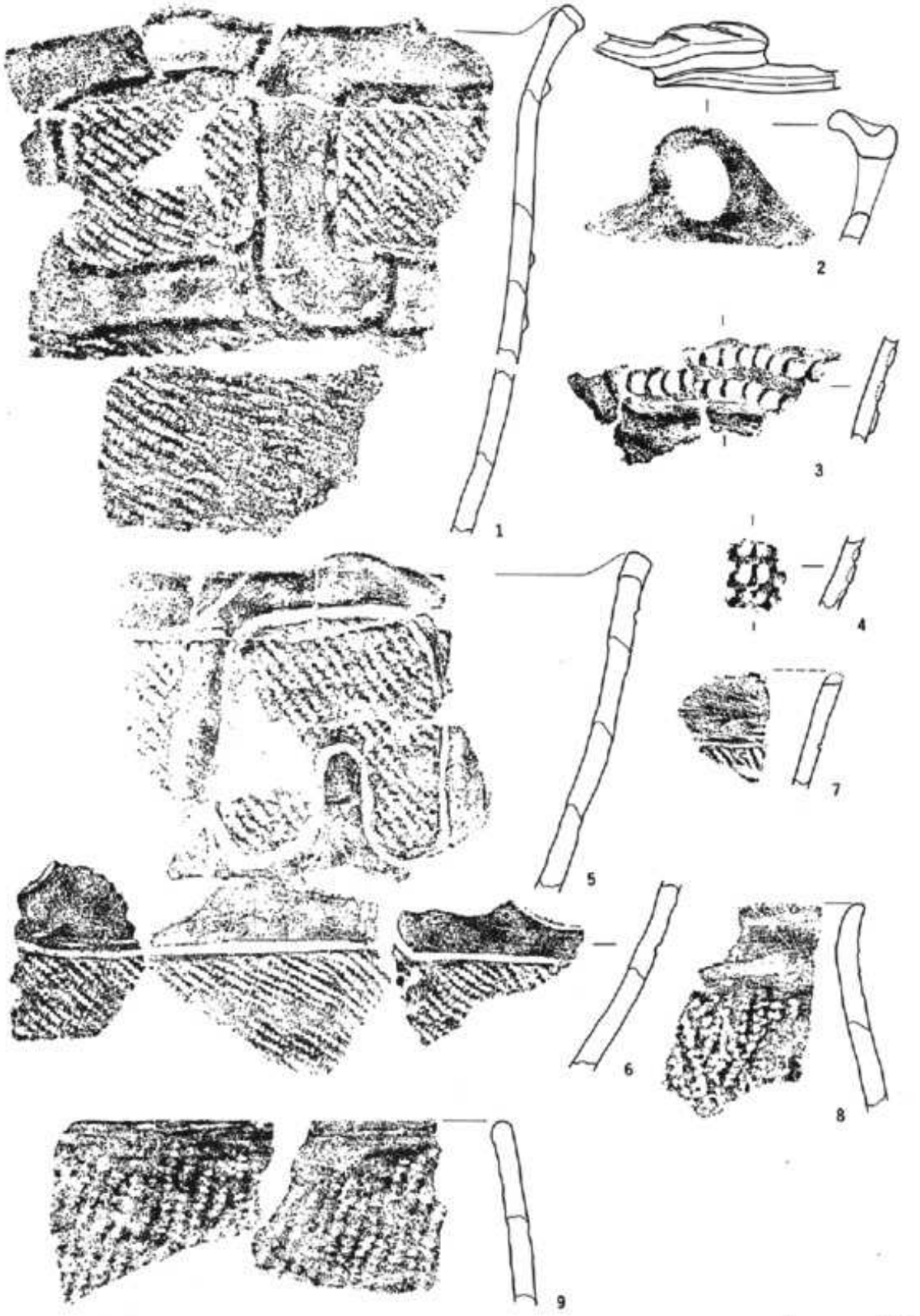
SX31の所謂ロームマウンドを持つ遺構から限定的に出土したもので、早期1点・前期14点2～3個体分がある。169は、くの字状に外反する深鉢の口縁部で、外面の口縁に縄文と条痕を施し、内面は全体に粗い横位方向の条痕文が施される。胎土に石英粒がまばらに入り、若干の繊維を含む。164・165は、羽状縄文系の土器でやや粗い節と短い単位での横位施文、口唇部外縁の刻目等に特色が見られる。胎土には粗い石英粒・若干の繊維が含まれ、口唇・内面がていねいに調整される。167・168ではループ文が特徴的である。

第Ⅱ群土器（縄文中期末葉）（第17・18図）（図版12）

フラスコ状土壙SK216内から4個体がまとまって出土している。その他3個体分の小片若干がある。施文技法では、精製深鉢で隆線と沈線（第17図1・2、第18図1・5・6）、および隆線区画内刺突文充填（第18図3・4）の3技法を認める。器形では、第17図1・2とも口縁に波状小突起が付き、1は口縁、2は体部中央径が最大となる。文様は、口唇から体部の文様区画線へと連結し、さらに各単位も連続的につながる。粗製土器では、口縁の内反的なものと外反する2種の深鉢がある（第17図3・4）。縄文は無節・単節・複節があり、いずれも粗大である（第18図7・9・8）。



第17図　土器模式図　（SK216内一括出土）



SK216内一括出土土器

第18図　土器拓影図（1）

第Ⅲ群土器（縄文後期初頭）（第25図389・390）（図版21中段）

A地区SK223内から5点3個体、SK226内から1点の出土がある。所謂三十稲葉式土器と言われる一群で、特殊な刺突文に特徴がある。389・390はいずれも小形深鉢の体部から底部にかけての破片で、連続的な左から右への竹管状工具による刺突文が施される。刺突による左方部の凸部は、ややもり上る程度でそれ程顕著ではない。口縁部の形状や文様については不明である。胎土に石英粒がやや多く含まれ、焼成は良い。他に頸部から口縁に係ると考えられる破片1点があり、斜に立上る2条1対の隆線および、頸部を巡る一条の沈線を認める（図版21中段右端）。

第Ⅳ群土器（縄文後期末葉）（第20～28図）（図版12下段～21上段）

A・B・C地区を通して主体となる土器群で、全体の9割強を占める。以下では、1器形、2文様帯の有無、3文様帯の構成、4文様描出技法、5地文、6胎土・焼成などの各属性を基礎にして分類を行う。しかし、全体に破片の資料であり、完形ないし、それに準ずる資料が少ないため、部分文様に主体を置かざるをえない。したがって結果的に同一個体の破片が複数類にまたがる可能性がある。組成、共伴については、問題点も多いが、各遺構内での出土状況を踏えて後記、補足する。全体的には、安孫子昭二氏の『コブ付土器様式』第Ⅲ～第Ⅳ段階に相当すると考えられ、一部大洞B_1式との関連が問題として残る。

分類は第19図をもとに以下でその概略を述べる。分類の対象は各検出遺構内から抽出した文様等明確な破片339点である。また、形式・型式、文様帯については、安孫子(1969)に拠る。破片数、類別数等については表一1・2・3でその大略を示した。

1a類　無文地を主体とする粗製深鉢で、平縁と波状口縁を呈するものがある。文様は、口縁部を巡る1～数条の刺突文で、竹管状工具を土器面に刺突し、その際生ずる粘土の盛上りをそのまま残す特徴がある。3点出土（第19図1～3）

1b類　先端の細い棒状工具でモチーフ内に下位・横位から刺突文を加えるもので、平縁・波状口縁の深鉢がある。器形は平縁・波状口縁の深鉢が主体を占め、安孫子氏のBⅢ型式（第19図4）、AⅡ型式（第19図5～10）に相当する。

1c類　大ぶりの波状口縁を持つ深鉢で、波頂部や頸部に大形のコブが無雑作に貼付される。11は沈線でモチーフを描き、内部は無文地である。12は頸部に刻目を持つ隆帯が巡り、頸部無文帯をもつ。さらに体部上半には沈線とコブの貼付による文様帯がうかがえる。

2　類　無文地に沈線による弧線連結文が施文される一群で、弧線文の上下幅が狭い。弧線文内の刻目等充塡は見られない。器形はAⅡ型式と思われる（第19図13～17）。17は小片で不明確ながら宮城・西の浜等に類似する（安孫子1969P96第6図15）。

3a類　AⅡ型式の深鉢で、波状部、頸部に限定的にX字状の隆帯文が貼付される。隆

帯は無文地のもの（18・19）、刻目の施されるもの（20）がある。これは、主としてモチーフの接部等に用いられ、平板化した弧線連結文のアクセントとしている（図版13中段）。

3b類　主としてAI・AII型式の深鉢を主とする一群で、平縁・波状口縁がある。21は、特異な形で、刻目のある大形の縦長貼付文が付き、貫通する孔をもつ。おそらく瓢箪形を呈すと思われる。施文技法は、平行する沈線間に刻目を充填し、接部にコブを貼付するものが主体をなす。また、口縁端に刻目帯を巡らし、沈線で入組文を描く28や、玉抱三叉文状の入組部をもつ29などがある（第19図21～37）。

4　類　AI型式ないしBI型式の深鉢を主体とし、一部不明ながら壺形土器がある。深鉢では、平縁と波状口縁のものがあり、口縁端部に1ないし2段で巡る刻目帯をもつ。体部上半の文様は、沈線によって描かれた入組帯状文、入組文があり、モチーフ内を細かな縄文で充填している。モチーフの接部には小形のコブが貼付される（第19図38～44）。

5　類　AI型式の深鉢を主体に、若干の壺・香炉形土器が含まれる（第19図45・46）。47～51は同一個体で、波状する口縁部に2個1対のコブを持つ。52は、体部片の資料で、下半の文様（II文様帯）を持つ。文様は、入組帯状文で、入組部や（53）内部（56）の他、文様帯の境部にコブが貼付される（第19図47～56）。

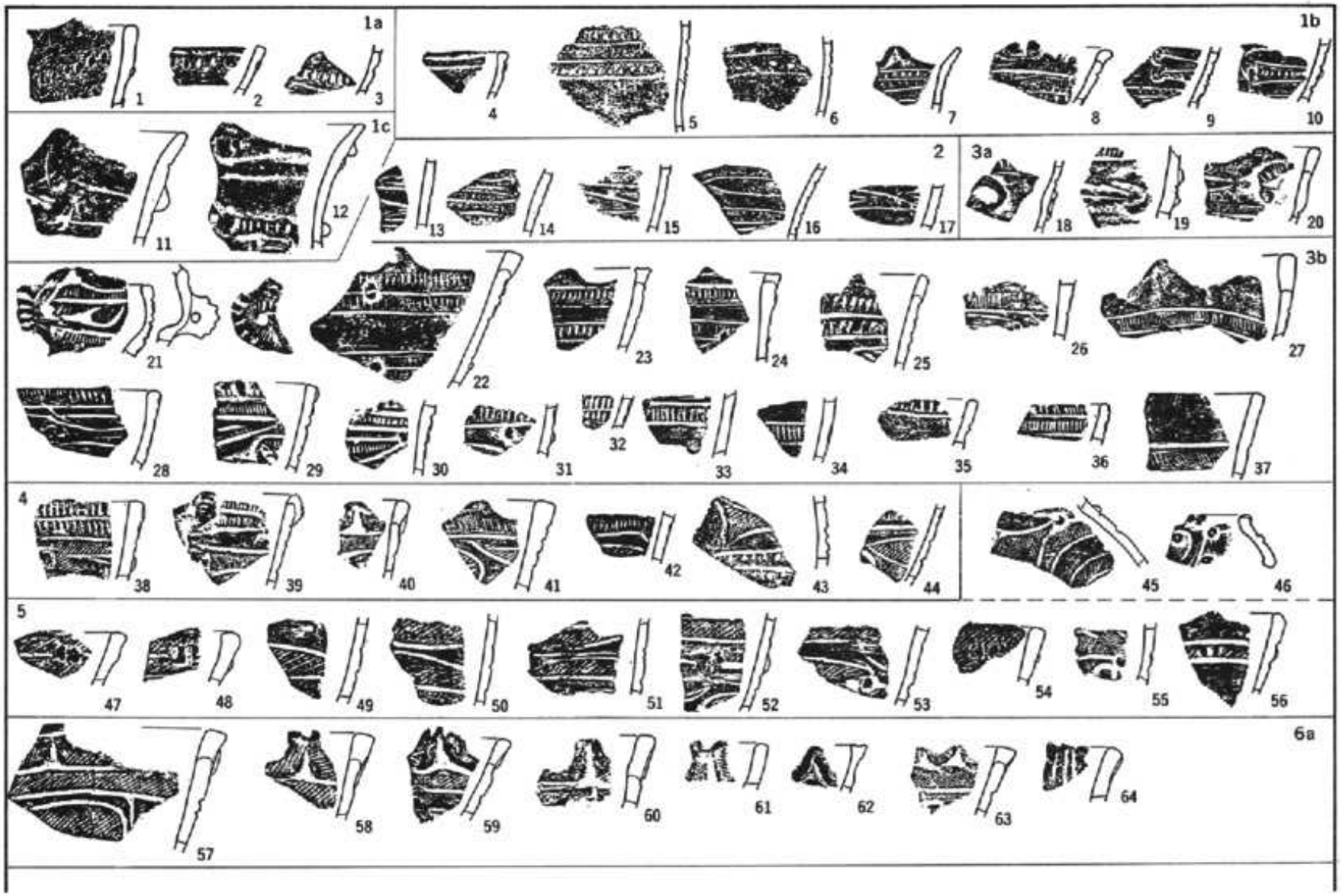
6a類　AI型式の深鉢で、波状突起部資料を一括した。突起は、整形されやや肥厚する。また、突起頂部に1～2の刻目を加えるもの、平坦なもの等があり、前者が多い。文様は、三叉状の沈刻が特徴的である（第19図57～64）。

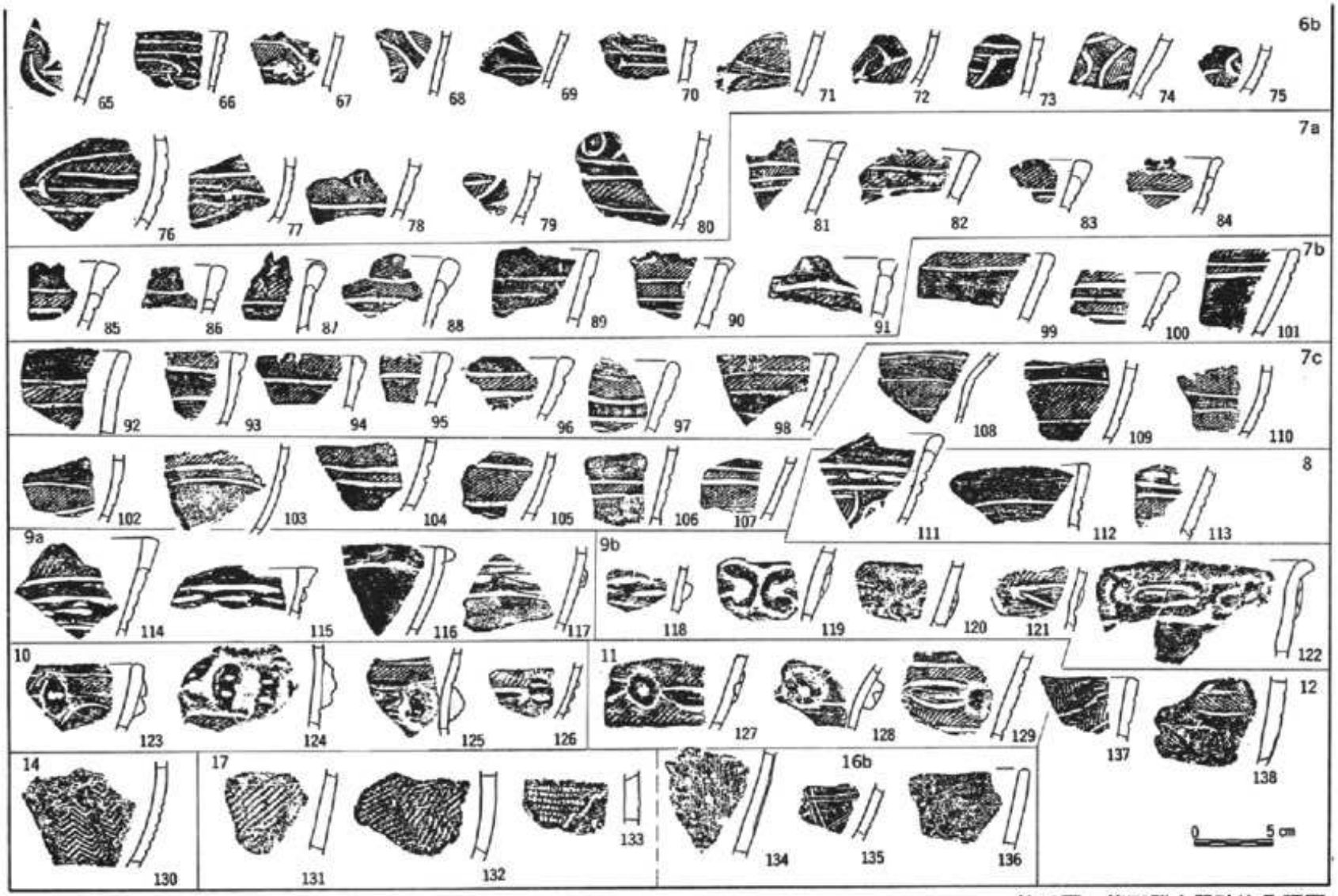
6b類　AI型式の深鉢を主体に、AII・BI型式の深鉢体部資料である。ここでは、主として入組帯状文の入組部を一括した。文様は、左から右へ流れる入組部がコンパス文風にくびれるもの（65・66）と、左下から右上へ連結する帯状文（73・74・76・77）があり、接部およびモチーフ全体は間のびした三叉文風を呈す（第28図1）。その他、入組部に三叉文を描くもの(72)や、玉抱三叉文となるものが若干認められる(78・80)。

7a類　AI型式の深鉢口縁突起部を一括した。突起は6a類に較べて全体に小ぶりである。6a類にみられた三叉状の沈刻はなく、無文ないし、縄文が施されるだけである。文様は、ほぼ横位平行の帯状文ないし、偏平化した入組帯状文である(第19図81～91)。

7b類　平縁の深鉢（BI型式？）ないし壺形土器の口縁部資料を一括した。文様は、ほぼ直線的な横位平行の帯状文で、間に磨消帯が入るものや頸部無文帯となるものがある。磨消部はていねいに研かれ、全体的に作りが良好である(第19図99～98)。7a類も同様である。口唇に刻目を2個1対で入れるものがある(94・95)。小片で不明であるが、湾曲などからすれば、深鉢ではなく浅鉢になるかもしれない。

7c類　AI型式の体部破片を一括した。しかし、小片のため器形、文様モチーフとも


1a
1
2
3
1b
4
5
6
7
8
9
10
1c
11
12
2
13
14
15
16
17
3a
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
3b
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
4
38
39
40
41
42
43
44
45
46
5
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
6a
57
58
59
60
61
62
63
64



第19図　第Ⅳ群土器破片分類図

明確でない。6a～7b類と関係する一連のものと考えられる。文様は、7b類と何ら変わる事がない。直線的な帯状文を主体としている。

8　類　頸部に施される細長い列点状沈線文に特徴のある一群である。111は、深鉢形土器でＡⅠ型式と思われ、Ⅱａの文様帯には入組帯状文の片鱗がみえる。112は、壺形土器と思われる。以下の９ａ・９ｂ類と文様技法上の関連があるだろう。

９ａ類　隆起線による鎖状文を特徴とする一群である。器形はＡⅠ型式の深鉢(115･117)と、鉢ないし椀状のもの（116)、高台の付く浅鉢（114）がある。116は口縁端部、114は頸部、115は押上げられた形で口縁端部に、117は文様帯を画す体部中程にそれぞれ鎖状文が施されている。また、鎖状文には刻目や縄文が付されていない。

９ｂ類　Ｘ字状の隆起文が施される一群で、119を除いて隆起文上に縄文が施文される特徴がある。復元ないし図上復元のできた第28図１・３の主要なモチーフとなるもので、全体の文様構成がわかる。また、刻目技法を主とするＡⅡ型式の深鉢にも認めた(図版13)。器形では、深鉢（118～121）（第28図１)、壺（112）（第28図３）の２種がある。第28図１は、器形的にはＢ形式に似るが、隆起文の巡る部分が幾分しまり、口縁がやや外反している。文様帯の構成は、口縁部に幅広の無文帯、一巡の帯状文、Ｘ字状の隆起文帯(11単位)、さらに左下から右上に連結し、連結部が三叉状文になる沈線で画される帯状文（７単位）と続き、以下研磨調整された下半無文地となる。第28図３は、大形の壺形土器で、口縁部（４単位文様)、体部上半部（４単位文様？）に文様帯がある。口縁部文様は、２個１対の貼付文（断面半月形で縦１条の沈線を加える。）を左右で三叉状沈刻文がはさみ、玉抱叉文状になるもの（ａ）と、三叉の一端をはさむ様にＸ字の隆起文が配され、輪郭を沈線で縁どる（ｂ）文様で構成される。体部上半の文様は、口縁部文様のモチーフそのままを用いて４単位で施文するが、隆起文ではなく沈線技法で描出される。モチーフ的には第28図４の小形土器に類し、弧線連結文からの系統を引くと考えられる。

10　類　刻目の付く縦長で大形のコブを持つものを一括した。刻目は１～２個で横位に施される。器形はＡⅠ型式を主体とする(第19図123～126)。コブは主としてⅡとⅡａ文様帯の境に２個１対で貼付されるものが多い（124）が、１個のもの（123・125・126）もある。

11　類　ドーナツ状の円形貼付文を持つものを一括した(第19図127～129)。器形はＡⅠ型式、壺形土器が主体をなす。貼付文は、弧線文モチーフの接部に配されている。129は、ドーナツ状ではなく円形の大形コブである。モチーフ自体は127に近い。

12　類　波状口縁部・平縁部の破片で、器形はＡⅠ型式の深鉢になると思われる。入組帯状文でも今まで見た類型とは趣を異にする。波状部の形態や文様の付け方等でも６ａ類や７ａ類とは明らかに相異する（138)。２点のみの出土である。

13 類　無文地に弧線文をやや太い工具で描き、モチーフの接部に逆C字状の隆起文を貼付する。口唇にも4単位でコブ状突起が配される。器形は、おそらく高台の付く鉢形土器で、体部からくの字状に口縁が立上る。2個体分が出土している（図版13下段右端）。

14 類　山形押型文をもつ体部資料である。1点のみの出土で全体については不明である。C地区SK226から後期末葉の土器群と共伴したもので、同時期と考えざるを得ない。器形は、体部の張る深鉢と思われ、胎土に石英粒を多く含む。焼成は良い。器厚は0.7cmを測り、色調は外面暗褐色、内面暗黄褐色を呈す。文様は山形押型文で、原体の長さ2.5cmである。施文方向は縦位で、若干の無文部を残して並列に押捺されている。外面には炭化物の附着を認める（第19図130、第25図404）（図版14下段右下）。

15 類　注口土器を一括した（図版14中段）。完形品がなく明確に器形の判るものはないが、全体的には壺形の器形に注口を付けるものが多いと考えられる。しかし、中には東北北部に顕著な二段口縁とでも言うべき盃状に開く口縁を持つものを2個体（破片）認めた。注口部分の破片は2点である。注口の基部左右には各1個のコブが貼付されている。

16a類　無文地の粗製土器を一括した（第28図5・6）（図版20）。器形では、鉢・深鉢（第28図5・6）・壺・高台付浅鉢等がある。壺・高台付浅鉢の完形品はなく、底部・口縁部から推測できるだけである。口縁は平縁と波状口縁を持つものがあり、波状口縁を持つものでは2個1対となる波状部が多い。また、波頂部ないし、波頂部から内面へと刻目を1～2条縦位に入れるものがある（図版20中段）。

16b類　粗製深鉢で、地文に櫛歯状の沈線文を持つものを一括した。7条前後を1単位とするもので目の細い136や、やや条間の粗い134、および重複させて格子目状にする135などの別がある。無文地の粗製土器と較べて極端に少ない。4点の出土である。

17 類　縄文地文の粗製土器を一括する。器形は深鉢を主体としている。縄文は、LRとRLとがあり、LRが多い。結節文を伴うものもある（第19図131～133）（図版21上段）。

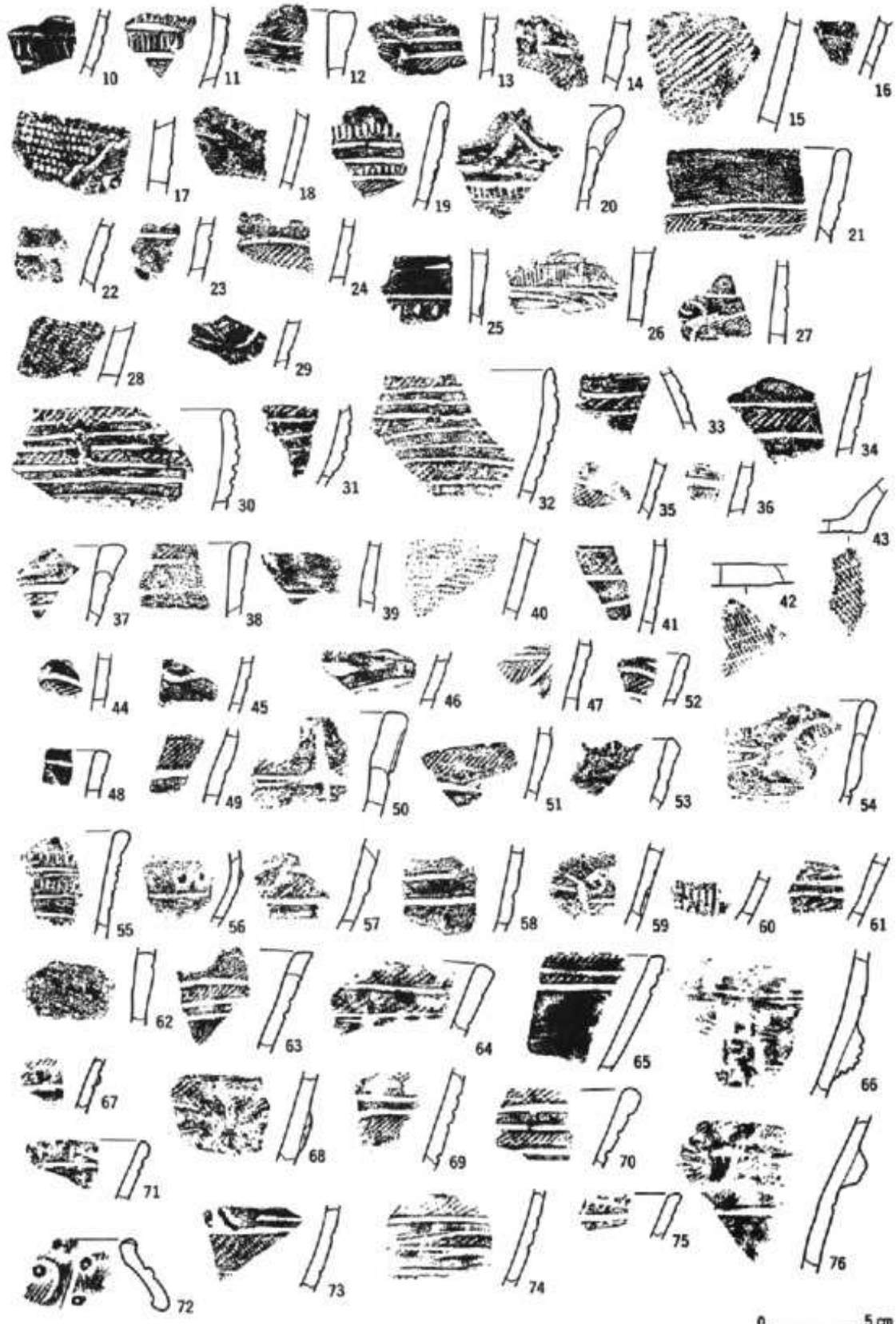
底部の類型　底部は115点の出土数がある。この内実測の可能なものについて第28図に示した。64（縄文施文）を除いて全て無文である。底部はその製作技法から大きく4類別できる。a類　高台の付く形態、b類　蛇ノ目ないし背の低い輪高台風のもの、c類　平底、d類　かさ状に中程がふくらむ形態。b類が特徴的で、平底では網代痕を多く持つ。

第V群土器（縄文晩期後葉）（第20図30～33、第25図386・387、第26図454、第27図520～522）（図版21下段）、大洞C_2式の鉢形土器（第26図454）および大洞A式に属する鉢形土器（第20図30～33）・壺形土器（第25図386・387、第27図520～522）の3～4個体分の破片が出土した。大洞C_2式の鉢（表採）を除いては、土壙内から出土したものである。鉢はST2の周溝を切るSK169、壺はB地区SK204内から各出土している。

表－3　遺構における土器類別組成

類別 / 遺構	1a	1b	1c	2	3a	3b	4	5	6a	6b	7a	7b	7c	8	9a	9b	10	11	12	13	14	15	16a	16b	17
SK1								■		■	■	■		■		■							■	■	
9		■	■			■	■	■	■	■	■	■											■		
10								■	■	■	■		■	■		■	■			■			■		
15						■																■			
17						■				■							■								
19						■									■										
21						■		■			■														■
22						■										■									
24						■							■		■										
26																							■	■	
30			■					■		■			■											■	■
SX31		■				■	■				■	■				■						■	■		■
SK33								■				■													
48								■	■	■			■		■	■	■	■					■		
63			■			■							■												
68												■		■				■					■		■
73									■																
87		■																					■		
91		■				■																			
95															■							■			
98		■				■																			
129										■			■												
SX131			■			■	■			■															
SK138		■															■		■			■			
200									■	■	■	■		■			■		■						■
201										■	■			■		■									■
203										■	■						■								■
216			■																				■		
226	■	■			■	■	■	■		■			■								■	■			■
49～51 50～52	■	■		■		■	■								■							■			■
65—53		■															■								
65—58		■													■										
67—55						■		■																	
69—58						■																■			
70—62		■				■																			
82—65									■	■			■												■
82—66										■															■
合　計	3	24	7	3	4	57	9	16	11	31	20	13	31	7	8	10	10	4	2	1	1	15	21	4	(27) (339)

※　この表は、出土々器量の多い主要な遺構およびグリッドにおける類別組成を表わす。但し、1類型のみ出土した遺構については割愛したため完全なものではない。下の合計は分類対象とした各類の個数である。全体では339点である。但し、3b類、7c類、16a類、17類等は抽出もれが大部分あり、実数ではない。他については、ほぼ実数に近い。



0 5 cm

10~18:ST1 19~24:ST2 25~34:ST3 35~47:ST4a 48・49:ST5a
50~53:ST5b 54~62:STb 63~76:SK10

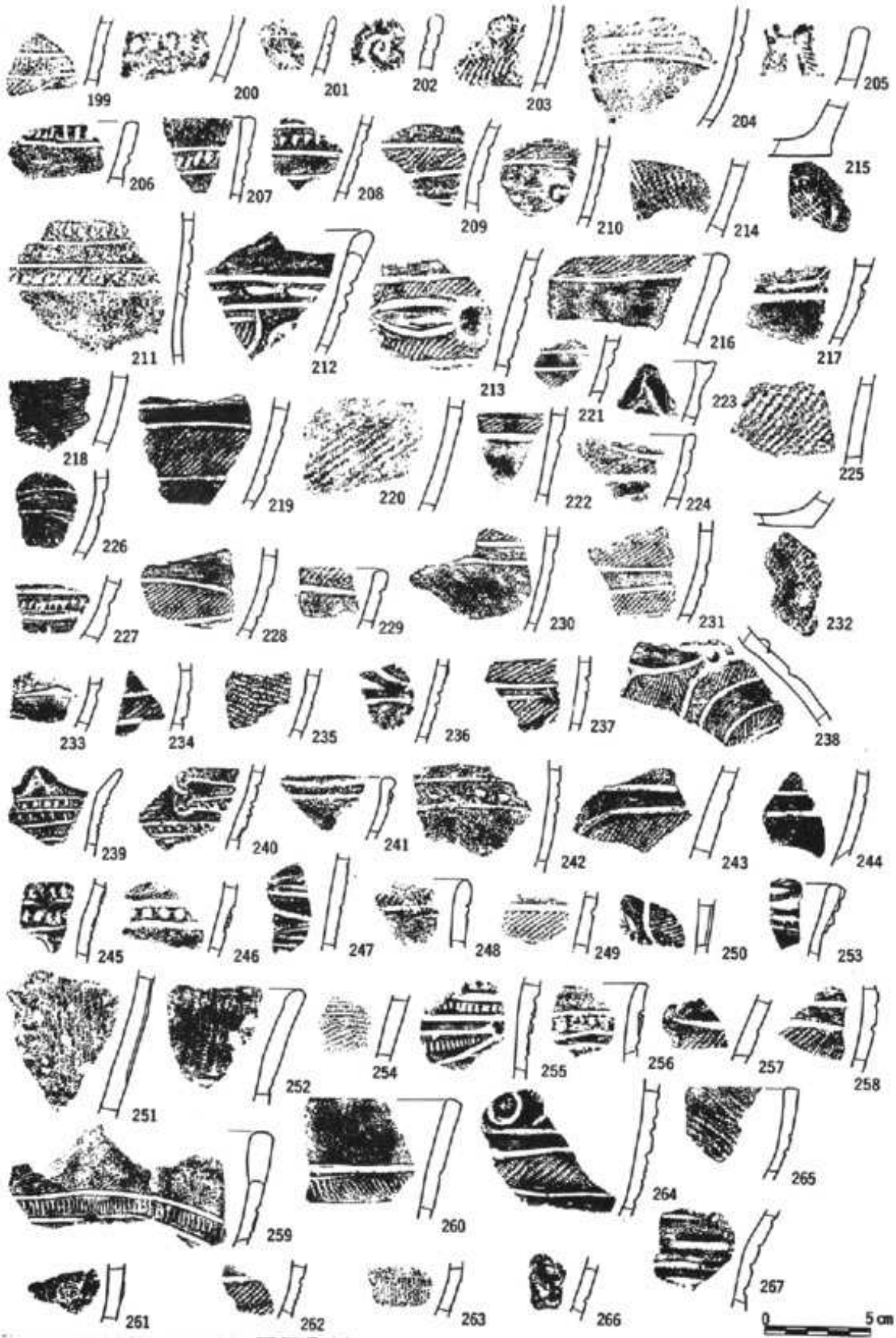
第20図 土器拓影図（2）

77～92:SK1　93・94:SK2　95:SK5　96:SK8　97～114:SK9　115:SK12
116:SK14　117:SK15　118・119:SK17　120:SK18　121～125:SK19
126～130:SK21b　131～135:SK24　136:SK26

第21図　土器拓影図（3）

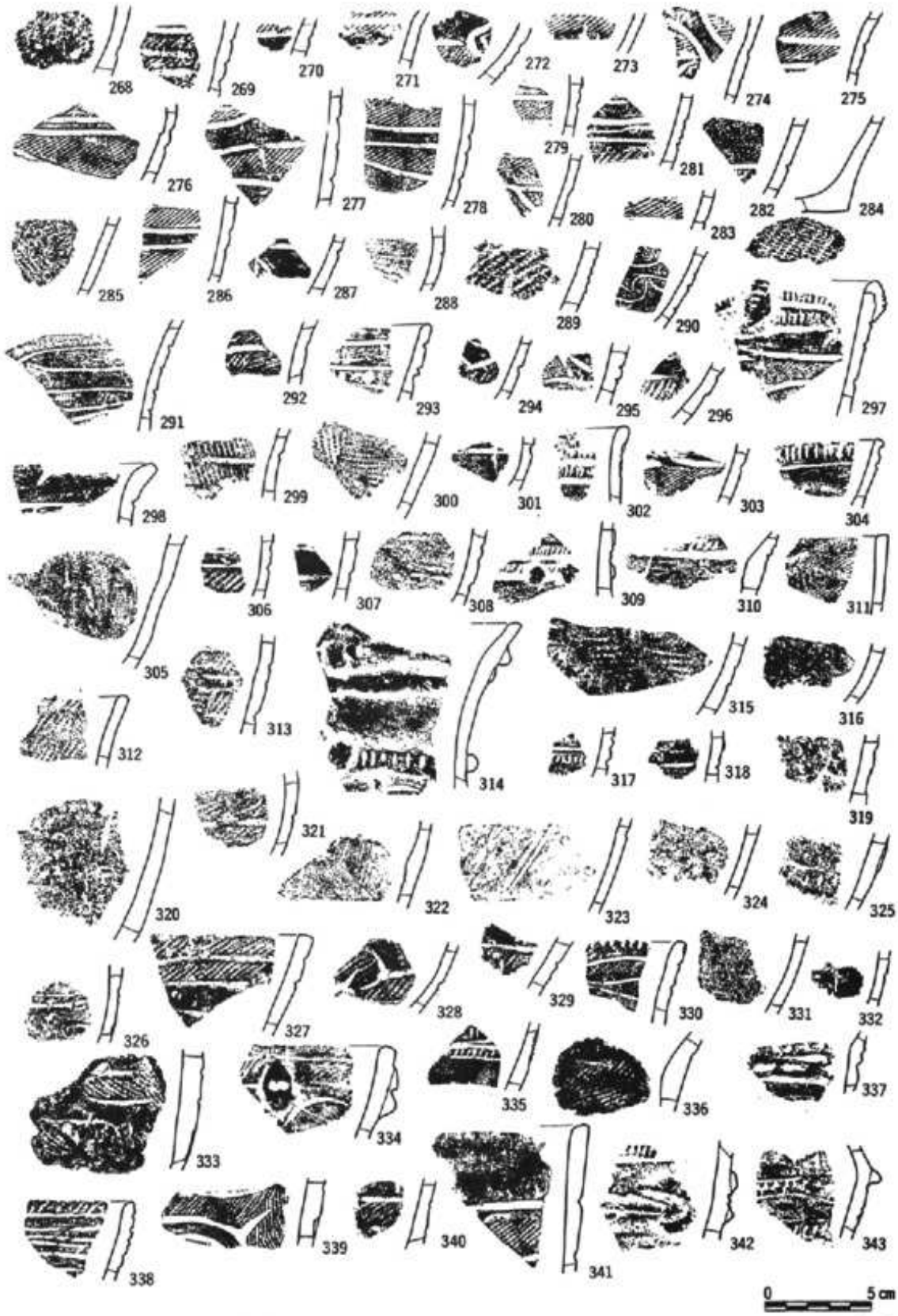
137~147:SK30 148~169:SX31 170~179:SK33 180~196:SK48 197·198:SK49

第22図　土器拓影図（4）



200·201·203·204:SK51 202:SK52 205:SK54 205:SK52 206~204:SK63 210·211:SK64 212~218:SK68 219:SK72 220~223:SK73 224~225:SK74 226:SK75 227~232:SK76 233:SK80 234:SK82 235:SK84 236~238:SK86 239~242:SK87 243~244:SK90 245~247:SK91 248~251:SK94 252~253:SK95 254:SK96 265:SK113 260~267:SK118

第23図　土器拓影図（5）

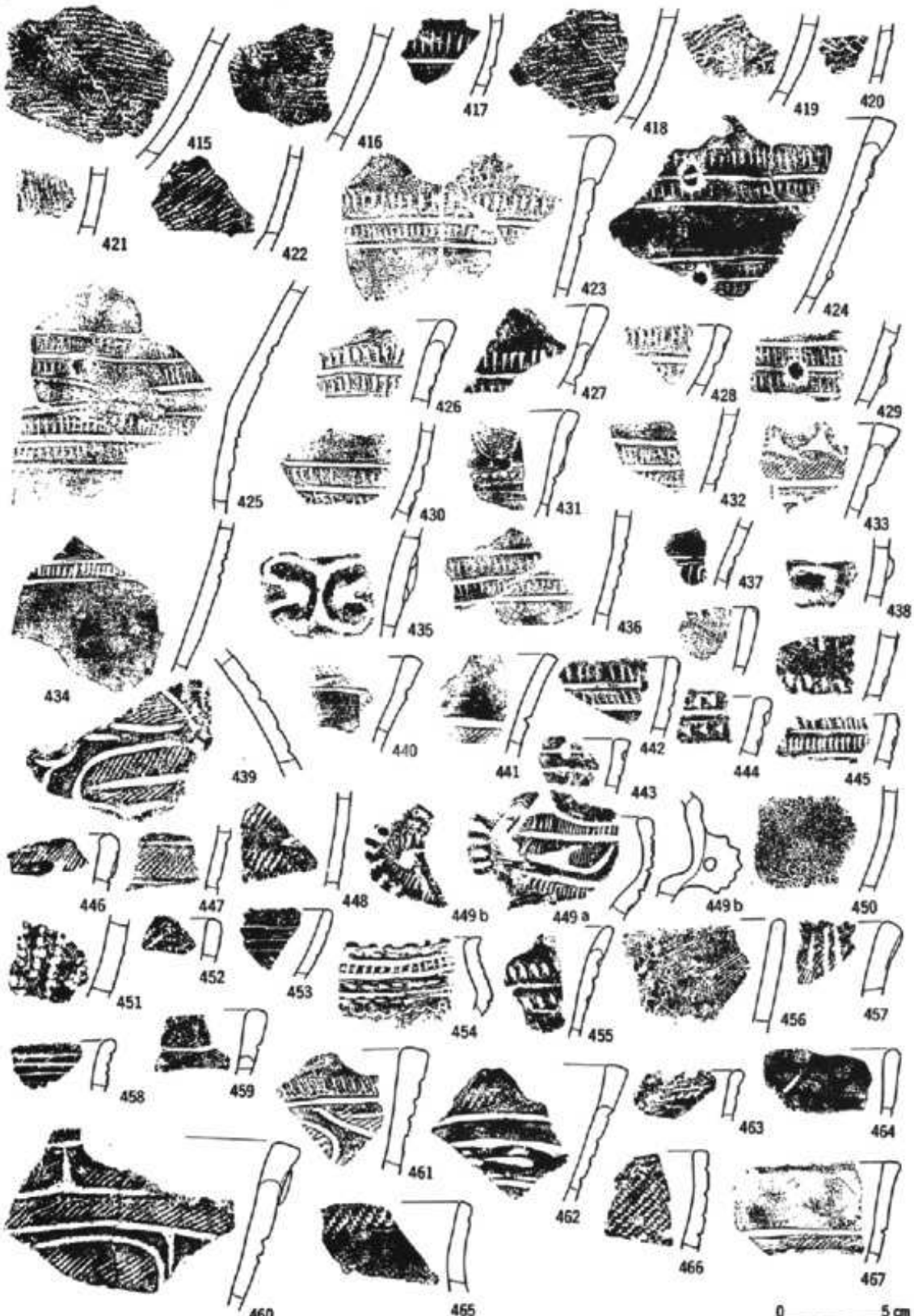


268~269:SK121 270~272:SK128 273~286 SK129
287~315:SK131 316~321:SK132 322~326:SK134
327~332:SK137 333~336:SK138 337:SK161
338:SK169 339:SK174 340~341:SK175 342:SK179
343:SK182

第24図　土器拓影図（6）

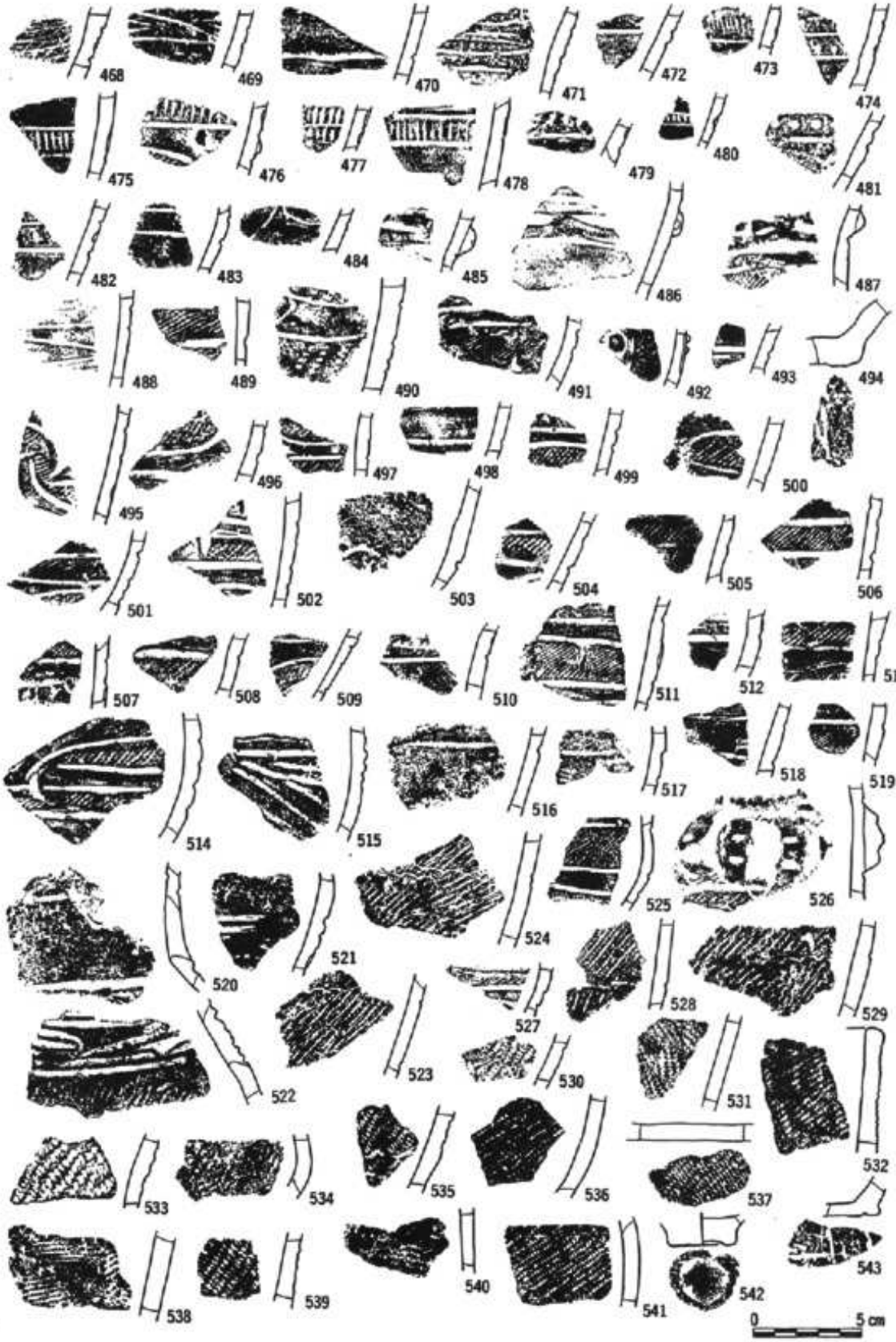
344:SK193 345~346:SK197 347~362:SX200 363~378:SK201 379~385:SK203 386~387:SK204 388:SK210 389~392:SK223 393~406:SK226 407~414:SK227

第25図 土器拓影図（7）

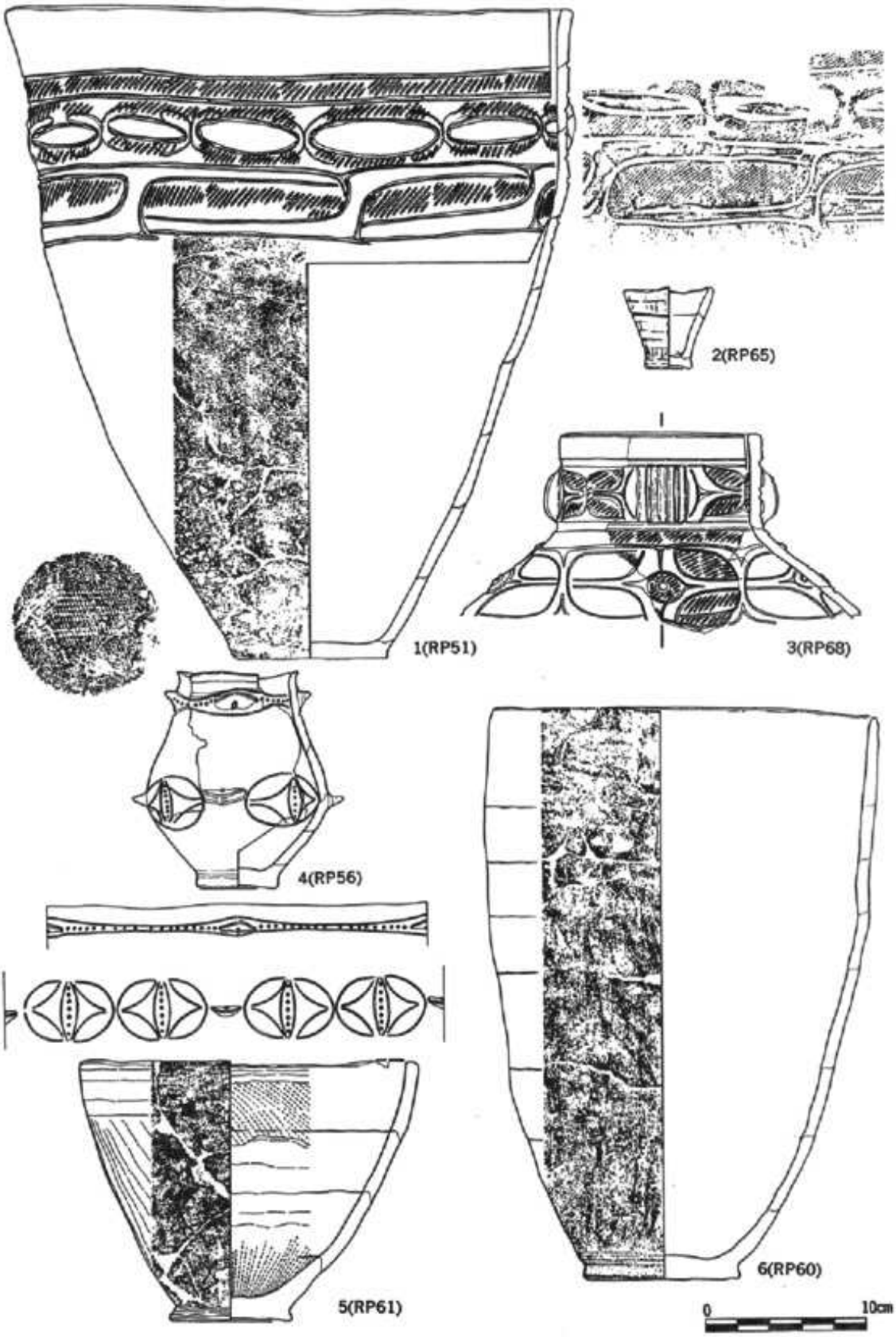


415～422：ＲＰ52（Ｂ地区ＳＫ231）　423～438：ＲＰ67（ＳＫ10）
439～441：ＲＰ68（ＳＫ197）　442～451（表採）
452～467：包含層

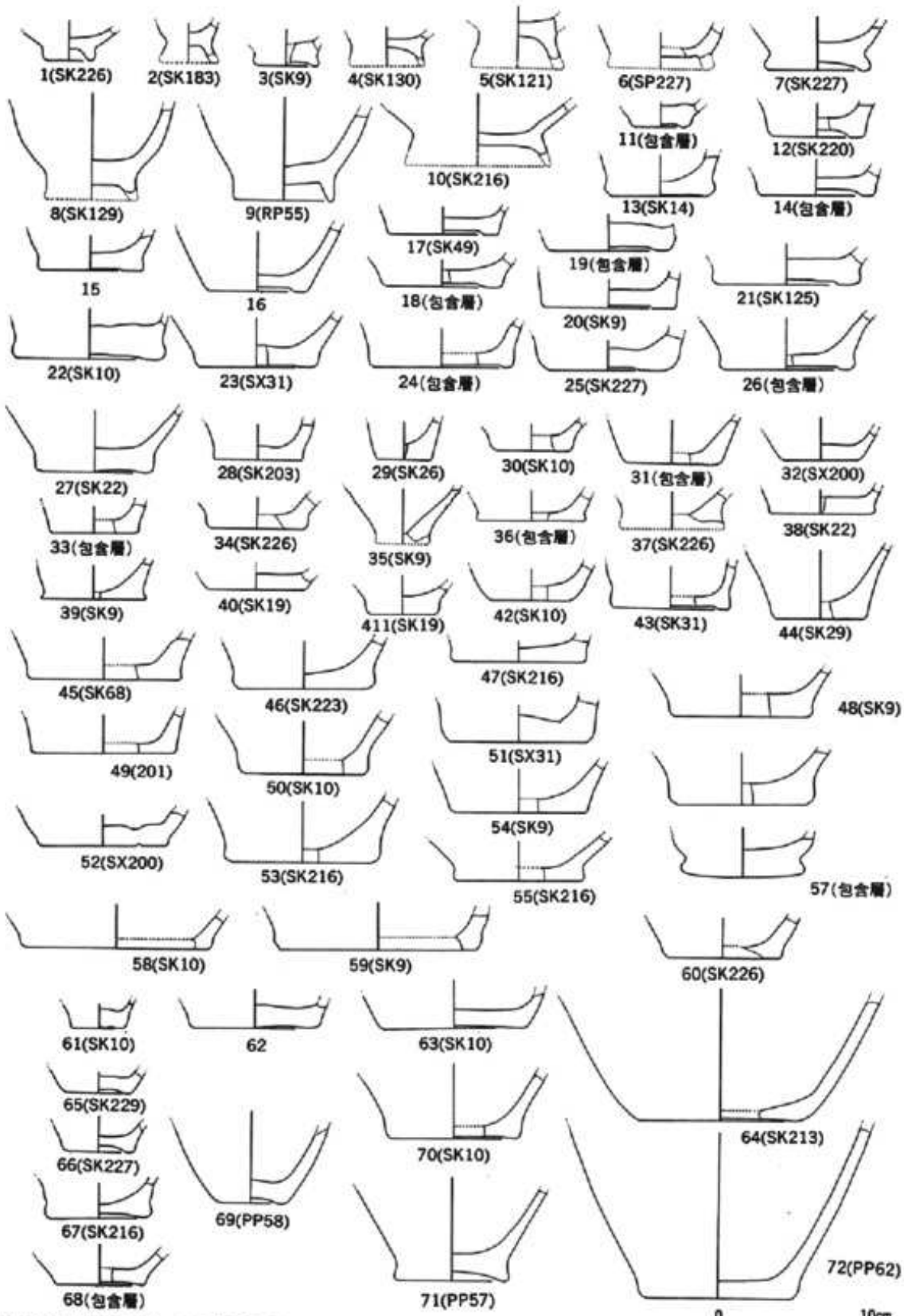
第26図　土器拓影図（８）



（包含層出土土器）　　第27図　土器拓影図（9）



第28図　土器実測図



※( )は出土遺構番号ないし包含層を示す。

a類1～6、8～10　b類11～27　C類28～64、70、72　d類7、61～69、71(57は後期初頭？)

第29図　土器底部実測図

2　石器

本遺跡出土の石器は、砕・剝片を含めて4629点である（表－1参照）。この内石鏃他の定形的な石器は、111点を数え、出土総数中の2.4%を占る。以下では、図版ないし実測図で呈示し得た102点を主な対象に分類を行い、石器群の大方を占める剝片・砕片、および石核などについては諸般の都合により割愛せざるを得ない。出土石器の時期的な事についてはVI章のまとめに記すが、その大半は出土土器群同様に縄文後期末葉のある程度限定された時期の所産と考える事ができる。各石器の遺構内でのあり方は、表－2他を参照願いたい。器種毎の点数等は、一部のものについては表－4とVI章まとめ他に記す。

石器の分類は、主として形態的特徴、技術的な特徴を基準に行うが、前者により基準を置いた（第30図参照）。以下第30図をもとに分類し、その概略を述べる。

I　石　鏃　（第31図1～4）（図版24図1～10）

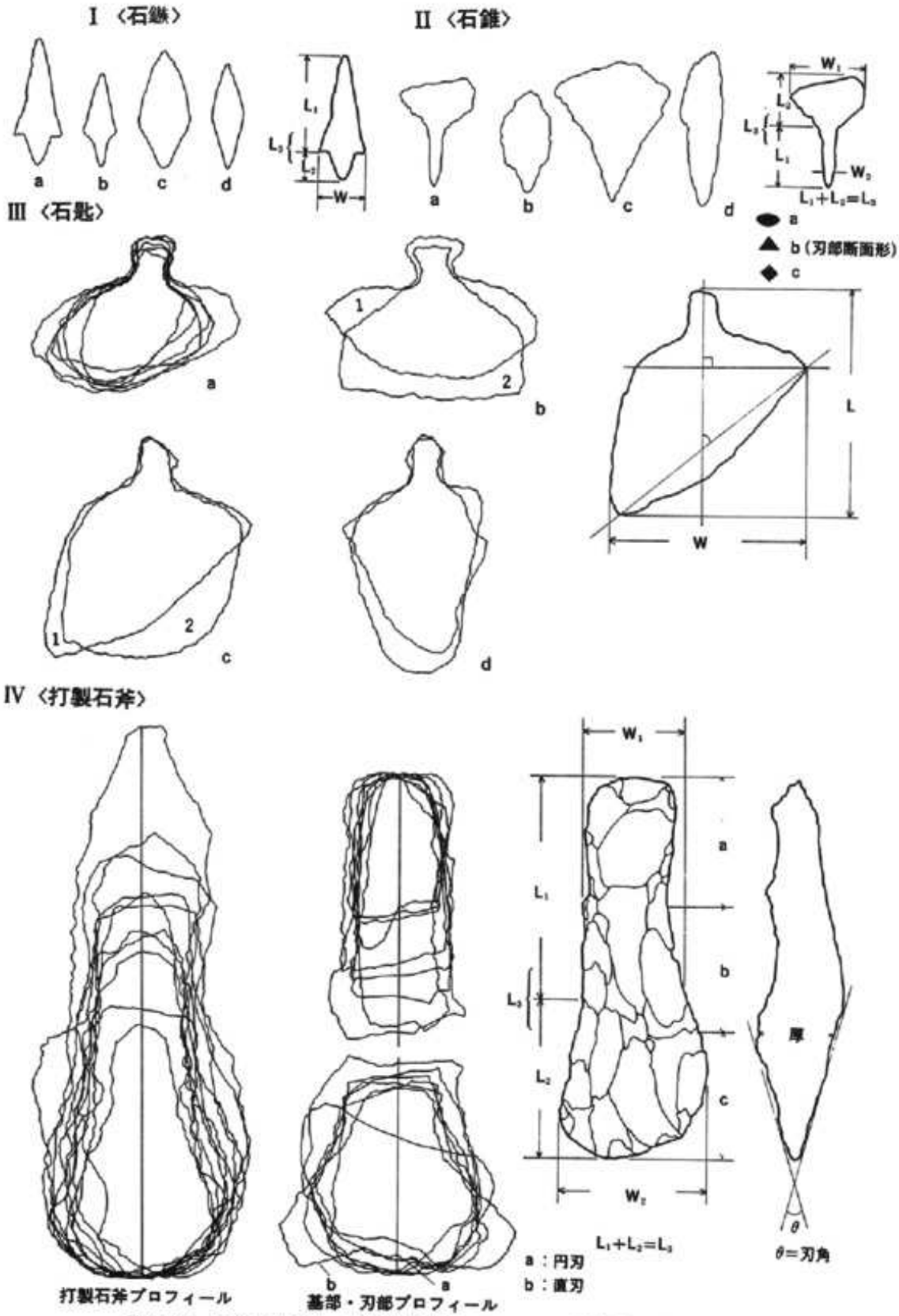
形態的な特徴からa～dの4類に分類でき、いずれも有茎である。**a類**、2点の出土があり、基部の直線的な平基有茎鏃（鈴木道之助1981）で、側縁も直線的となる。加工は、図版24－2が片面加工、第31図1が両面加工である。**b類**、側縁が直線的で、茎部の突出する凸基有茎鏃（鈴木1981）である。3点の出土がある。いずれも整った形態と両面加工が見られる。**c類**、幅広でやや側縁の湾曲するもの（第31図3）で、1点のみの出土である。最大厚3.6㎜とうすく、加工は表裏面とも器央までにはおよばない。**d類**、器央部に最大幅を持つ棒状の尖基鏃（鈴木1981）で、3点の出土がある。加工は両面から施され、断面が菱形を呈す（第31図4）。その他類別不能な欠損品（RQ54）1点がある。

II　石　錐　（第31図5～8）（図版24－11～15）

形態からa～dの4類に分類でき、さらに先端部の断面形からa～cの3類に分類できる。**a類**、つまみを持ち先端部を細身に作出するもので、2点の出土がある。断面形は、いずれも菱形のc類となる。**b類**、剝片の一端に加工して短い錐部を作出するもので、1点の出土がある。断面形は楕円形のa類である。**c類**、剝片の側縁を直線的にV字状に加工調整して錐部を作出するもので1点の出土がある。断面形は、三角形のb類である。**d類**、全体をやや幅広の棒状に調整し、基部・錐部を作出するもので、1点の出土がある。断面形は楕円形のa類を呈す。重量はC類のRQ15が11.3gと重く、他は2.0～4.3gである。

III　石　匙　（第31図9～15）（図版25）（図版32－1～3）

形態からa～dの4類に大別でき、さらに刃部形状から1・2等に細別できる。全体では15点の出土がある。**a類**、つまみに対して刃部が右下（3点）左下（2点）に斜行するもので、角度は26～55°の範囲にある。30°前後に収束するものRQ3・33・39、50°前後のものRQ14・50がある。刃部形状はゆるく湾曲し、つまみ部以下の形態は楕円形状となる。



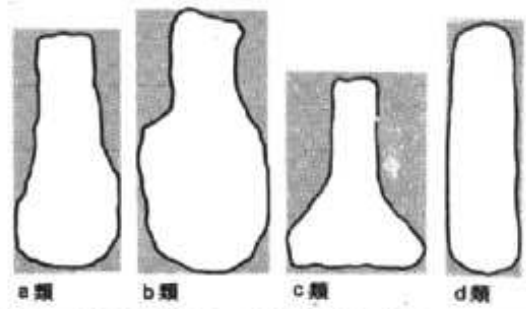
第30図　石器分類図・各種器形プロフィール重複図・計測基準図

第30図のⅢ石匙のａ類での図示は、プロフィール重複を観るため反転投影したものを含む。

ｂ類、つまみに対して刃部が下にくるもので、直線的な刃部b_2、湾曲する刃部b_1の別がある。b_1が１点、b_2が２点出土している。**ｃ類**、つまみに対して刃部が右下に斜行するもので、直刃のc_1と湾曲する刃部のc_2の別がある。ａ類に較べて全体に大形で、刃部の左右端が明確である。つまみ部以下の形態は、三角形を基本としている。c_1類、c_2類各１点の出土数である。**ｄ類**、所謂縦形の石匙になるもので、２点の出土がある。加工では、２側縁に加工調整のあるＲＱ32と、ほとんど加工のないＲＱ36とがある。その他、欠損するＲＱ24、第Ⅰ群土器に共伴すると考えられるＲＱ27、第Ⅲ群土器に共伴すると考えられるＲＱ14の３点がある。これらは、形態的にａ～ｄ類と大きく相違し異時期の所産と考えられる。

Ⅳ　打製石斧　（第32図）（第33図１）（第34図）（図版25～28）

打製石斧は、本遺跡出土石器の主体を占めるもので、欠損品等も含めて28点がある。形態からａ～ｄの４類に大別できる。また、刃部の形態からａ：円刃、ｂ：直刃の別がある。



ａ類、所謂撥形で刃部がやや湾曲するもの。ＲＱ37他12点がある。加工は両面にみとめられ、入念な基部調整が特徴的に施される。しかし、刃部の表面には自然面を残すものが多く認められる（ＲＱ２・36・37・526・94・100・108）。刃角は、32°～48°を測り、35°～36°に収束する。刃部断面形は、主として両平刃（鈴木1981）が多い。また、刃部と基部との境が不明瞭である。**ｂ類**、刃部と基部の境が明確で、刃部長・幅とも大きい。刃部形状は円刃のａである。４点の出土がある。刃角は、18°～31°で25°前後に収束し、ａ類に較べて小さい。断面形は、両平刃（ＲＱ28）と片凸刃（ＲＱ22・26・44）であり、後者が多く認められる。ａ類同様、自然面を刃部に残すもの（ＲＱ22・28・44）がある。**ｃ類**、典形的な撥形を呈すと考えられるもので、刃部は直刃のｂである。資料は、ＲＱ95・101の２点で、いずれも基部を欠損する。刃角は、26°、35°を測り、断面形は両平刃である。残存部から見て、基部は細くやや長いと推測される。**ｄ類**、刃部のＲＱ23、基部端を欠くＲＱ45の２点がある。形状はやや細長の短冊形を呈し、両面加工である。刃形は、両凸刃状（ＲＱ45）、両平刃状（ＲＱ23）を呈し、円刃である。刃角は、40°、45°とやや大きい。

Ⅴ　箆状石器他（図版32－４～７）

打製石斧とは明らかに異なる形態をもつ４点について一括する。ＲＱ25は、横長剝片を素材とするもので、第Ⅰ群土器に共伴するだろう。ＲＱ17も同様に横長剝片を素材とするが、加工調整は粗雑である。表面刃部に大きく自然面を残す。時期的には第Ⅱ群土器に伴

うと考えられる。RQ29は、大形の鍬状を呈し、幅広の刃部を持つ。半両面加工で、裏面への加工は若干である。RQ18は、小形の撥形で、直刃を呈す。両面加工で横長の剝片を素材としている。おそらく第V群土器に伴出するものと考えられる。

VI 掻・削器 (図版30)

大きさ、形態が一様でない不定形な剝片に二次加工を施す一群を一括する。15点の出土がある。加工の状態から以下のa～dの4類に分類できる。**a類**、縦長剝片を用い、主としてその両側に加工を施すもの(RQ47・88・90・96・97・99・116)。**b類**、縦長剝片の主としてその1側縁に加工を施すもの(RQ35・89・115他1点)。**c類**、不整円盤状の剝片を用い、部分的な加工を加えるもので、加工は、ノッチ状(RQ98)、掻器状(RQ117)、両者(RQ118)等一定しない。3点出土している。**d類**、やや縦長の剝片全周に加工を施し、楕円状とするもので、加工は表裏面の縁辺部に限られる(RQ16)。1点のみの出土である。以上の中で、a類(7点)が主体を占め、以下b類(4点)、c類(3点)、d類(1点)の順に構成される。

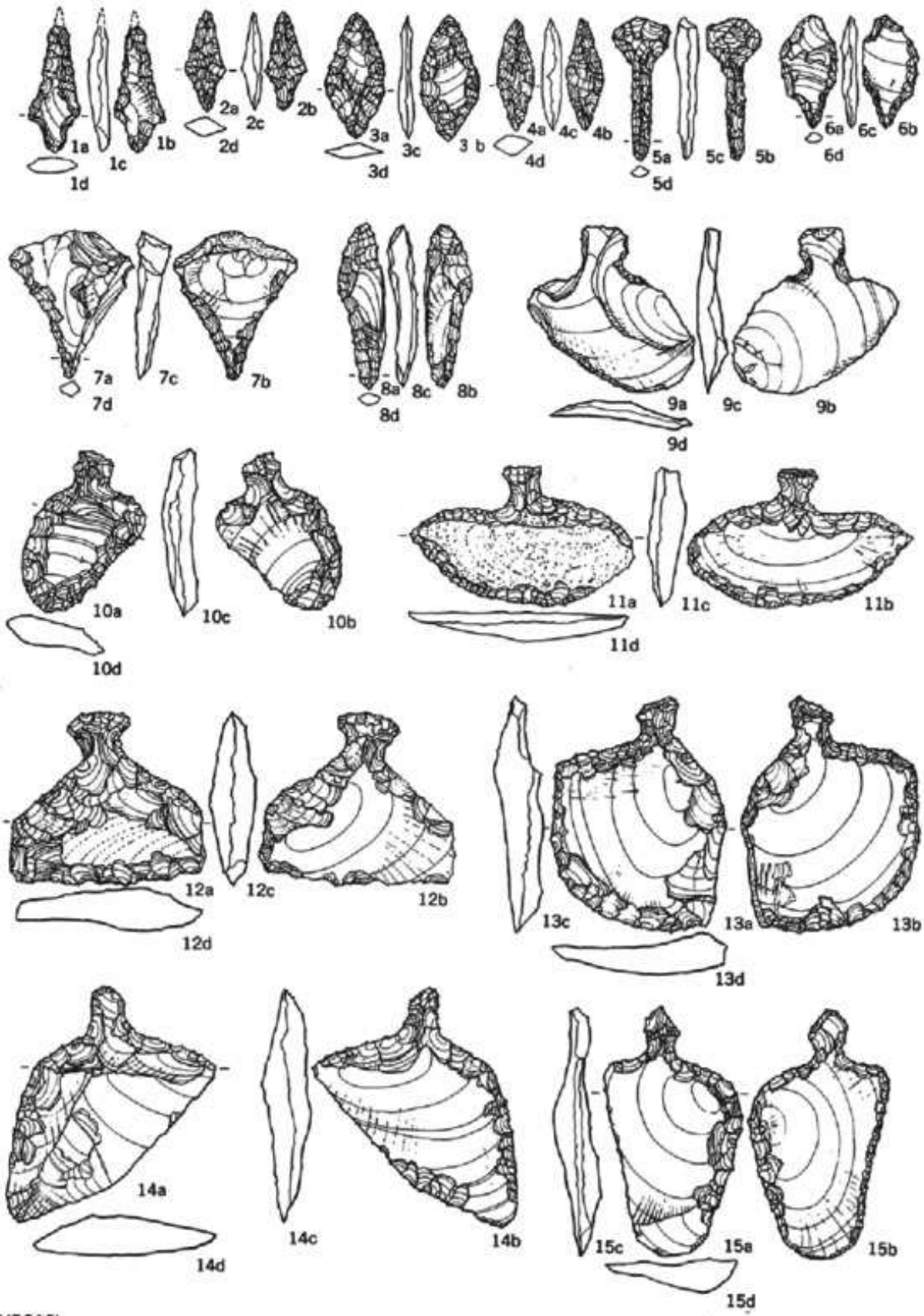
VII 凹石・磨石 (図版31—1～25)

凹石・磨石は合計29点の出土がある。そのうち図示し得たのは25点である。両者は、転用ないし並用が行われているため、一括して以下で扱うこととした。

凹石 2点の出土があり(RQ63・75)、これは凹石のみの機能として用いられた。いずれも不整形で、RQ63は表面に3個の凹をもつ。裏面には認めない。RQ75は、表裏面に各1個の凹部をもつ。石材は、両者ともやわらかな凝灰質粘版岩である。

凹石+磨石 10点の出土がある(RQ30・58・60・67・79・82・83・86)。これらは形態的特徴からa、bの2種に分類できる。**a類**、略円形の小形のもの(RQ30・79・82・86)で、RQ30を除いて表裏面に凹部をもつ。凹面と磨痕の観察では、後者から前者へ転用されたものと見なされる。**b類**、楕円形状を呈し、RQ61を除いて表裏面に不整な凹部をもつ(RQ58・60・67・83・110)。磨面との前後関係は明確にし得ない。石材は、安山岩(RQ58・60・67)、花崗岩(RQ61・101)等の目の粗い石が用いられている。a類の石材は、安山岩(RQ30・79・82)、花崗岩(RQ86)である。

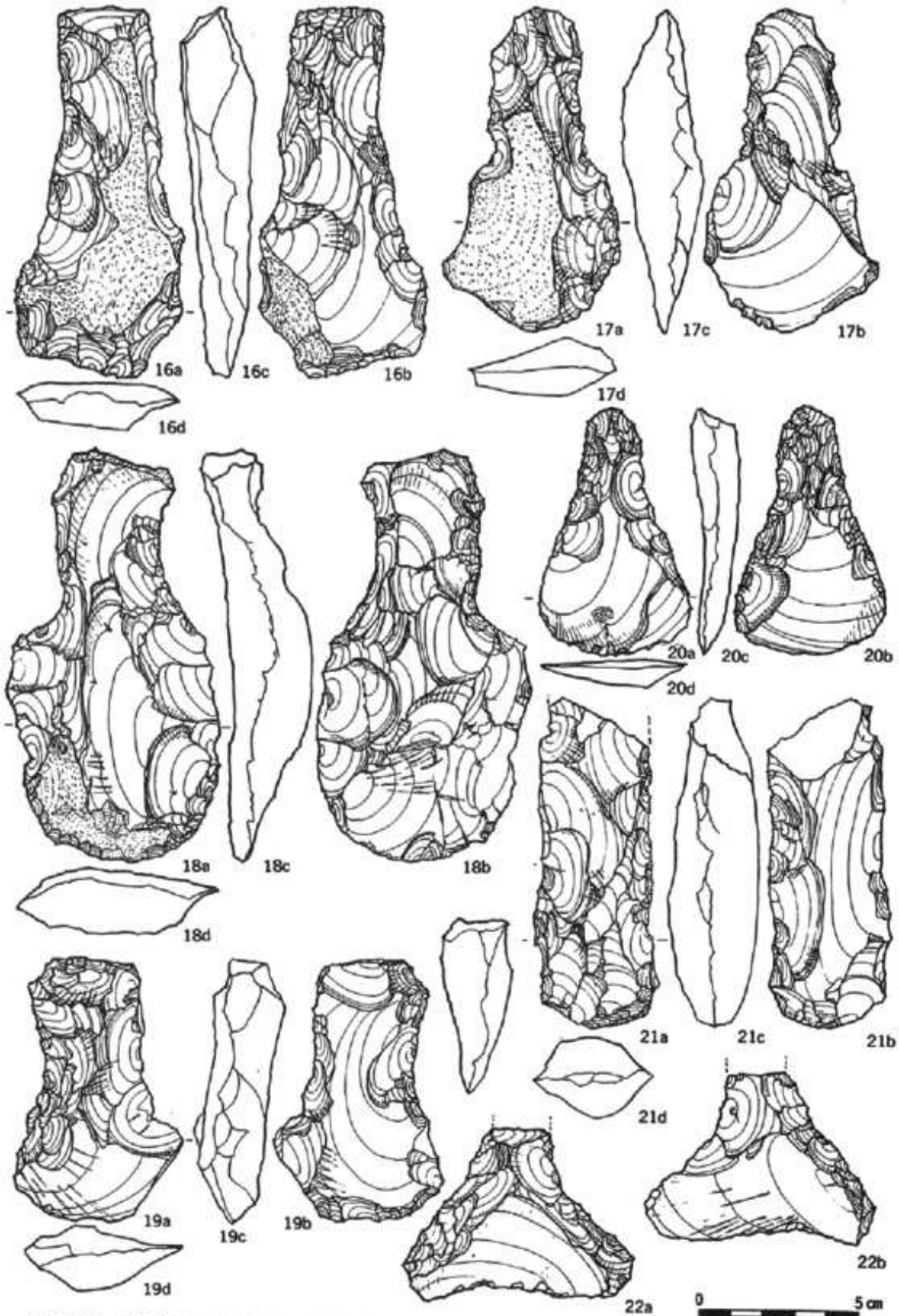
磨石 合計17点の出土がある。これらは、主として形態から以下のa～cの3類に分類される。**a類**、略球形を呈し、全面に磨痕をもつもの(RQ56・57・62)。3点があり、花崗岩を素材とする。**b類**、やや大形で整った楕円状を呈すもので、全面に磨痕が認められる。6点を数える(RQ59・65・70・74・76・78)。石材は花崗岩である。**c類**、形態の不整な一群で、1～3側面に磨痕をもつ。8点の出土がある(RQ64・66・68・69・71～73・77)。石材は、安山岩(RQ68・69・73・77)および花崗岩である。



1(RQ12)

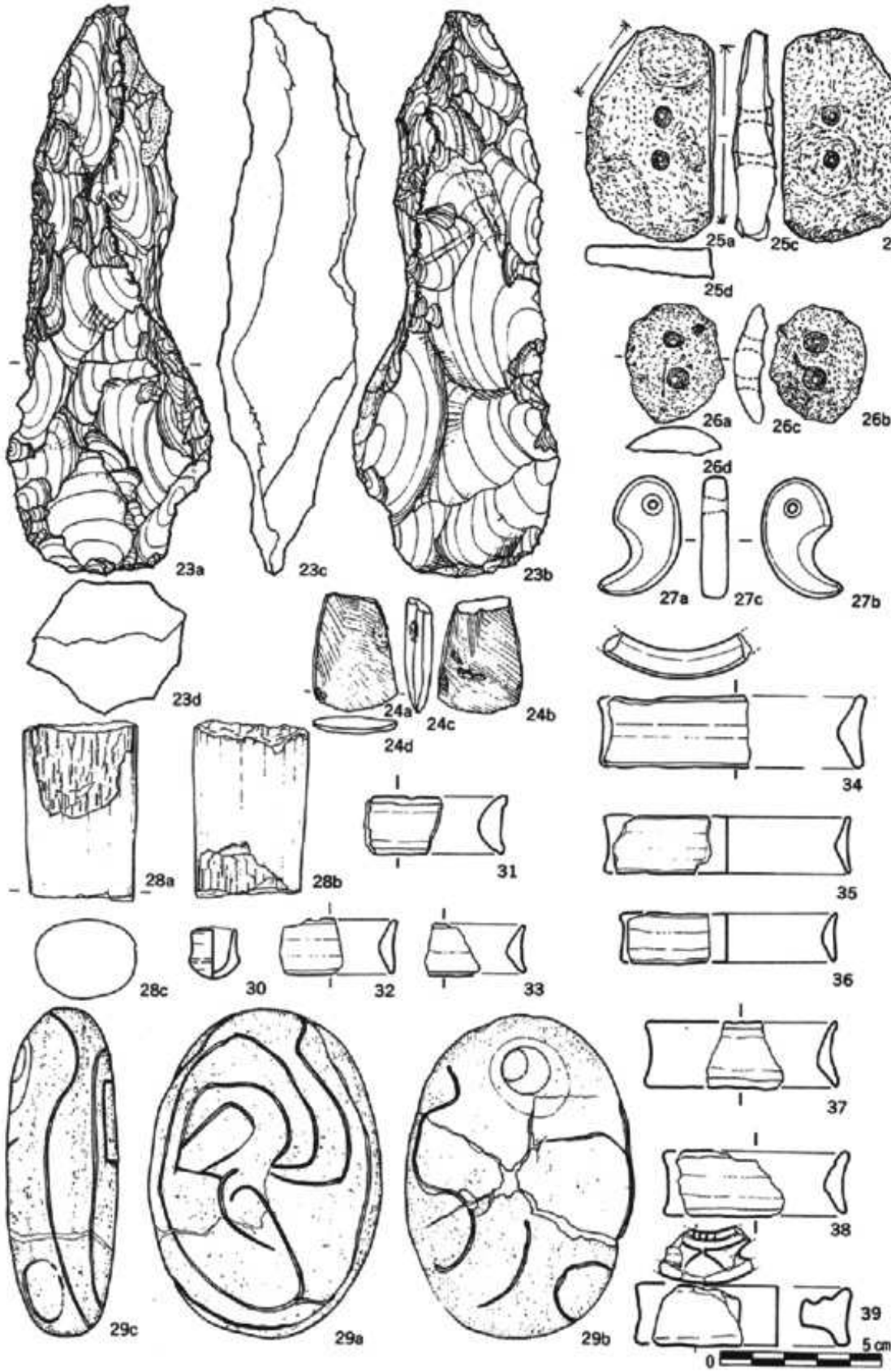
1(RQ12) 2(RQ 1) 3(RQ6) 4(RQ13) 5(RQ41) 6(RQ31) 7(RQ15)
8(RQ42) 9(RQ33) 10(RQ4) 11(RQ40) 12(RQ 9) 13(RQ20) 14(RQ34) 15(RQ32)

第31図　石器実測図



16(RQ37) 17(RQ28) 18(RQ44) 19(RQ46) 20(RQ26) 21(RQ45) 22(RQ95)
16~18 : a類 19 : b類 20 : c類 21 : d類 22 : e類

第32図 石器実測図



23(RQ53) 24(RQ 8) 25(51a) 26(RQ51b)
27(表採) 28(RQ92) 29(RQ55) 30(表採)
31(RP71) 32(RP113) 33(RP111) 34(RP70)
35(RP112) 36(RP114) 37(RP69) 38(RP119)
39(RP130)

第33図　石器・石製品・土製品実測図（3）

Ⅷ　磨製石斧　(第33図24)（図版24—16～18)

欠損品３点の出土がある。ＲＱ８は、小形の円刃、両凸刃形態をもつ定角式のものである。ＲＱ７は、刃部破片で、湾曲の弱い円刃、両凸刃形態を認める。やや大形である。ＲＱ84は、基部を欠くものでやや小形である。円刃、両凸刃形態を呈すが、厚手である。

Ⅸ　石　皿　(図版31—26～28)

３点の出土がある。いずれも安山岩質の扁平な河原石を使用したもので、略円形を呈す（ＲＱ80、図版31—27）もの２点、幅のせまい略楕円形のもの（ＲＱ81）１点である。大きさは、ＲＱ80の長径19cm、ＲＱ81の長径35.5cm、短径17cm、図版31—27の長径27cm、短径23cmを各測る。

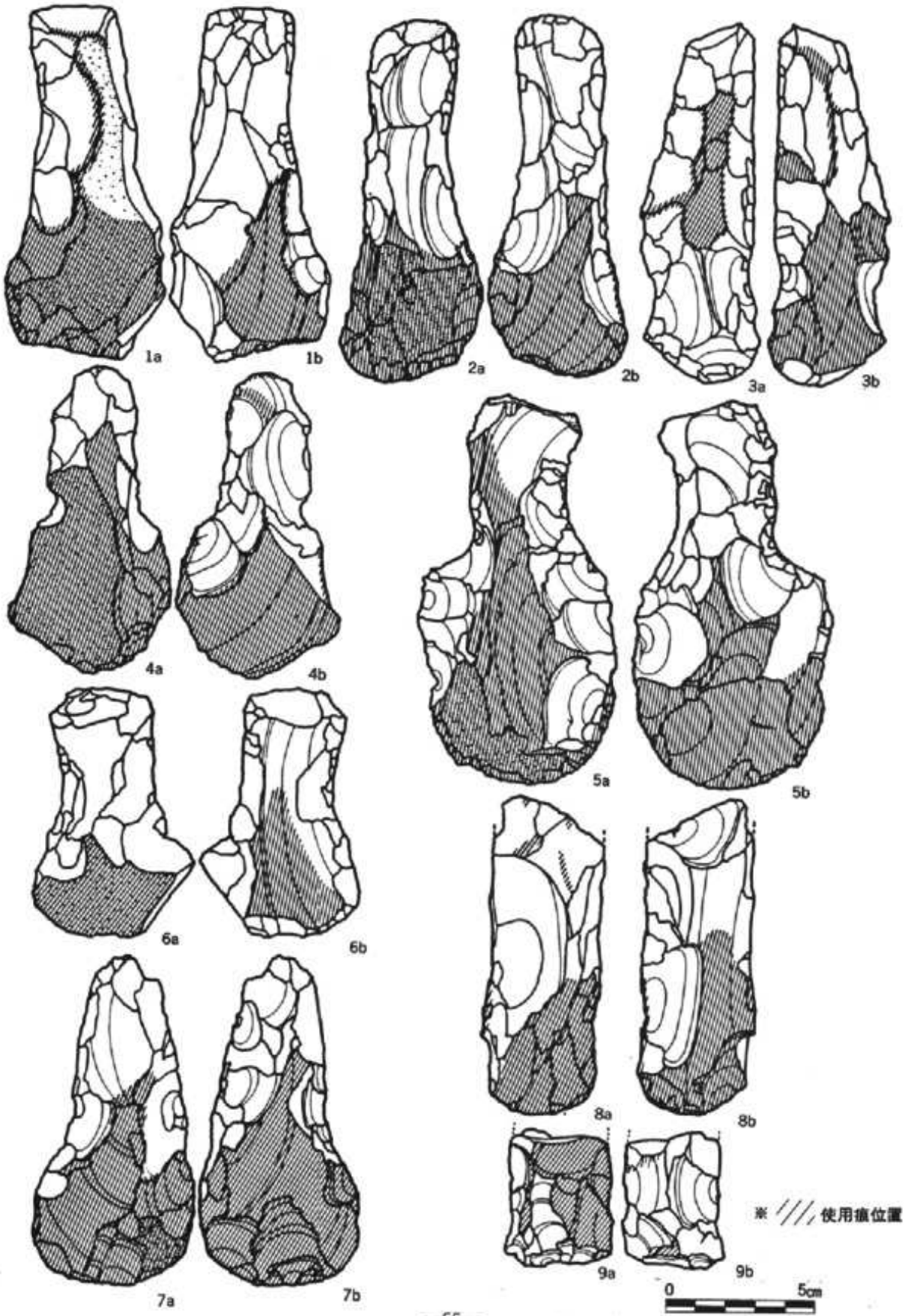
３　石製品・土製品　(第33図25～39)（図版22)（図版24—19～22)

呪術具など祭祀に係わると考えられる遺物について以下で一括して扱うこととする。石製品では、石棒（ＲＱ92)、有孔石製品（ＲＱ51$_a$・51$_b$)、岩版（ＲＱ55）の４点がある。石棒は断面楕円形で、両端を欠損する。全面が研磨調整されると考えられる。有孔石製品は、２個１対の有孔をもつもので、安山岩、緑泥変岩を素材とする。ＲＱ51$_a$は、２側縁に磨痕を認める。岩版は、長径10.5cm、短径7.5cm、厚さ3.4cmを測る。材質は、泥質凝灰岩で、やわらかくもろい。文様は、磨滅や亀裂から部分的に不明となり、裏面（ｂ面）で著しい。施文技法は、刻線である。モチーフは、ａ面（第33図29$_a$）では中央に収束する渦巻文で、渦文は側縁にもおよぶ。ｂ面では、Ｓ字文、円文を認める。また、上部に径1.5cm、深さ0.6cm（器面下部の平担部から）の凹部を持つ。

土製品では、ミニチア土器（第33図30)、耳飾り（ＲＱ69～71・111～114・119・130）の２種がある。土偶の出土はない。ミニチア土器は、高さ1.5cm、口径1.4cmで、下半部に段をもつ。丸底を呈す。耳飾りは、いずれも滑車形で、径４～8.3cmまでのものがある。完形品がなく、復元推測である。ＲＰ130を除いて、断面形がくの字状になり、施文がない。ＲＰ130は、断面が台形状となり、内面の１面に沈線が１条巡る。また、４刻目を１単位とする文様や三角形の印刻文を認める。以上は、主に土壙および集石などから出土している。

４　打製石斧の使用痕・アスファルト附着痕　(第34図１～９)（図版29)

28点の資料中12点に使用痕による光沢を観察できる。図示したものは、完形に近いものを含めた９点である。観察は肉眼で行い、10・20倍のルーペを使用した。使用痕による光沢（無数の細い擦痕）は、主として刃部の表裏面に集中するが、一部には基部にも認める（第34図１・３・４・８)。また、光沢を切る新たな加工が行われているもの（第34図３・９）他があり、刃の付替が行われていた可能性が強い。アスファルトの附着は、石匙ＲＱ34・36、石鏃ＲＱ１の３点に認められ、線状に数段で残る第34図２が注目される。



第34図　打製石斧使用痕位置図

表-4　石器計測表

I石　鏃	L_1	L_2	L_3	W	厚	重量	分類	備　考
RQ 1	17.0	12.3	29.3	11.5	5.7	1.1	b	第31図2
RQ 10	20.0	9.7	29.7	12.3	3.6	1.1	a	図版24-2
RQ 12	28.0	9.5	37.5	15.0	5.3	2.6	a	第31図1
RQ 48	19.0	8.2	27.2	11.0	3.6	0.8	b	図版24-3
RQ 6	22.8	14.0	36.8	17.3	3.6	2.2	c	第31図3・図版24-5
RQ 11			28.4	7.5	5.2	0.9	d	図版24-8
RQ 13			33.0	10.8	5.1	1.7	d	図版24-7・第31図4
RQ 49	(31.0	14.0	(35.0	15.0	4.5	(3.0	b	図版24-10
RQ 52			36.0	10.6	6.4	2.3	d	図版24-6
RQ 54			(18.3	(7.5	(2.0	(0.7		図版24-9（基部欠損）

II石　錐	L_1	L_2	L_3	W_1	W_2	厚	重量	断形	分類	備　考
RQ 15			44.5	27.4	5.0	9.6	11.3	b	c	図版24-14・第31図7
RQ 21	18.0	17.0	35.0	23.5	3.5	6.7	2.7	c	a	図版24-12
RQ 31	8.0	24.5	32.5	17.0	6.0	4.0	2.0	a	b	図版24-13・第31図6
RQ 41	28.0	14.0	42.0	16.5	4.0	6.0	2.3	c	a	図版24-11・第31図5
RQ 42	23.0	25.0	48.0	13.3	6.0	7.0	4.3	a	d	図版24-15・第31図8

III石　匙	L	W	厚	重量	分類	備　考
RQ 3	53.0	59.8	7.9	15.8	a_1	図版25-2
RQ 4	49.5	34.5	9.0	12.3	a	図版25-6・第31図10
RQ 5	46.5	49.0	10.7	17.6	b_1	図版25-5
RQ 9	53.0	58.4	11.9	26.0	b_1	図版25-11・第31図12
RQ 14	(48.0	(32.5	(14.0	(9.0		第III群土器に共伴？　図版32-2
RQ 20	(19.3	59.0	11.2	29.0	C_1	図版24-10・第31図13　未欠品
RQ 24	(32.0	(32.5	(12.5	(14.5		時期不明後期末葉？　図版32-1
RQ 27	(36.0	22.0	5.0	(7.2		第I群土器に共伴？　図版32-3
RQ 32	75.0	43.5	9.4	22.9	d	図版25-9・第31図15
RQ 33	48.2	51.0	5.6	10.6	a	図版25-1・第31図9
RQ 34	72.0	63.0	13.6	33.3	c_1	図版25-8・第31図14（アスファルト付着）
RQ 36	67.0	45.0	11.5	19.2	d	図版25-7（つまみ部にアスファルトの付着）
RQ 39	45.2	57.0	12.6	21.8	a	図版25-4
RQ 40	42.6	67.0	9.5	17.5	b_1	図版25-12・第31図11
RQ 50	48.0	42.0	9.9	12.6	a	図版25-3

V異形石器	L	W	厚	重量	備　考
RQ 17	80.0	68.0	32.0	172.4	図版32-5（第II群土器に共伴）
RQ 18	61.0	38.0	18.0	38.1	図版32-4（第V群土器に共伴？）
RQ 25	93.0	42.0	15.0	58.8	図版32-6（第I群土器に共伴）
RQ 29	(80.0	95.0	20.0	86.4	図版32-7（第VI群土器に共伴？）

〈打製石斧〉 L_1は基部長、L_2は刃部長、全長L_3で表記した。
厚は最大厚で、石器をa・b・cに三分した場合どこに最大厚があるかを示した。
刃形は、aが丸刃、bが直刃の刃を示す。
刃角の計測は、横式図で示した。

VI打　斧	L_1	L_2	L_3	W_1	W_2	厚	部位	刃角	重量	分類	備考	
RQ 2	64	45	109	42	55	21	b	a	38°	118.4	a	図版26-3
RQ 22	49	52	101	39	55	18	b	a	18°	89.0	b	図版26-2
RQ 26	36	43	79	27	47	14	a	a	26°	33.6	b	図版27-3
RQ 28	47	55	102	29	57	23	b	a	24°	80.4	b	図版27-1
RQ 35	73	48	121	36	45	26	b	a	35°	115.3	a	図版26-5
RQ 37	67	47	114	46	53	23	a	a	35°	127.9	a	図版26-1
RQ 43	80	38	118	33	37	26	b	a	38°	109.9	a	図版26-6
RQ 44	57	74	131	43	66	27	b	a	34°	136.1	b	図版27-2
RQ 46	46	37	83	49	53	21	a	a	31°	83.8	a	図版27-5
RQ 52a	93	47	140	48	54	27	a	a	36°	180.0	a	図版26-4
RQ 53	86	88	174	41	63	42	b	a	39°	355.9	a	図版27-4

(基　部)	L_4			W_1					重量		備　考
RQ 19	(60			33					(38.9		図版26-3
RQ 47	(70			30					(46.9		図版25-6
RQ 91	(60			33					(67.9		図版25-2
RQ102	(60			39					(67.7		図版25-5
RQ103	(45			28					(36.9		図版25-7
RQ106	(50			28					(21.9		図版25-4
RQ107	(40			27					(22.4		図版25-8
RQ109	(30			31					(28.2		図版26-1

(刃　部)		L_5		W_1	W_2			刃形	刃角	重量	分類	備　考
RQ 52b		58		38	57			a	32°	(88.3	a	図版26-11
RQ 93		46		32	44			a	36°	(46.3	a	図版26-13
RQ 94		42		57	59			a	42°	(42.9	a	図版26-12
RQ 95		42		29	74			b	35°	(52.7	c	図版26-14
RQ100		44		39	51			a	39°	(50.5	a	図版26-9
RQ101		38		37	55			b	26°	(42.1	c	
RQ108		46		34	55			a	36°	(46.1	a	図版26-10
RQ 23			(69		39	22		b	45°	(32.4	d	図版27-7
RQ 45			(80		38	28		a	40°	(81.8	d	図版27-6

基部・刃部としたのは各部位片の可能な部分の計測値である。

計測表　註
〈石鏃〉 L_1は先端部長、L_2は基部長、全長はL_3で表わす。
Wは最大幅で、厚は最大厚である。
〈石錐〉 L_1は先尖部長、L_2はつまみ部長、全長はL_3で表わす。
W_1は最大幅、W_2は先尖部先端から5mm上部の値である。
断形は、先端部の断面形で、aは楕円形、bは三角形Cは菱形である。厚は最大厚である。
タイプによってL_1・L_2の区別の付かないものがあり、その場合L_3のみの表記とした。
〈石匙〉 計測および分類は、つまみを上に置いた状態で行った。
Lは、つまみ部軸線上の長さであり、Wは軸線に直行する幅の値である。厚は最大厚である。
〈異状石器他〉 時期的に異なり、打製石斧の概念から外れる一群で、それぞれの最大長L、最大幅W、最大厚の値を記した。
＊ 単位 (mm)、(g)

VI まとめ

1 遺構

(a) 住居跡

A地区で8棟確認された。調査区中央部南東方向一北西方向に一部重複しながら位置している。やや北へ張り出す中位段丘縁辺に沿う配置である。

時期的には縄文後期末葉に置かれるものと考えられる。出土土器の分類・考察により、比較的短い期間、所謂、後期末葉コブ付土器第III～第IV段階および晩期初頭大洞B_1式期に集中的に構築された住居跡群といえよう。各住居跡の微視的な時期差、推移については不明な点が多い。時期決定のひとつの根拠とした柱穴・床面あるいは床面直上出土の遺物は、前者の場合、ひとつの住居跡を構成すると考えられる柱穴自体、他の住居跡に関連する柱穴である可能性が特に重複箇所において全くないとは言えない点、後者の場合、出土した資料が攪乱により出土地点に運ばれた可能性が考えられる点等を考慮すれば、それら資料をもって各住居跡の時期決定に資するには若干の疑問が残る。これらの問題点を踏まえ、さらに土壙・各住居跡の重複による新旧関係を基準に敢えて時期区分を試みれば以下のようになる。

第1期　コブ付土器第IV段階期　ST1・4a・6・(5a)

第2期　コブ付土器第IV段階～大洞B_1式期　ST2・3・4b・5b　(大洞B_1式に併行関係を有する土器片は微量であり、主体は第IV段階期の新しい時期と考えられる。)

住居跡の構造は、全体に円形あるいは楕円形を呈し、柱穴は主として住居の周囲に6～8本巡り、内部に2～5本存在するという形態をとる。壁はST4a・4bで一部認められたが他の6棟については検出されなかった。これは、表土層の攪乱による破壊、または地山ローム層上への腐蝕土の堆積が厚いものではなく、さらに腐蝕土上に構築された住居跡が浅い竪穴住居であったかあるいは平地式の住居であった可能性が考えられる。現時点では結論は導き出し得ない問題であり、今後の類例の増加を待つ必要があろう。なお、現在までに確認されている当該時期の類例を集成したものが表－5である。現在、砂川A・石ケ森の両遺跡については報告書が未刊のため（昭和57年度刊行予定）詳細は不明な点が多いがこれらの類例によれば、形態的には竪穴住居と平地式住居に大別が可能である。神矢田1号・2号、うぐいす沢1～7号の各住居跡は壁の立ち上がりが認められず、平地式住居の可能性が強いと報告されている。特にうぐいす沢遺跡の場合、性格としてキャンプサイト的な遺跡の可能性も考えられる。また、炉跡については本遺跡の場合検出された3基はすべて地床炉であった。

表－5　山形県内縄文後期住居跡一覧（昭和57年3月段階）

	遺跡・住居跡名	平面形	種別	長径×短径	周溝	柱穴(主柱穴)	壁高	炉跡	時期
1	神矢田1号（遊佐町）	円形(?)	平地(?)	6×7m	無	17	?	石組炉(中央)	後期末葉
2	〃 2号（〃）	〃	〃	6.2×6.2(?)	?	10	?	地床炉（西寄り）	後期末葉(?)
3	砂川A3号（朝日村）	?	竪穴(?)	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	後期末葉
4	石ヶ森1～10号（高畠町）	円形または楕円形	方形	〃(?)	?	?	?	?	〃
5	作野2号（村山市）	不整楕円形	〃	3×2.6	無	2	20cm	石囲炉(外部)	〃
6	上平柳1号（高畠町）	楕円形	〃	5.0×3.6	?	?	?	未詳	後期
7	砂川A9～10号（朝日村）	未詳	〃	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	〃
8	うぐいす沢1号（寒河江市）	円形	平地(?)	4.5	無	(7)	無	?	後期末葉
9	〃 2号（〃）	〃	〃(?)	5.5	〃	(7)	〃	〃	〃
10	〃 3号（〃）	〃	〃(?)	5.5～6	〃	(6)	〃	〃	〃
11	〃 4号（〃）	〃	〃(?)	5	〃	(5)	〃	〃	〃
12	〃 5号（〃）	〃	〃(?)	5～5.5	〃	(5)	〃	〃	〃
13	〃 6号（〃）	〃	〃(?)	6	〃	(7)	〃	〃	〃
14	〃 7号（〃）	〃	〃(?)	5～5.5	〃	(6)	〃	〃	〃

（b）土壙・集石遺構

土壙は、A地区では中央からやや北寄りに偏在する一群と南側に一群が検出された。時期的には縄文後期末を主体とするが、SK224では中期末葉、SK90では晩期後葉の土器が出土した。B地区では大形の浅い土壙（SK201）よりRP土器、SK200より晩期大洞A式の土器が出土した。また、C地区はA・B両地区から続く中段階丘縁辺部直下にあたり、この地点で検出された土壙の様相は廃棄された土器小破片が比較的まとまっている状況であった。

集石は住居跡内および住居跡と重複する土壙内に検出されたが、直接住居跡と結びつく遺構であるかについては不明な点が残る。

（その他の遺構）

埋設土器は明確に住居跡内に埋置されていたものはEU125の他はない。中でもEU192およびB地区EU230は住居跡群から離れ単独で検出されたもので、集石の在り方などとの関連で興味深い現象といえよう。

溝跡は縄文時代に属するもの1基が検出されたがその性格については不明である。

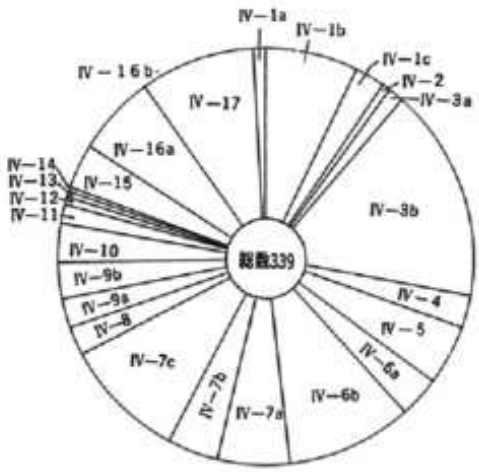
ロームマウンドはSX31・SX101と2基検出された。覆土内より縄文前期の土器が出土しており、やや特異な遺構といえる。

その他、検出されたピットのうち、遺構番号19・21a・24・72・73・174・175がやや趣を異にしている。プランは円形を呈するが大型で深さも100cm前後と非常に深く、礫層を突破している。この中で73・85・174・175が約4mの方形の各頂点に位置するよう配置しており、何らかの遺構かこの4基のピットを中心に存在した可能性が考えられる。

2 遺 物

(a) 土 器

本遺跡から出土した土器は、縄文時代早期末葉から晩期後葉までのものを含む。しかし、9割強以上は、縄文時代後期末葉期の「コブ付土器」様式ないし新地式の名で呼ばれる土器群である(野口義磨1981)。本報告では、出土器群を時期毎に第Ⅰ～Ⅴ群に大別し、その主体を占るコブ付土器様式について細別を行った。第Ⅳ群土器の1a類～17類までの細別である。この分類は、完形品が少ないため、破片個々の主として文様や形態に拠っている。また、第Ⅰ～Ⅲ群、Ⅴ群の土器については、資料的に少なく、個々の説明に止まった。第Ⅵ群土器の類別組成は、左のグラフとなるが結果的には必ずしも有意なものとはなっていない。内容については以下で説明を加える。



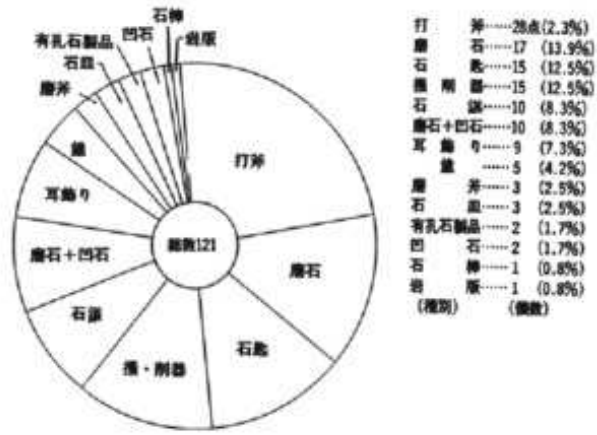
第Ⅰ群土器は、早期末葉の縄文条痕文土器1点、前期初頭の羽状縄文系土器2～3個体分の破片14点が検出されたにすぎない。前者は、東北南半の梨木畑式に関連すると考えられるが、器形等で異なりなお問題が残る。後者は、他の共伴する土器がなく不明確であるが上川名Ⅱ式～大木Ⅰ式に位置づけられよう。第Ⅱ群土器は、中期末葉期の一群である。類似資料は、飯豊町石箱遺跡(加藤稔他1980)、飯豊町郡之神遺跡(山形県教委1979)、山形市二位田遺跡(山形県教委1976)他があり、まとまりをもつ。これらは、大木10式期の諸段階(丹羽茂1981)の第Ⅱ～第Ⅲ段階に係わると考えられる。山形市西高敷地内遺跡(山形県教委1979)では、大木10(新)式として扱った一群に相当し、口縁部文様帯の分化、単位文様間の連結等に特徴がみられた。また、三十稲葉式の刺突文施文技法に類似する第18図3・4は、他の共伴土器と同時期と考えられる。狭義の三十稲葉式、称名寺式との関連が問題として残るが、時期(段階)的にはそこまで降ると思われない。地域資料の集成、編年的考察の進展を俟って検討される要があろう。第Ⅲ群土器は、6点の出土数である。文様の特徴からみれば、典形的な所謂三十稲葉式に比定できる。共伴したものの中には、堀之内Ⅰ式類似の資料(図版21中段右端)1点がある。上述第Ⅱ群土器とは区別される。

第Ⅳ群土器は、本遺跡の主体を占るもので「コブ付土器様式」の後半段階に位置する。破片の形態および文様を主とする分類では1a～17類までの細別を行った。これらは、相互

に関連し、一個体を成すものと当初の時点から予測されたため、他遺跡における完形土器の形式(form)や型式(type)を考慮している。しかし、必ずしも充分ではないだろう。表－3は、類別した土器群の遺構内での在り方を示している。また、土器類別組成グラフでは、無文・縄文地文などの資料を除いて文様判別可能なものを各遺構から抽出し、その類別割合を示している。一類は、細い刺突や刺突によるコブ状隆起を残す特徴から安孫子昭二氏の第III段階に相当すると考えられる。数的に1b類が多くなっているのは、本来3b類とすべき資料が大部混入したためであろう。全体では4％前後と考えられる。12類は、型式を異にする2点に限られる(第19図137・138)。やや古手の技法がみられ、新潟県北部の三面、元屋敷遺跡出土の土器等に系統がたどれる。14類は、山形押型文を持つ。共伴した土器は、すべて後期末葉の土器(第25図393～406)である。この種の土器は、長井市長者屋敷遺跡(縄文晩期大洞A式に伴出？)、新潟県新発田市村尻遺跡(縄文晩期大洞C_2～A式に伴出？)等でわずかながら類例が知られる。本遺跡でも若干の大洞A式併行の土器が出土している事を考慮すれば、縄文晩期の後半期に位置づけられる可能性が残る。その他の類型は、破片資料のため明確でないが、三叉文や、魚眼状文、玉抱三叉文がほとんど認められない事などからして、第IV段階に位置づけられる。なお、本遺跡第IV群土器は、宮城県沢上遺跡(後藤他1971)の一部、福島県三貫地遺跡(渡辺一雄他1981) F地点出土土器に類似し、より後者の様相に近いと言える。県内の遺跡では、高畠町石ヶ森遺跡、上山市沼田遺跡、村山市作野遺跡、鶴岡市谷定遺跡、遊佐町神矢田遺跡、平田町高畑遺跡等が関連する。第V群土器は、山形県南部県境域に特徴的な大洞A式である(佐藤1980)。

(b)　石　器

石器は4629点の出土があり、この内所謂石器が111点であった。土製耳飾りを含めた組成は、右のグラフとなる。数的には、打製石斧が28点で全体の23％を占め最も多い。次いで磨石17点、石匙・掻削器以下の順となる。これらの大半は、後期末葉期、コブ付土器第III～IV段階期に伴うものと考えられる。異時期に属すると考えられたものについては、前章Vの2の中で個別的に説明を加えた。以上の中で特徴的なのは大部分の資料に使用痕を認める打製石斧である。形態的には、a類が主体を占める。石錐では、有茎のb類、棒状を呈すd類が数的にまとまるが、全体的には少ない。



◇町下遺跡の石器群(土製品も含む)組成

石匙は、a類が主体を占め、規格性が強い。磨石は、17点の出土数がある。凹石と併用されたものを含めれば27点となる。この時期のまとまった石器群の報告は意外に少なく、地域内での比較検討を行い得ない。組成の面からだけに限れば、地域的に隔たりがあるが、埼玉県東高井遺跡の様相に似る。そこでは、各器種を一定保持し、石棒・岩版他の祭祀関係の石器を伴うなどの特徴を認める。また、土掘り具と考えられる打製石斧、加工具としての石匙、調理具としての磨石類の占る割合の多さからは、植物質食料の採集や調理加工にかなりの比重を置いた事が推測される。打製石斧の類例は、山形市坊屋敷（山形県教委1981）、村山市作野遺跡（加藤稔他1981）、山形市高橋遺跡（山形県教委1976）などに認められるが、そこでは量的なまとまりはそれ程認められない。

（c）　土製品・石製品

土製品は、ミニチア土器1点、滑車形耳飾り9点に限られ、土偶他の例はない。耳飾りは、主として土壙から出土している（第6図）。文様はRP130を除いてはなく、全体に無文を基調としている。RP130は、形態や文様を持つ点で他と区別できる。

石製品は、有孔石製品、石棒、岩版の3種がある。各々2・1・1の出土数である。有孔石製品は、円形の安山岩礫片に2孔を穿っただけのもの、不整長方形で2孔を穿ち側縁を一部研磨するものの2種がある。機能としては、何らかの締め具と考えられ、晩期初頭期（大洞B_1式）前後に多出する傾向が認められる。類例は、山形市坊屋敷遺跡、秋田県藤株遺跡などにややまとまった資料が見られ、円形で中央部のくぼむもの（大形のボタン状を呈す。）や、半月形、長楕円形のものなどが知られる。また本遺跡からは、以前に地元民によって採集された単孔をもつ勾玉様垂飾品（第33図27）がある。

岩版は、集石遺構と思われるSM8の小土壙内から耳飾り片等と一諸に出土している。文様は、刻線で描かれる渦巻文を主体とし、裏面上端（第33図29_b）には1個の凹部がある。福島県薄磯貝塚出土例（報告書第33図83）等に共通する。但し、薄磯貝塚では、出土土器群を考慮して大洞C_2式の新しい時期のものとしている。本遺跡出土のものは、IV群の6_a類（第21図96）を伴出する事、遺跡全体に大洞C_1・C_2式がほとんどない事から見て、コブ付土器様式第IV段階期に属すものと考える。また、大洞B_1式期のものとは、文様等で明確に異なっている。

3　遺　跡

検出された遺構や出土遺物の内容からは、ある程度安定した集落形態を示すと考えられる。出土土器は、後期末葉期～晩期初頭期にかけての2～3型式期を主体とし、その大方の比重はコブ付土器第IV段階にある。その他の時期では、遺跡域の一部を散発的に使用し、その痕跡を残すのみで、主体は他に求められよう。

引用文献一覧（年代順）

1	1962	「山形県野山遺跡の土器」林謙作『考古学雑誌第47巻第３号』
2	1962	「陸前宮戸島浜台囲貝塚出土の土器について」後藤勝彦『考古学雑誌第48巻第１号』
3	1963	『山形県遺跡地名表』山形県教育委員会
4	1965	「亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究」天羽利夫『史学第37巻第４号』
5	1965	「縄文文化の発展と地域性（東北）」林謙作『日本の考古学II』
6	1967	「石ヶ森遺跡の土器について」佐藤鎮雄『山形大学教育学部　歴研月報』
7	1967	『縄文晩期における〈土版の岩版〉研究の前提」小林達雄『物質文化16』
8	1967	「谷定出土の深鉢とその編年的位置について」安孫子昭二『庄内考古学第６号』
9	1967	「高畑出土の後期後半・晩期初頭の縄文式土器について」『庄内考古学第６号』
10	1969	『山形県史考古資料』山形県
11	1969	「東北地方における縄文後期後半の土器様式」安孫子昭二『石器時代９号』
12	1970	『飯豊連峰』山形県総合学術調査会
13	1971	『宮城県七ヶ浜町二月田貝塚』宮城県塩釜高等学校社会部
14	1971	「宮城県七ヶ浜町沢上貝塚の調査」後藤勝彦他『仙台湾』創刊号
15	1971	『神矢田遺跡第１次・第２次発掘調査報告書』山形県遊佐町教育委員会
16	1971	『高畠町史別巻考古資料編』高畠町（佐々木洋治）
17	1972	『神矢田遺跡第３次・第４次・第５次発掘調査と考察』山形県遊佐町教育委員会
18	1973	『玉川遺跡』山形県羽黒町教育委員会
19	1974	『数馬遺跡』山形県立博物館
20	1976	『白石市史別巻・考古資料編』白石市
21	1976	『熊登遺跡』新潟県岩船郡朝日村教育委員会
22	1977	『松原』（山形県米沢市松原遺跡調査報告書）置賜考古学会
23	1977	『山形県埋蔵文化財調査報告書第17集　山形西高敷地内遺跡』山形県教育委員会
24	1978	『山形県埋蔵文化財調査報告書第14集　的場遺跡』山形県教育委員会
25	1979	「茨城県広畑貝塚出土の後・晩期縄文式土器　金子裕之『考古学雑誌第65巻第１号』
26	1979	『考古第20号』福島県立磐城高等学校史学部
27	1979	「岩版・土版の研究序説」鈴木克彦『青森県立郷土館調査年報No５』
28	1979	『大畑台遺跡発掘調査報告書』日本鉱業株式会社船川製油所
29	1979	『山形県埋蔵文化財調査報告書第23集　郡之神遺跡・周辺遺跡』山形県教育委員会
30	1980	『萩生石籍遺跡一第１次発掘調査報告書一』山形県飯豊町教育委員会
31	1980	『薄磯貝塚』福島県立磐城高等学校史学部後援会
32	1980	「コブ付土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」安孫子昭二　『考古風土記第５号』
33	1980	「山形県にみる亀ヶ岡文化の特質と変容」佐藤庄一『考古風土記第５号』
34	1981	『図録石器の基礎知識III』鈴木道之助　柏書房
35	1981	『村山市史編集資料第９号　作野遺跡遺物集成』山形県村山市史編さん委員会
36	1981	「川原遺跡・遺跡範囲確認調査報告書」『新発田市埋蔵文化財調査報告書第３』新発田市教育委員会
37	1981	『山形県埋蔵文化財調査報告書第33集　山形市柏倉地区遺跡群・坊屋敷遺跡』山形県教育委員会
38	1981	『三貫地遺跡』福島県三貫地遺跡発掘調査団
39	1981	「石田遺跡」山形県西村山郡西川町教育委員会
40	1981	『縄文土器大成３』野口義磨　講談社
41	1981	『長者屋敷遺跡・第３次調査概報』長井市教育委員会
42	1981	『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会
43	1981	「中期の土器一大木式土器・丹羽茂、後期の土器一コブ付土器・安孫子昭二『縄文文化の研究３』雄山閣
44	1982	『縄文土器大成１』岡本勇　講談社
45	1982	『山形県埋蔵文化財調査報告書第60集　うぐいす沢遺跡第２次調査』山形県教育委員会

図　　版

図版 1

町下遺跡遠景

町下遺跡近景

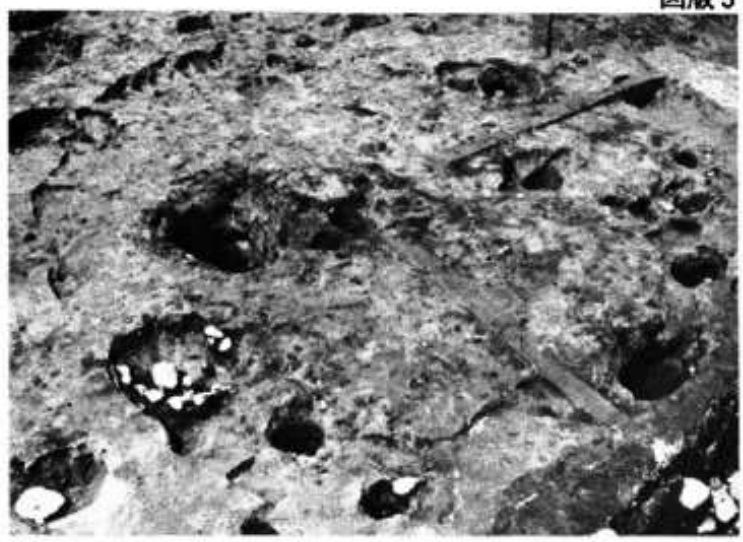
基本層序

図版 2

トレンチ状況

A 地区プラン確認状況

A 地区完掘状況



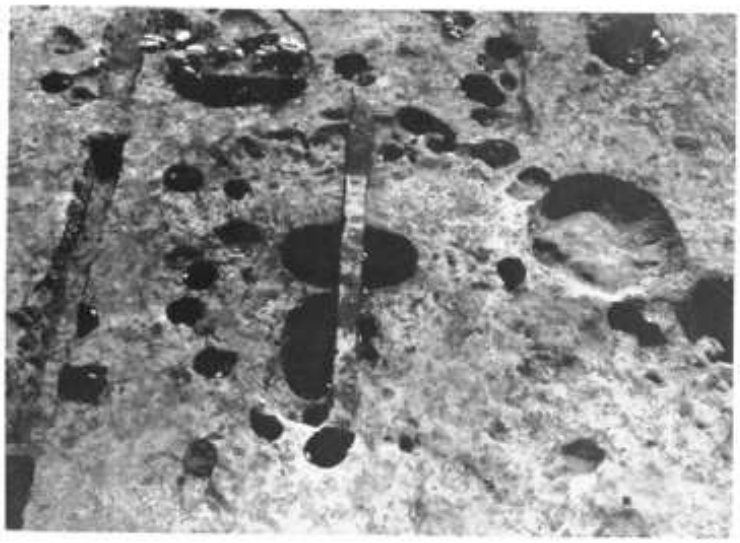
1号住居跡

2号住居跡

87号土壙
3号住居跡

図版 4

4 a 住居跡



4 b 住居跡

A 地区北西地区
4a・5a・5b 住居跡

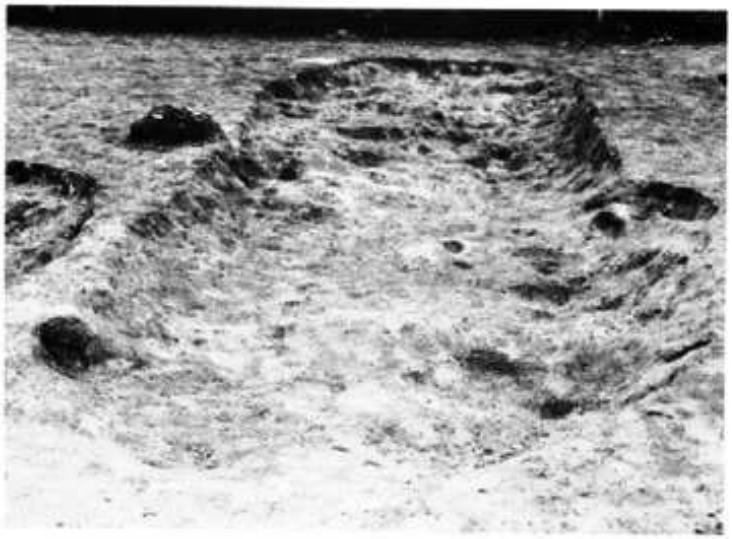
SM194・SM70

SM70

SK60内集石

図版 6

B地区完掘状況



B地区201号土壙

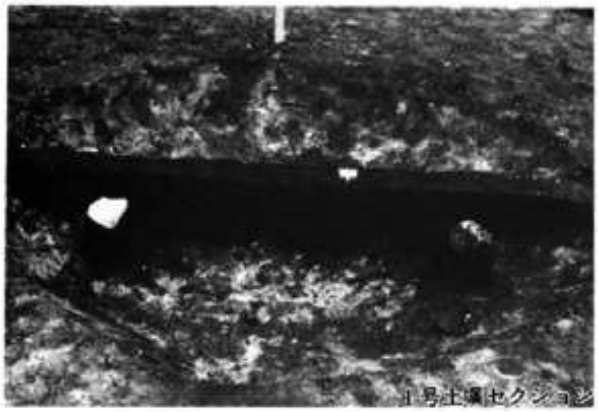
B地区201号土壙出土状況

EU230 検出状況

EU230 出土状況

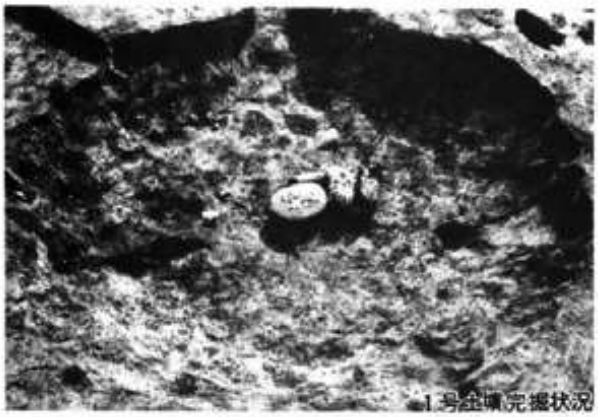
同　上

図版 8



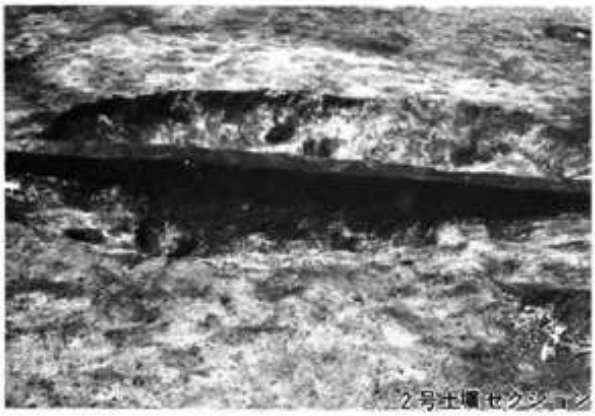
1号土壙セクション

9号土壙完掘状況



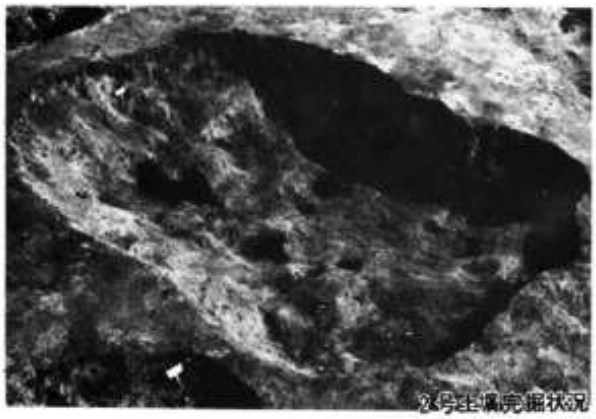
1号土壙完掘状況

9号土壙セクション



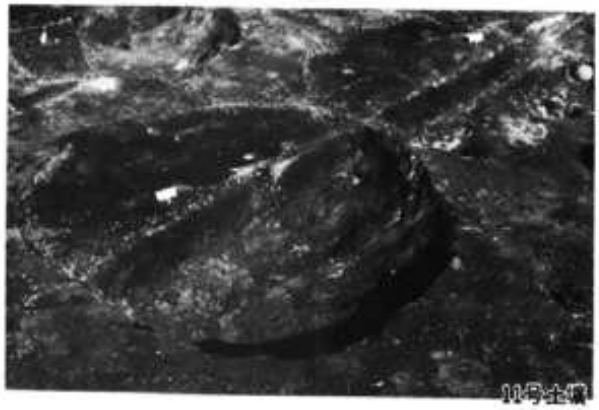
2号土壙セクション

10号土壙セクション

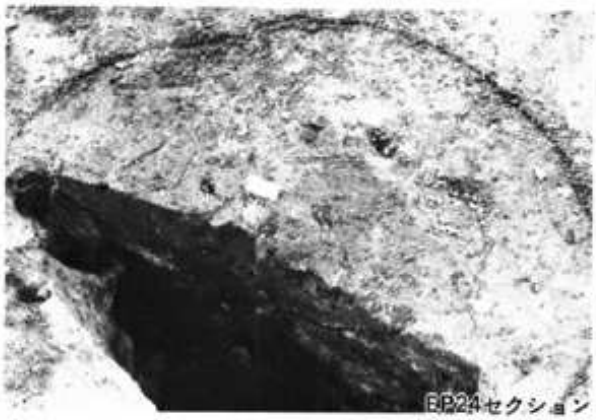


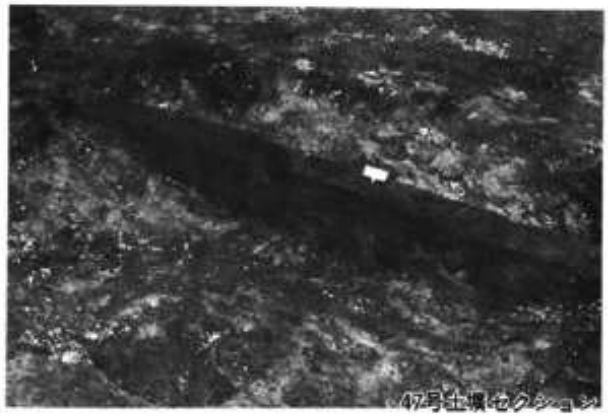
2号土壙完掘状況

10号土壙完掘状況


11号土壙

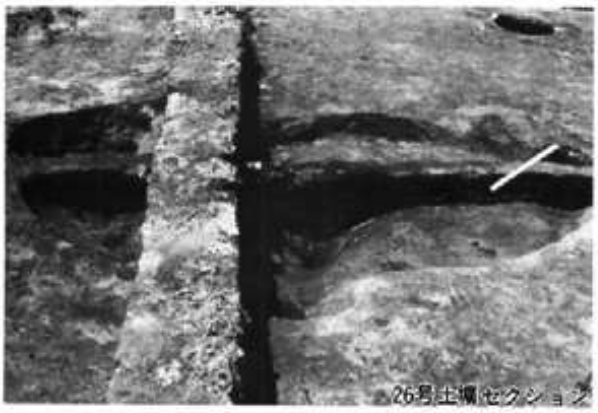
29号土壙セクション


EP24セクション


47号土壙セクション

25号土壙セクション

51号土壙セクション


26号土壙セクション

38号土壙（ローム マウンド）

図版10

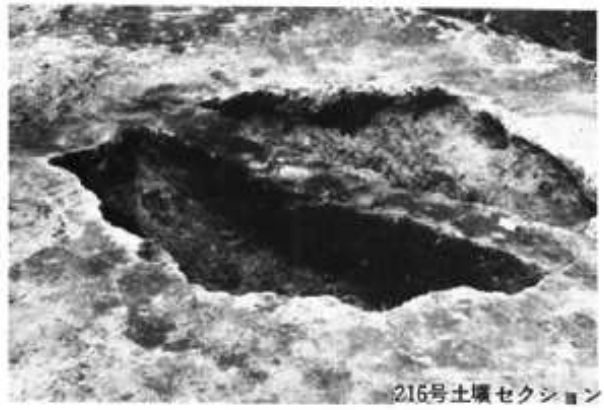
48号土壙セクション

175号土壙セクション

48号土壙出土状況

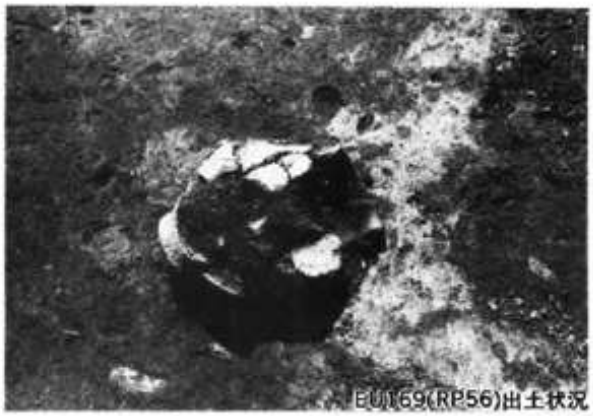
188号遺構、187号遺跡
(ST4b)

86号土壙


216号土壙セクション

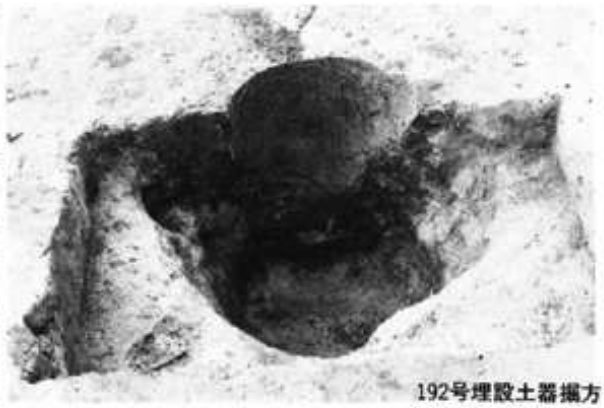
87号土壙セクション

217号土壙セクション

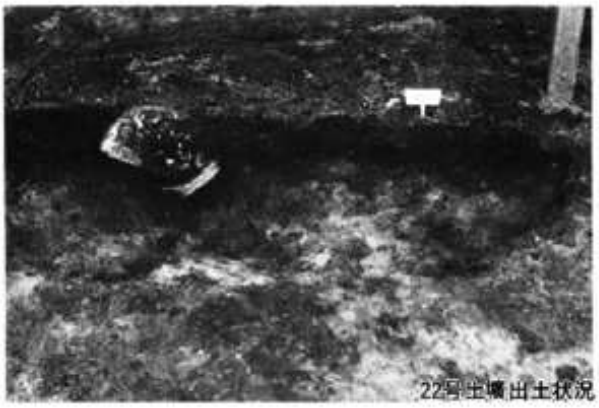

EU169(RP56)出土状況

169号埋設土器

EU168(RP57)出土状況


192号埋設土器掘方

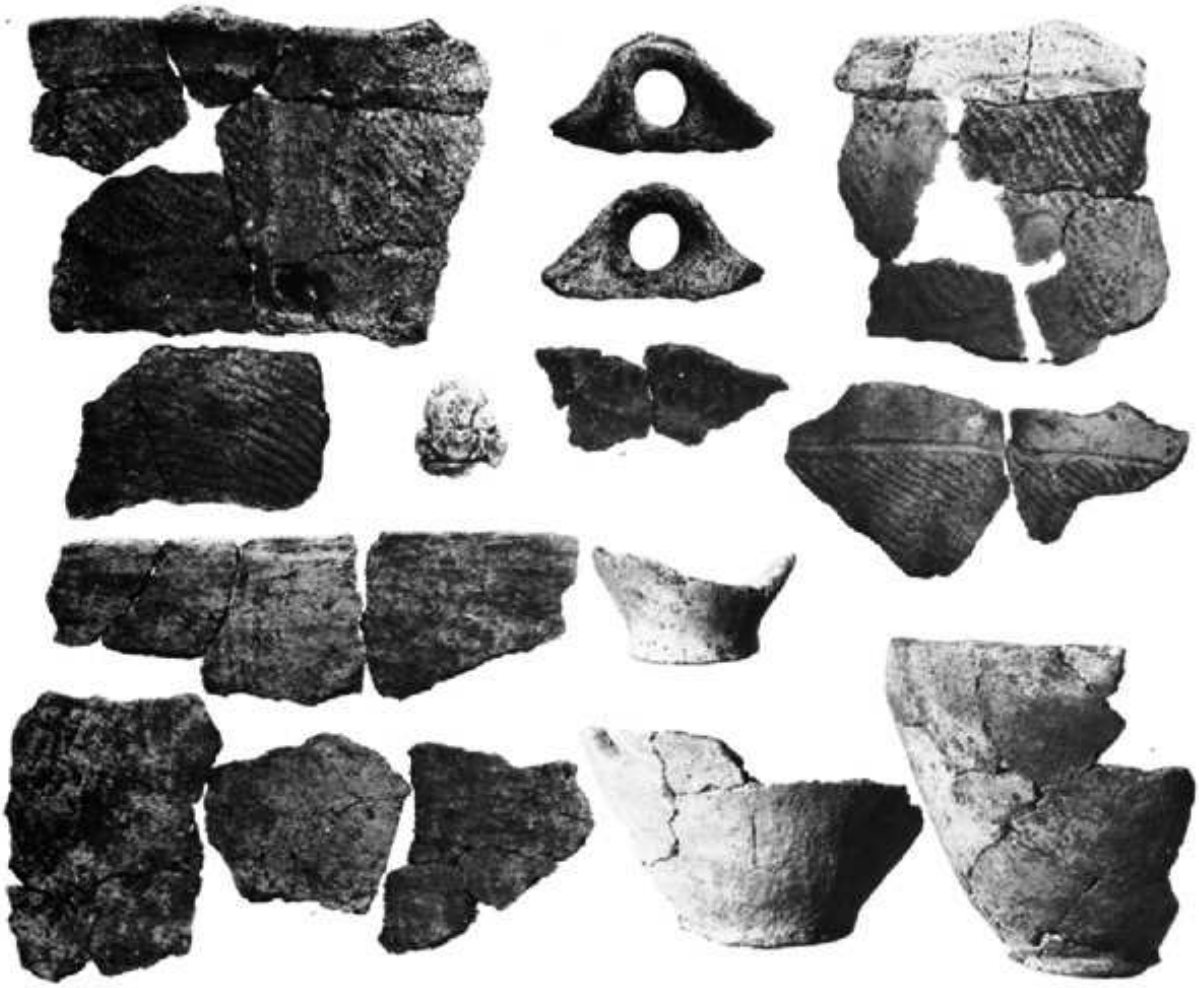
125号埋設土器


22号土壙出土状況

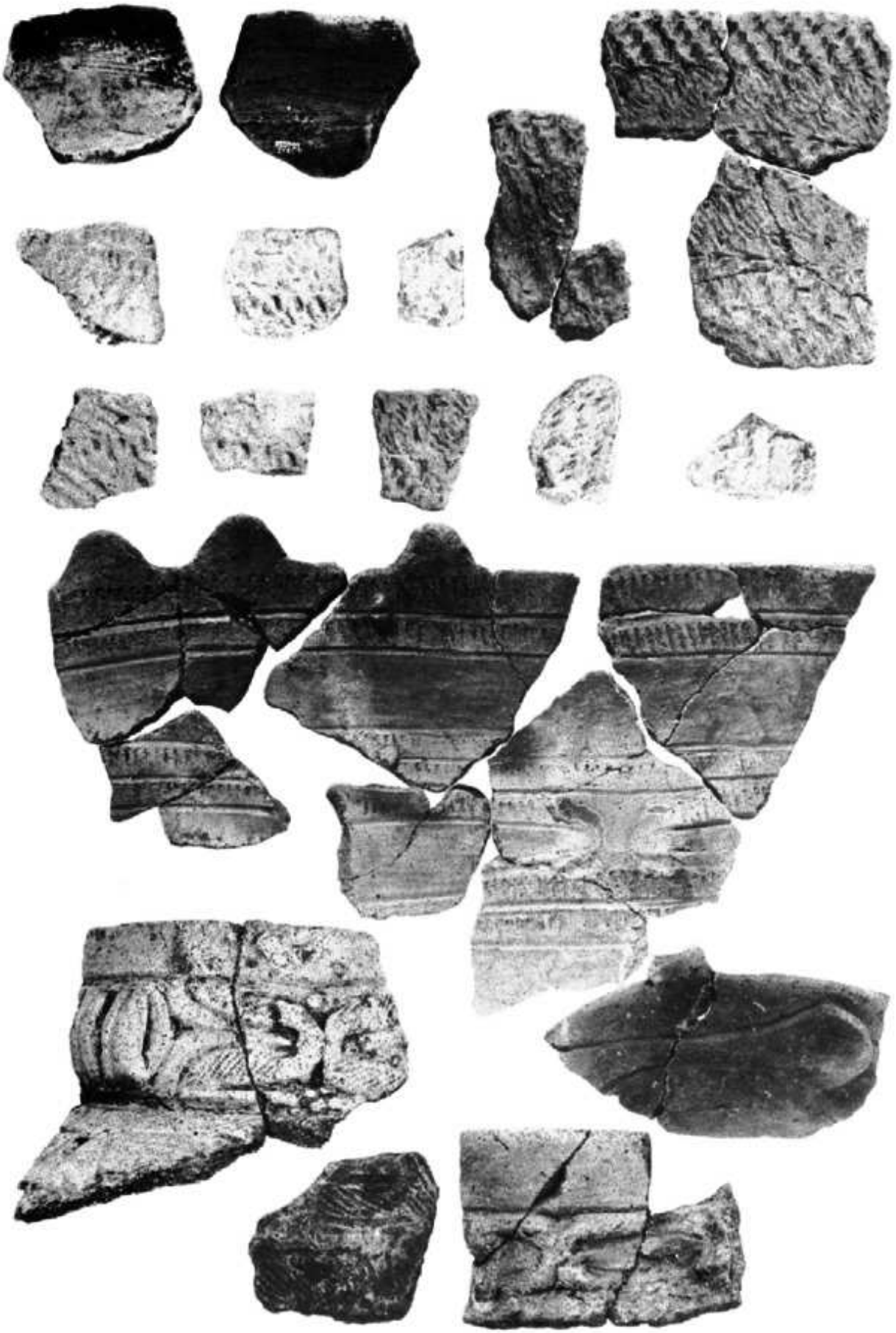
168埋設土器

224号土壙

図版12



出土土器（1）
縄文中期末
縄文後期末



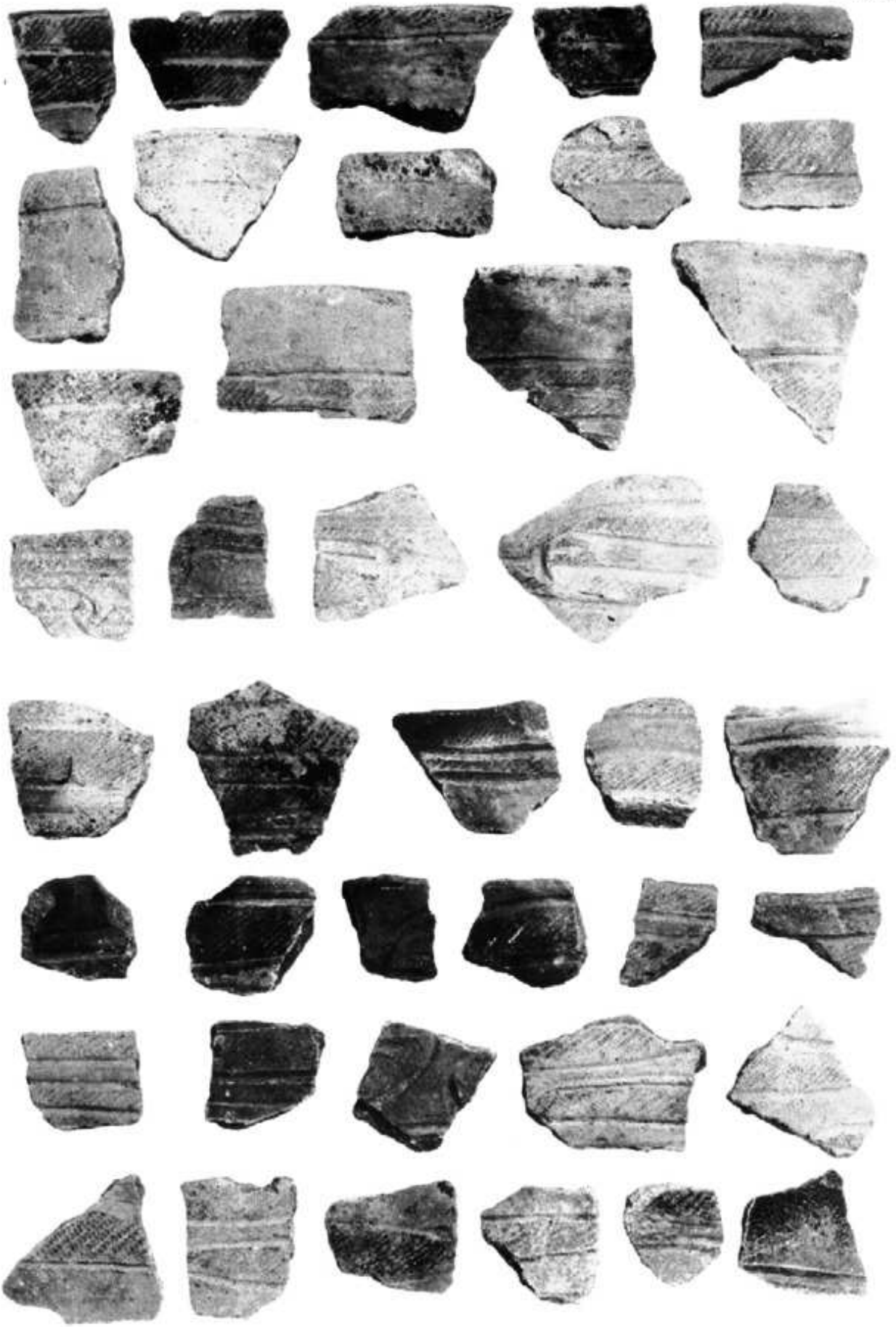
出土土器（2）
縄文早・前期
縄文後期末

図版14

出土土器（3）
縄文後期末

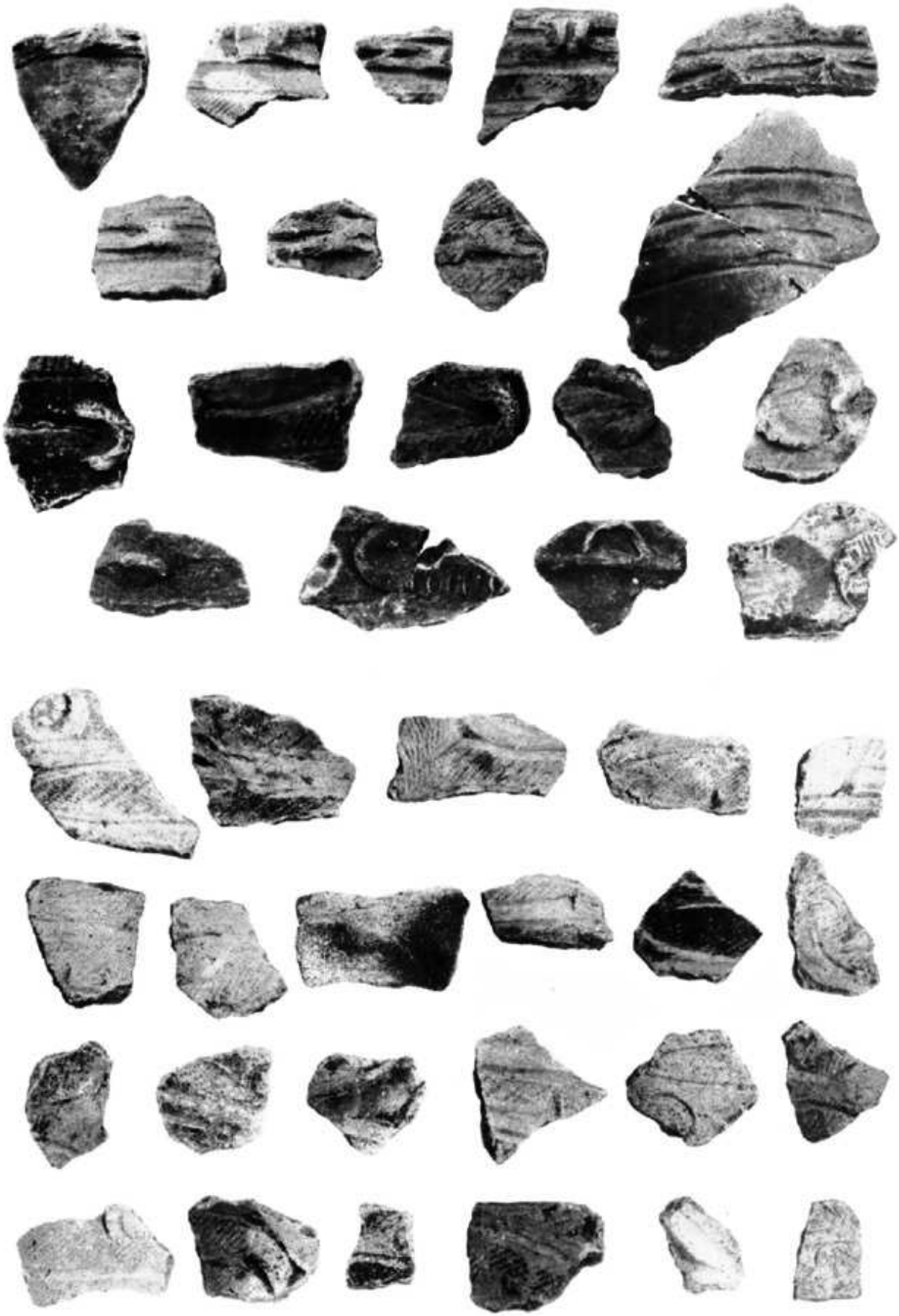
出土土器（4）
縄文後期末

出土土器（5）
縄文後期末



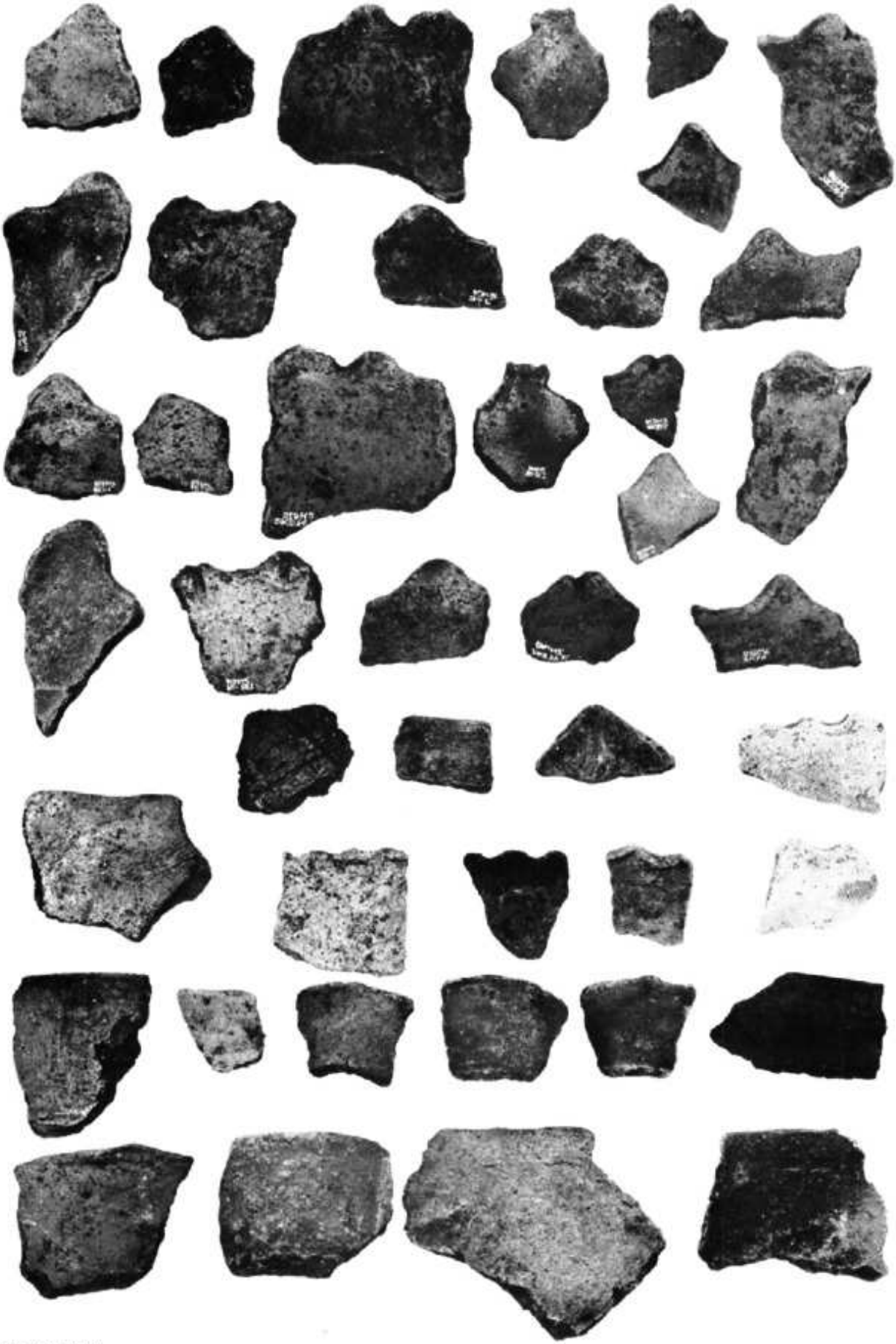
出土土器（6）
縄文後期末

図版18



出土土器（7）
縄文後期末

出土土器（8）
縄文後期末



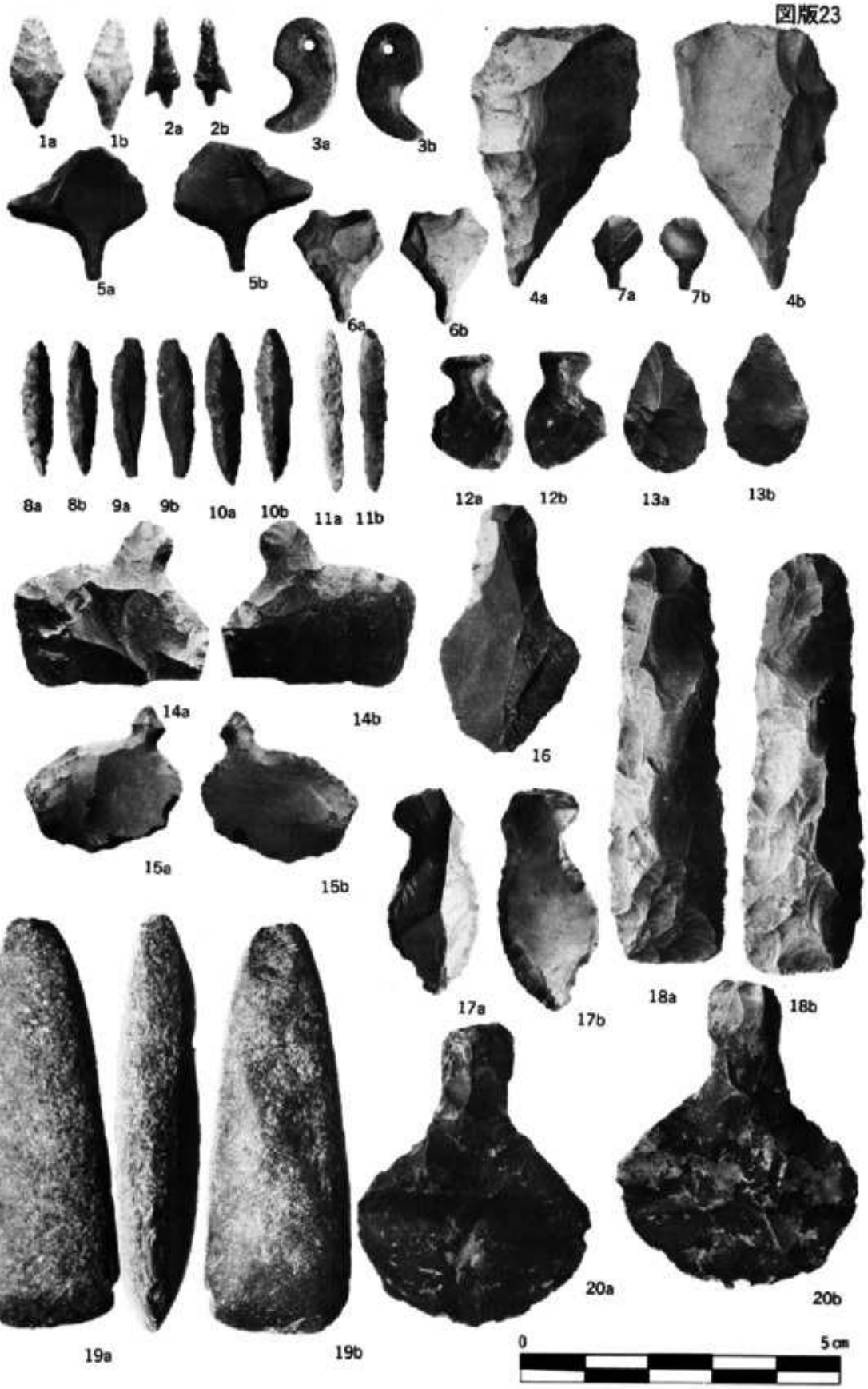
出土土器（9）
縄文後期末・無文粗製土器

出土土器（10）
縄文後期末
縄文後期初頭
縄文晩期末

図版22

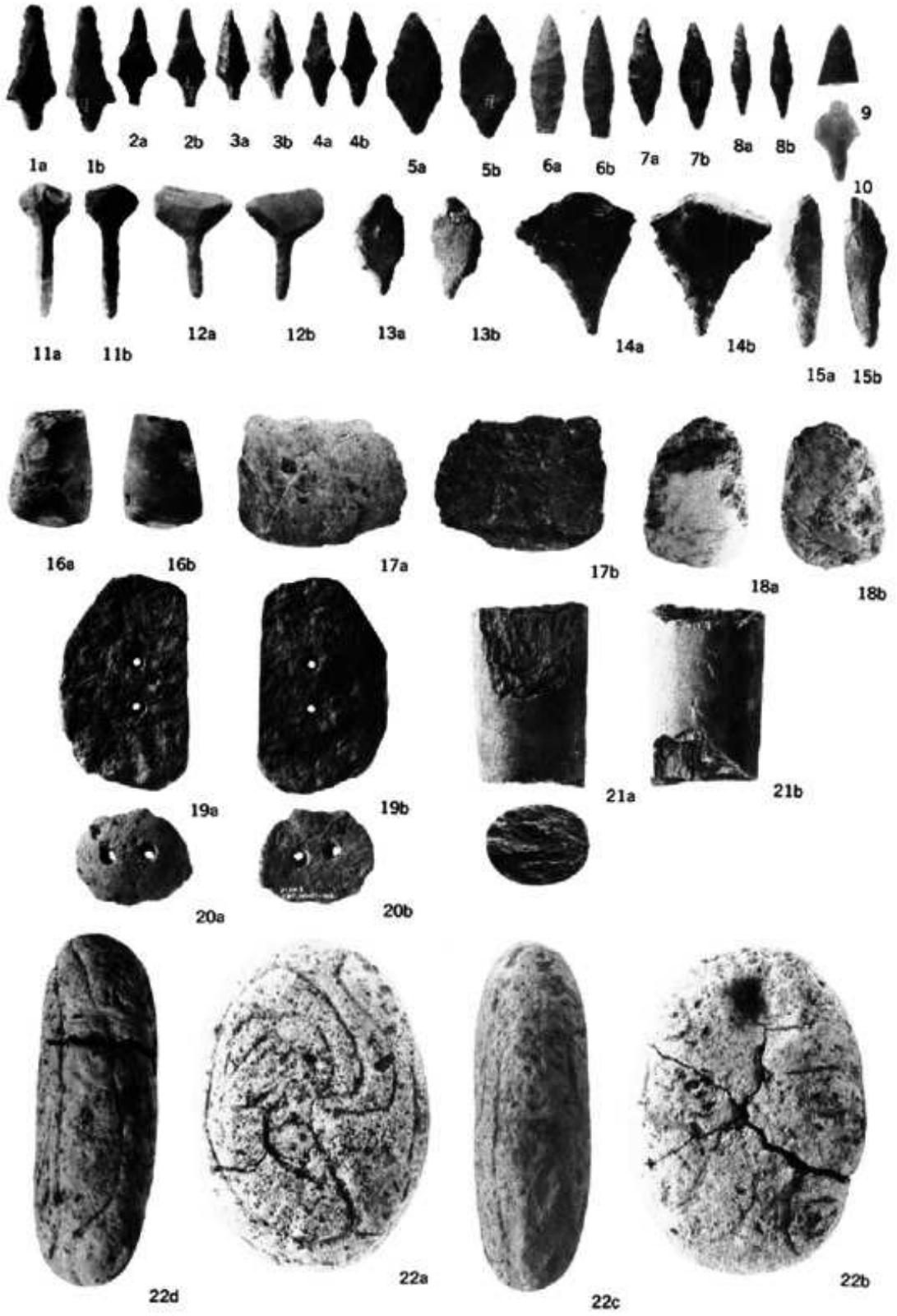
出土土製品　耳飾・注口土器注口部

図版23



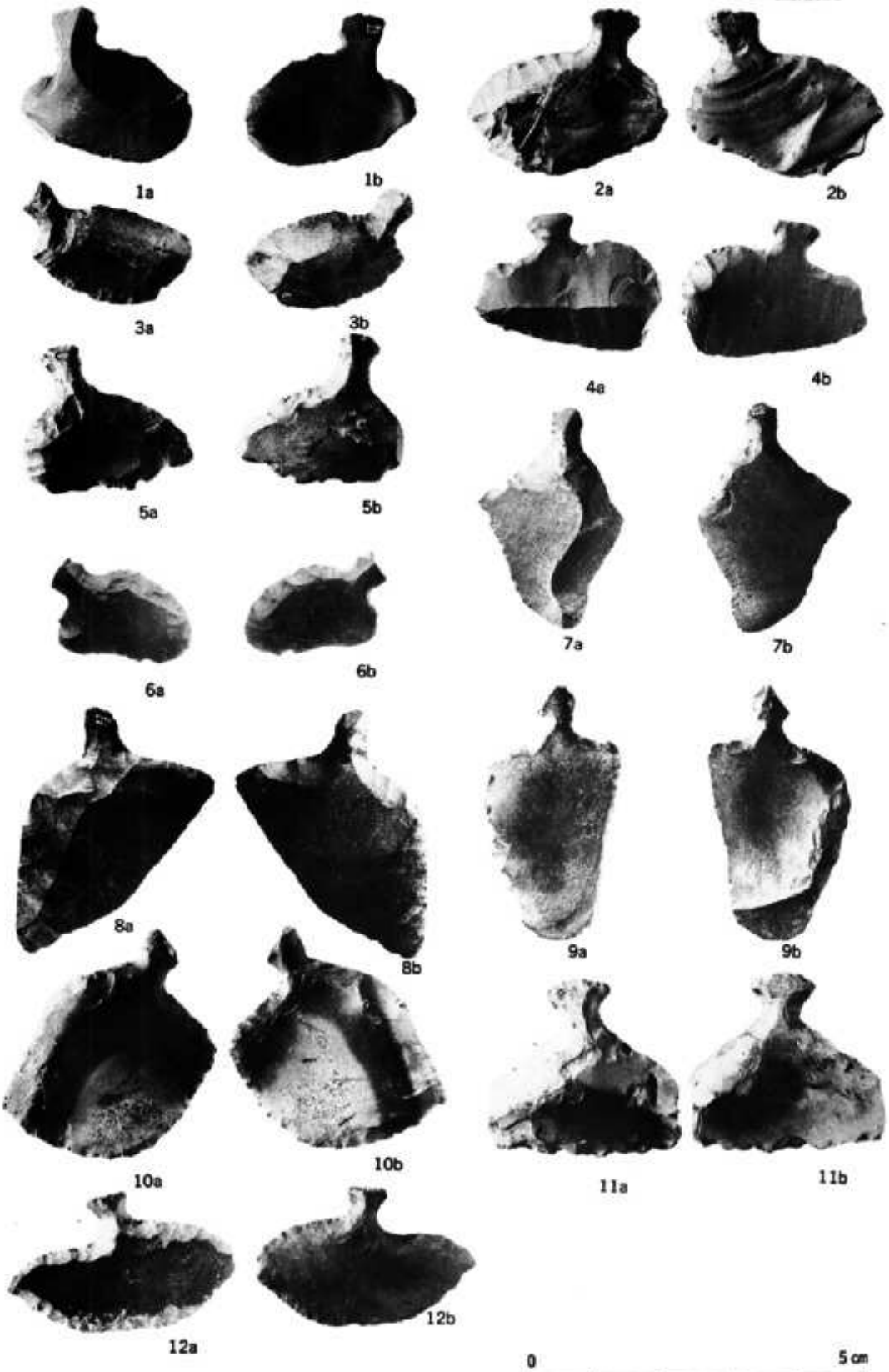
斉藤清一氏・田制寛一氏採集石器

図版24



出土石器（1）　石鏃・石錐・磨製石斧・穿孔石製品・石棒・岩版

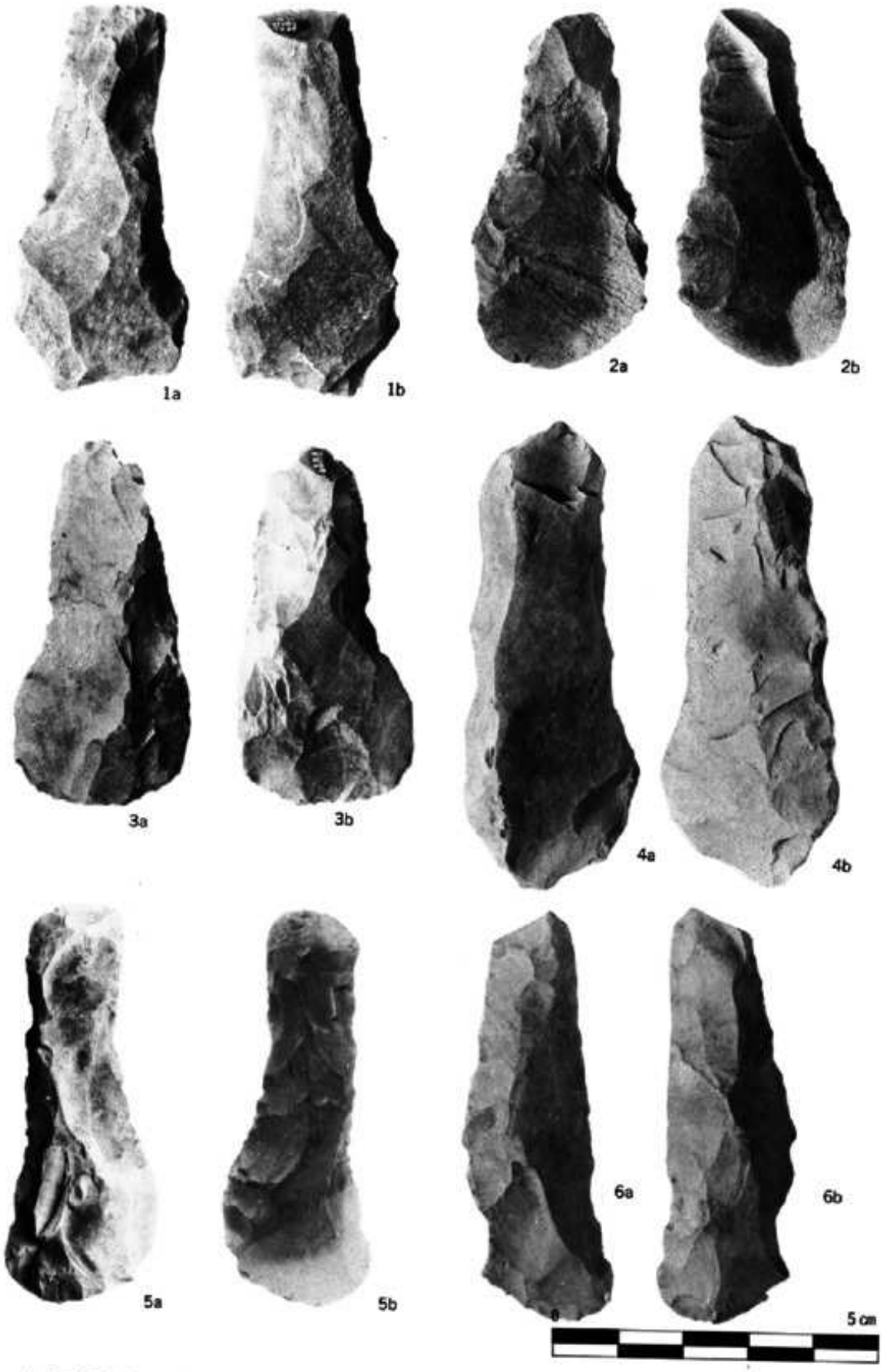
1(RQ12) 2(RQ10) 3(RQ48) 4(RQ1) 5(RQ6) 6(RQ51) 7(RQ13) 8(RQ11) 9(RQ54) 10(RQ49) 11(RQ41) 12(RQ21)
13(RQ31) 14(RQ15) 15(RQ42) 16(RQ8) 17(RQ7) 18(RQ84) 19(RQ51a) 20(RQ51b) 21(RQ92) (RQ55)



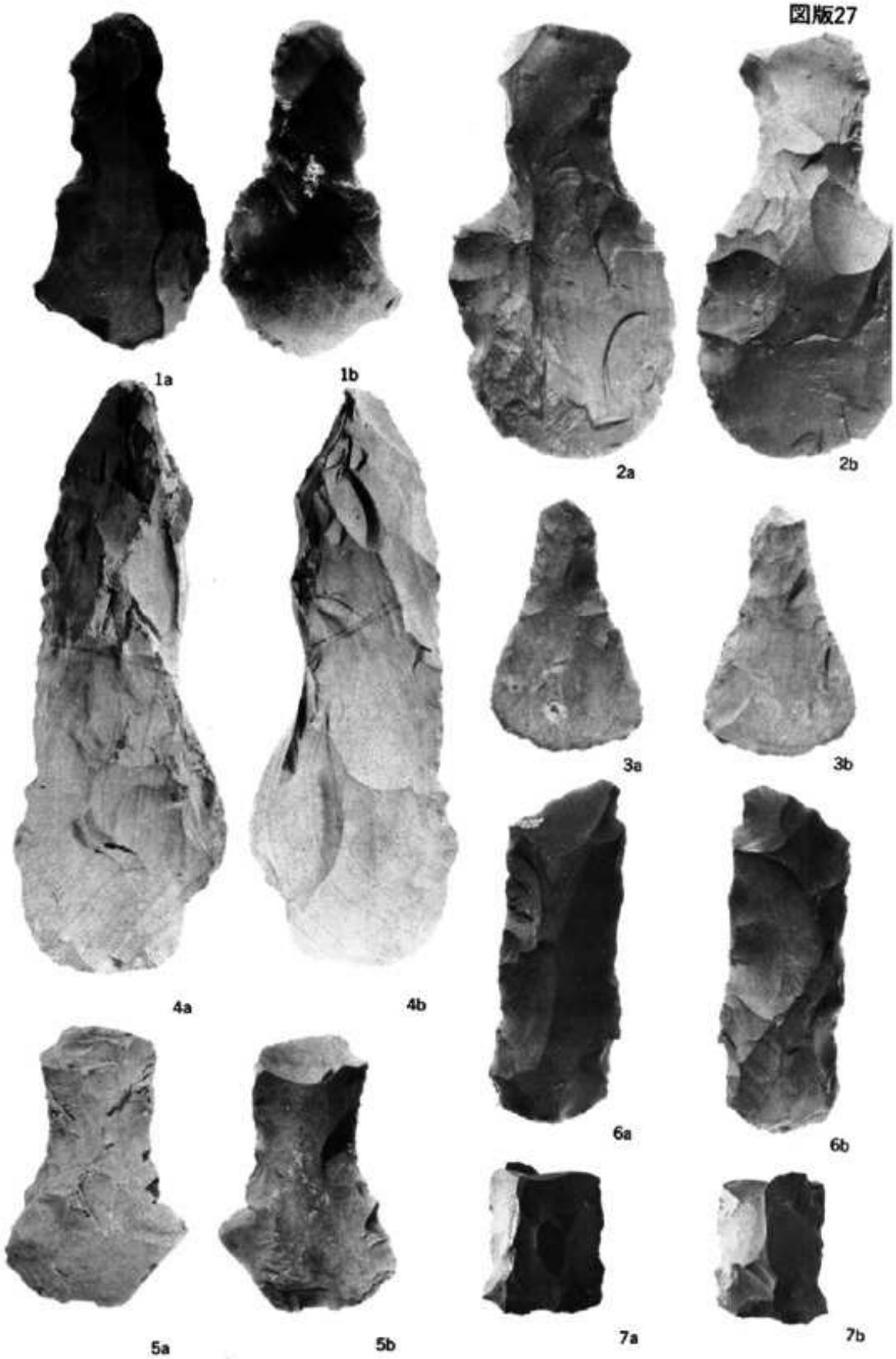
1(RQ33) 2(RQ3) 3(RQ50) 4(RQ39) 5(RQ5) 6(RQ4)
7(RQ36) 8(RQ34) 9(RQ32) 10(RQ20) 11(RQ9) 12(RQ40)

出土石器（2） 石匙

図版26



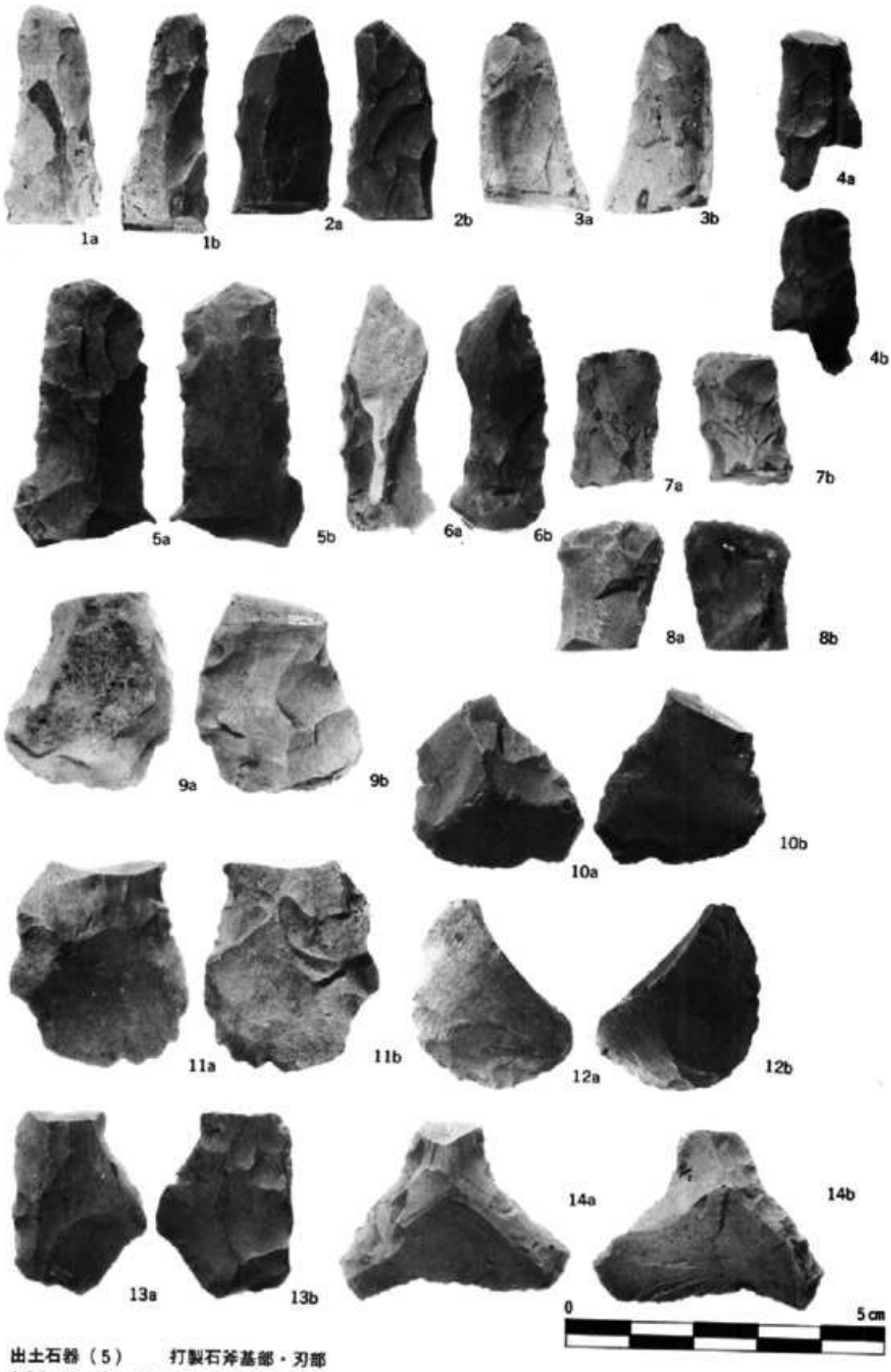
出土石器（3）　打製石斧
1(RQ37)　2(RQ22)　3(RQ2)　4(RQ52a)　5(RQ36)　6(RQ43)



出土石器（4）　打製石斧

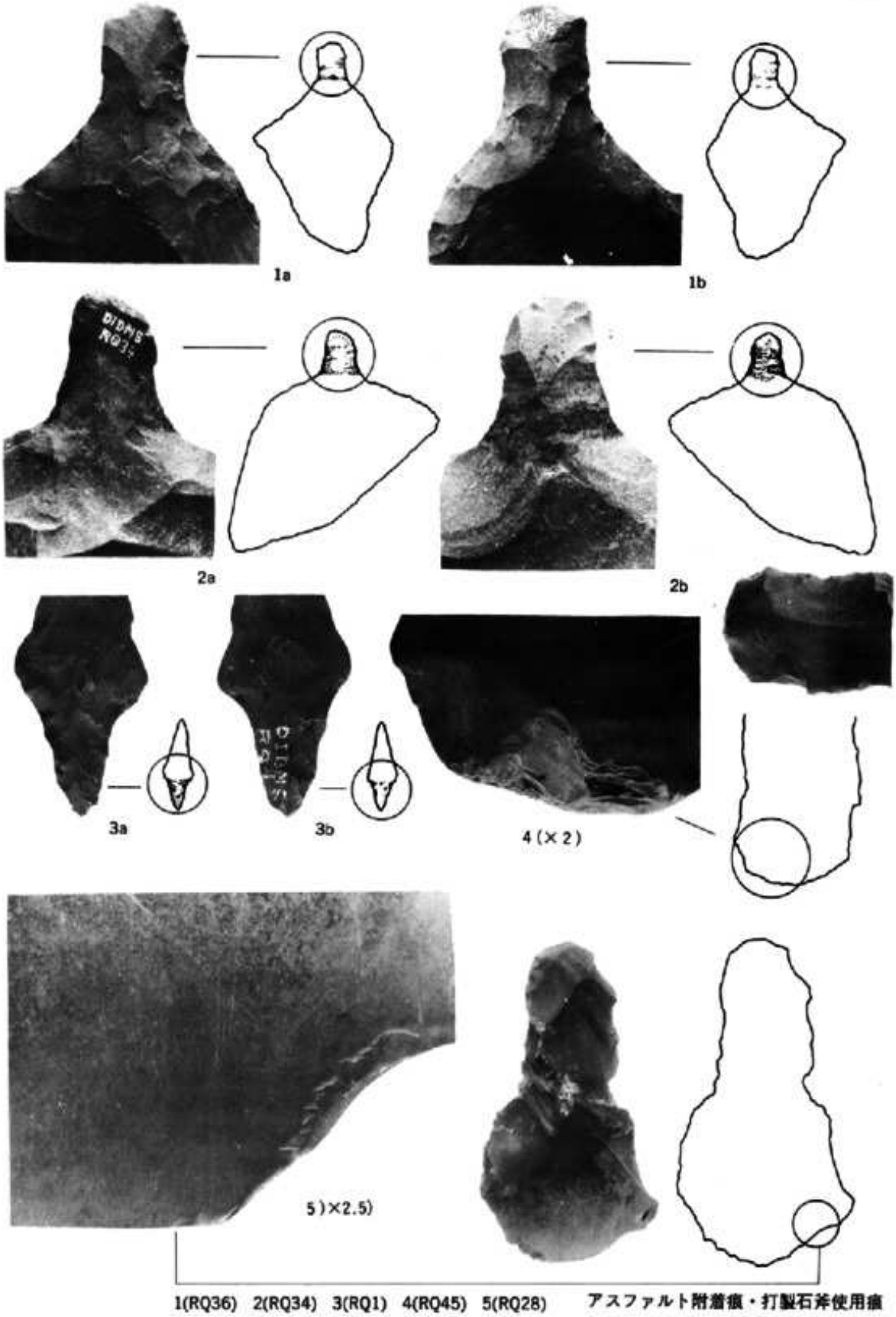
1(RQ28)　2(RQ44)　3(RQ26)　4(RQ53)　5(RQ46)　6(RQ45)　7(RQ23)

図版28



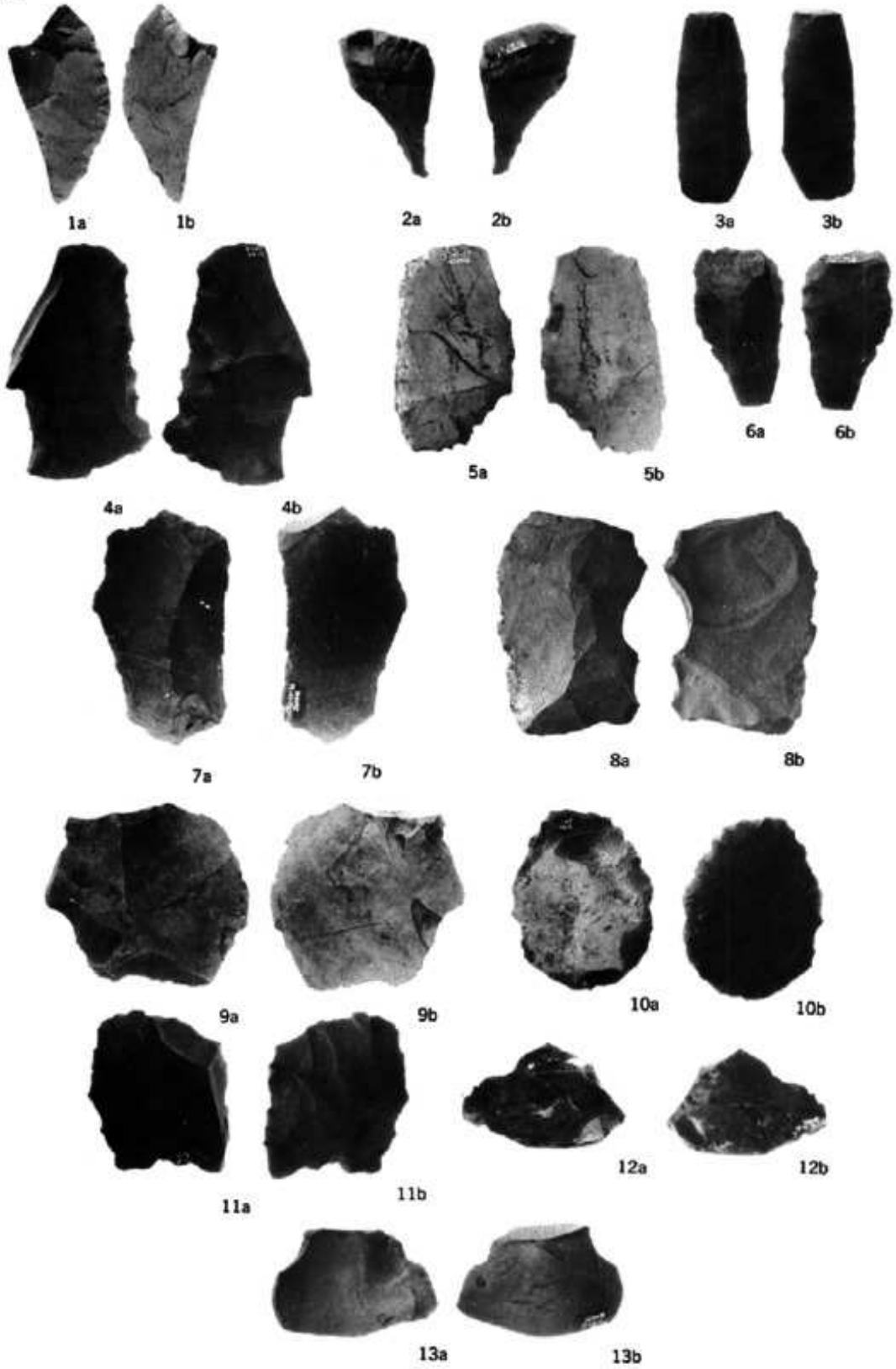
出土石器（5）　打製石斧基部・刃部

1(RQ109) 2(RQ91) 3(RQ19) 4(RQ106) 5(RQ102) 6(RQ87) 7(RQ103) 8(RQ107)
9(RQ100) 10(RQ108) 11(RQ52b) 12(RQ94) 13(RQ93) 14(RQ95)

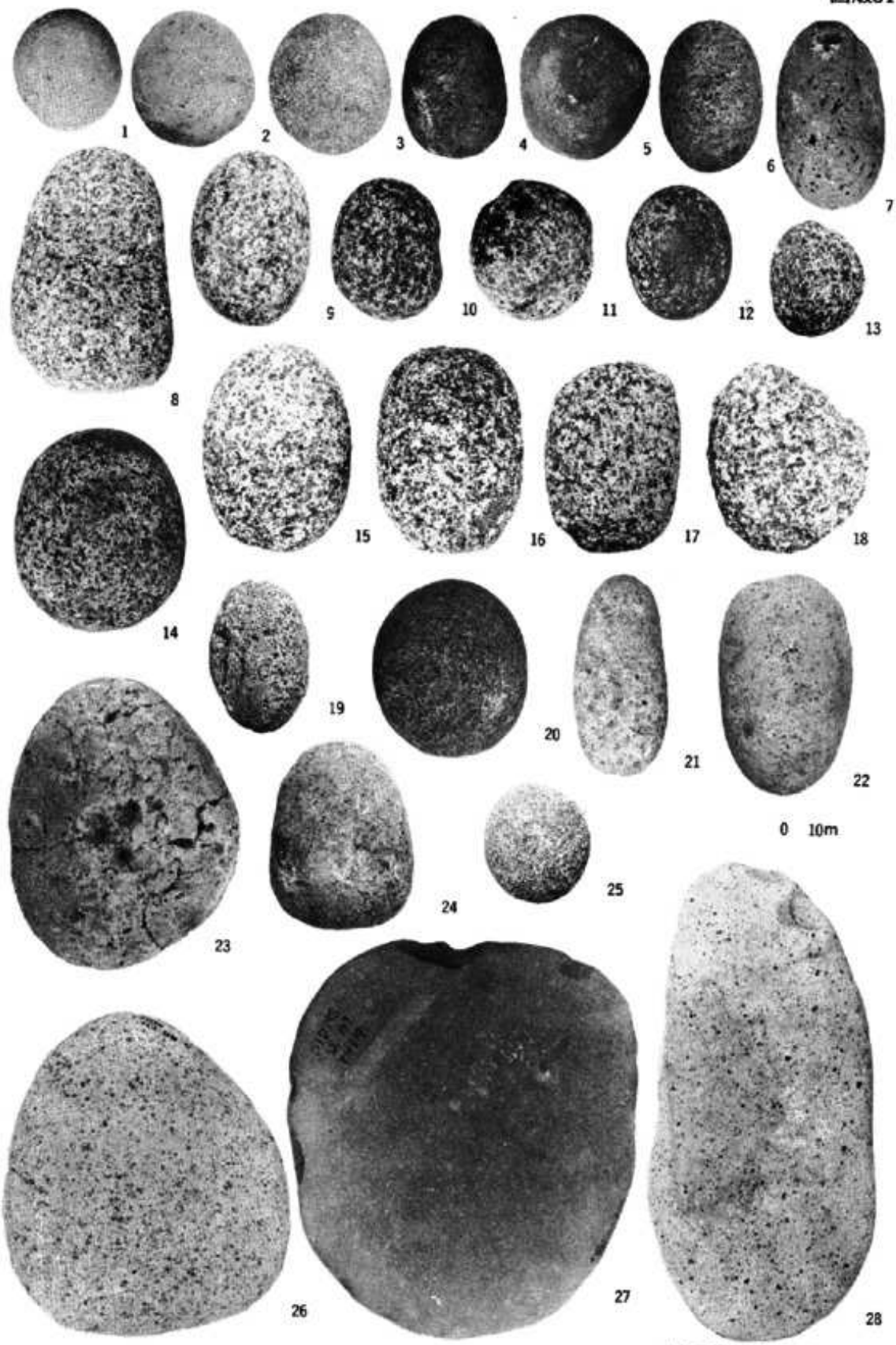


1(RQ36) 2(RQ34) 3(RQ1) 4(RQ45) 5(RQ28) アスファルト附着痕・打製石斧使用痕

図版30



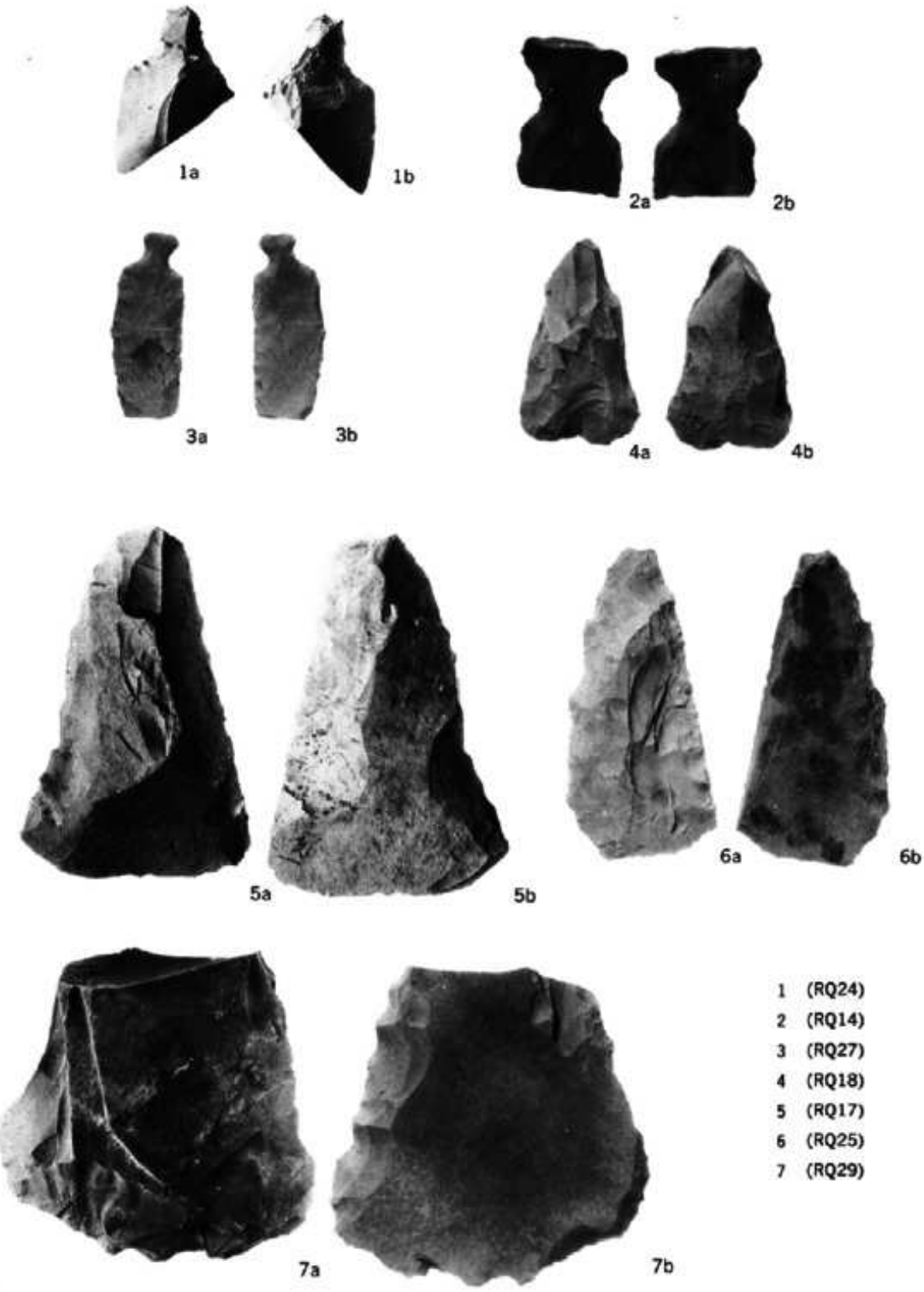
出土石器（6）　**掻・削器**　1(RQ115) 2(RQ97) 3(RQ88) 4(RQ35) 5(RQ99) 6(RQ90) 7(RQ116) 8(表採) 9(RQ98) 10(RQ16) 11(RQ118) 12(RQ117) 13(RQ89)



出土石器（7）磨石・凹石・石皿

1(RQ82) 2(RQ30) 3(RQ79) 4(RQ77) 5(RQ68) 6(RQ83) 7(RQ67) 8(RQ64) 9(RQ110) 10(RQ61)
11(RQ56) 12(RQ57) 13(RQ66) 14(RQ76) 15(RQ70) 16(RQ74) 17(RQ65) 18(RQ59) 19(RQ69)
20(RQ78)
21(RQ58) 22(RQ60) 23(RQ63) 24(RQ75) 25(RQ82) 26(RQ80) 27(SK109) 28(RQ81)

図版32



出土石器（8）石匙・箆状石器

山形県埋蔵文化財調査報告書第57集

町下遺跡（まちしもいせき）

発掘調査報告

昭和57年3月28日　印刷

昭和57年3月31日　発行

発行　山形県
　　山形県教育委員会

印刷　㈱大風印刷